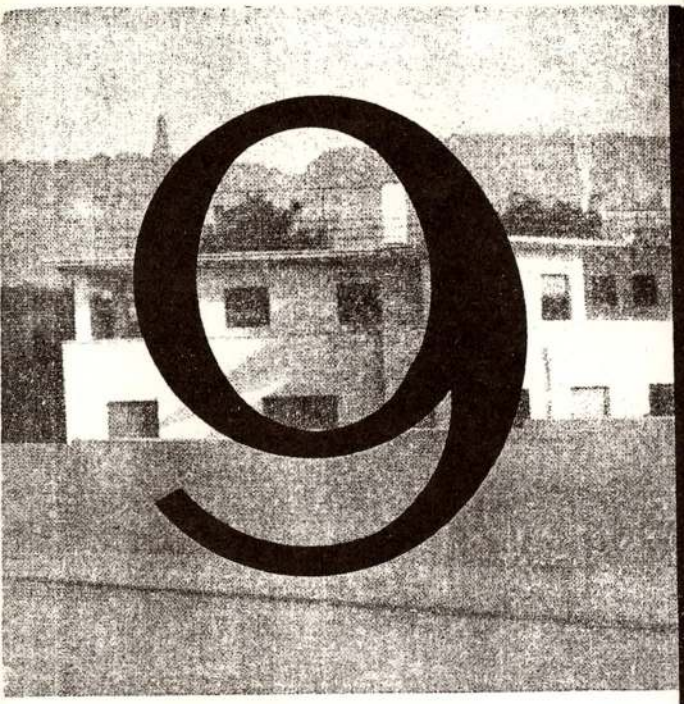
大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
昭和六年八月廿七日印刷納本
昭和六年九月一日發行（毎月一回一日發行）
（第拾四輯第九號）

建築と社會



9

特輯記事

住宅

第十四輯第九號
昭和六年九月一日
日本建築協會

三建—製造

三機—販賣



（寫眞は三建式サツシ ドアー，シヤツター，間仕切御採用の最近竣工の某氏邸）

三建工業株式會社

總代理店

三機工業株式會社

本　店　東京市麹町區有樂町一丁目一〇(三信ビル內)

電話銀座 (57) 5140 (10)

支　店　大阪市東區備後町二ノ二一(野村ビル內)

電話本町(24)1166・1167・1525

取扱店　各地三井物産株式會社支店出張所

（型錄贈呈）

商標 OHNO SHUTTER PATENTED 登錄

特許第七九三五號（延長許可）外十數件併用

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター
大野式自働防火鎧戸
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐
大野式轉子入戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉
應用特殊機械類
特許不二式サッシ受托販賣

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)七三三七・七三三八

八八五(45)島福話電・二中島福上區花此市阪大・所詰員張出付取

世界最新建築圖集

日本建築協會編

1929～1930 年版

人は常に新しいものを欲求してゐるが、これは精神の糧こして洵に當然なことで、殊に建築家が新しい建築に關心を有つて、これが研究消化に努むることも亦極めて當然であつて、それ故にその使命が完璧さるゝのである。

1929~1930 兩年度に亘りて歐米諸國で建築された多くの事務所、銀行、官衙、學校、公會堂、圖書館、教會堂、住宅、工場等の中で尖端的な最新建築を紹介したのが本書である。大體に於て建築の最近潮流、傾向なりが本書に據つて一目瞭然たるわけである。向學の學生諸君、建築家及一般同好者諸氏にこつて絶好の參考書なりこ信じます。

● **體　裁**　四六版 **100頁**

上質全**アート紙**

寫眞版**500**餘　　**定　價　50錢　稅10錢** ●

社團法人 **日本建築協會發行**	大阪.西區.大同ビル720 振替口座大阪 39975	賣捌 丸善本支店 柳々堂書店

社團法人 日本建築協會々報

會合

住宅委員會第二分科會並第三分科會

時　七月二十日午後五時三十分―同八時三十分

所　ライオン食堂

出席者　第二分科　南、酒井、中村、丹藤

記事　一、全國氣象年表を購入し次回より調査要項を列記の上研究することを申合す

第三分科

出席者　魚田、木野山、鈴木、增山、山田

記事　一、第一、二、三號の住宅の臺所設備原案に付協議決定す

一、九月より實物住宅内に於て委員會を開催する事とし增山委員之が交渉に當ることゝす

法制委員總會

時　七月二十二日午後八時―同十時二十分

所　森永キャンデーストーアー

出席者　委員長　池田

第一分科　鳥井、池田(唯)、山田、吉田

第二分科　石川、佐藤(松)、作間、酒井

第三分科　久保田

記事　一、八時委員長開會を宣し直ちに各分科の經過報告に入る

一、第一分科に於て目下研究中の地域に關する件及乙種耐火構造建築に關する件は六大都市警察部長宛に照會狀を發する事を決議す

一、曩に全國各府縣市に問合せたる失業救濟事業に係る建築物有無の件に付今日迄に集りたる回答表を鳥井主査朗讀報告す

一、例年の通八月は分科會並委員總會を開會せざる事を申合せ種々懇談の後散會す

常務會

時　八月十日午後五時三十分―同八時三十分

所　純清クラブ

出席者　片岡、日高、光安、小川(陽)、小川(安)、阪井、森本、大原、岡部、德政、小西

報告及議事

一、七月分會計報告

一、香里園住宅展委員會經過報告

一、鈴蘭臺住宅展委員會經過報告

一、會館建設調査準備委員會報告

一、法制委員會委員長より昇降機取締規則研究に關する報告

一、會員退會届出の件

一、其他

第七回全國工業家大會

九月、十九、二十、二十一日　新潟縣長岡市を中心に上越線開通紀念産業博覽會を機として

九月一日には上越全線の開通式が行はれ、八月下旬から九月末迄長岡市に於て産業博覽會が開かれる。長岡市、同商工會議所では長岡高等工業學校と提携して此機會に第七回全國工業家大會の開催を要望して來たので社團法人工政會では我工業界の時局に鑑み極めて適當なる時機と場所とを得たものと認めた。詳細は最後の決定を俟つて參加希望者に通知する豫定であるが、凡そ今日豫定されてゐるところは、東京並に他地方の人達は九月十九日早朝上野發午後長岡市着、午後三時半より長岡市公會堂に於て通俗講演會同夕刻より長岡館に於て大懇親會。

第二日(二十日)は午前九時長岡市公會堂に於て大會が開かれ、大會々長井上匡四郎子の演説、總理大臣、各大臣、縣、市、會議所等の祝辭があり、次で我邦工業界將來の方針を暗示する重大なる決議を行ひ、引續き名士の講演に移り、正午閉會。

第三日(二十一日)の工場視察は二班に分れる。

柏崎班は理化學興業株式會社の比角工場、日本石油株式會社の高町油田及びガソリン工場、信濃川大河津分水工事等。

新潟班は新潟鐵工所、新潟工場日本石油株式會社沼垂製油所、北越製紙株式會社工場等。

申込は九月五日迄に、東京市丸ノ内有樂館社團法人工政會内及長岡市四郎丸町長岡高等工業學校内、何れも大會事務所に申込まれたい。

會費は大會經費金二圓、懇親會出席者は別に三圓を申込と同時に拂込むこと。

參加者の特典としては、各地よりの省線二、三等往復二割引(九月十二日より三十日迄有効)、産業博覽會、長岡鐵道、栃尾鐵道の各優待券、其他がある。

轉勤轉居

會員

片岡　安君　西區土佐堀通一ノ一大同ビル六一六號片岡事務所(電土四〇四六)(改稱)京都市伏見區桃山町松平筑前(電伏見三四三)

桐本　楠雅君　住吉區北田邊町股ケ池八七五

川勝源兵衞君　西成區南海通一ノ三七

大澤　幸平君　住吉區昭和町東四丁目一七

祐安　薫信君　神戸市東雲通二ノ一〇、谷井氏方

水上　昌三君　大阪府泉南郡貝塚町字津田六五、大林組出張所内

森西喜太郎君　住吉區阪南町西四丁目二

會員（地方在住）

松浦松之助君　東京市芝區芝口一丁目九
住友銀行新橋支店建築場東京府下大森
山王二七五二

竹谷德治郎君　靜岡市鷹匠町二ノ四

豐島義政君　東京市外目黑町大字中目
黑一一三一

山本勝君　松山市三番町一六日本銀
行松山支店新築工事場清水組作業所

山崎源逸君　東京府荏原郡碑衾町大字
衾二三七二
普通贊助員

福田繁太郎君　神戸市中山手通二丁目八
八ノ二福田工業所（電話合一二一四）

坂本敏克君　東京市外王子町豐島七二
一

折田義雄君　神戸市八幡字深田一四

內浦寅吉君　濱速區惠美須町二丁目惠
美須ビル三階五號室

前田佐太郎君　金澤市殿町一一櫻井氏方

甲斐郁郎君　住吉區濱口町一七村岡氏
方

大野喜作君　高雄州鳳山郡九曲堂取入
口

入退會

入會者

普通贊助員

小川光一君　此花區上福島北二丁目三
八（參宮急行電鐵株式會社技術部）

高橋眞君　西區南堀江下通二丁目二

○內外土木建築材料合資會社
糸井直太郎君　西區南堀江下通二丁目二

○內外土木建築材料合資會社
阿部保行君　神戶市大谷町一ノ三七田
中氏方

淺井銈次郎君　西區西道頓堀通三丁目合
名會社淺井商店

退會者

會員　花田孝二郎君　中村琢治郎君

寄贈雜誌

建築雜誌　每號　建築學會
日本建築士　每號　其會
建築世界　每號　其社
建築新潮　每號　洪洋社
建築學研究　每號　其會
建築畫報　每號　其社
建築　每號　中央建築會
住宅　每號　住宅改良會
インターナショナル建築　每號　其會
滿洲建築協會雜誌　每號　其協會
新建築　每號　其社
鮮朝と建築　每號　朝鮮建築會
國際建築　每號　其社
土木建築　每號　其社
土木建築材料商報　每號　其社
土木建築工事畫報　每號　其社
臺灣建築會誌　每號　其社
都人　每號　其社
大阪工業俱樂部　每號　其社
建築業協會々報　每號　其協會
東京土木建築業組合報　其組合
大阪土木建築業組合報　每號　其組合
庭園と風景　每號　日本庭園協會
日刊工業新聞　每號　其社
東洋建材時報　每號　其會
名古屋工業會々報　每號　其社
日本建材新聞　每號　其社
木材彙報　每號　大阪木材協會
木材新聞　每號　關西木材商報社
工業評論　每號　其社
工業要錄　每號　大阪工業會
工業　每號　其發行所
大阪　每號　大阪都市協會
都市問題　每號　東京市政調査會
學士會月報　每號　學士會
工政　每號　其會
國立公園　每號　其社
關西園藝　每號　其社
塗料　每號　日本ペイント株式會社
塗工の魁　每號　其社
駿工　每號　其會
電氣學會雜誌　每號　其會
超科學　每號　大阪網島工業會
電氣評論　每號　其社
帝國鐵道協會報　每號　其會
朝鮮鐵道協會會誌　每號　其協會
鐵道軌道經營資料　每號　鐵道同志會
趣味の園藝　每號　關西園藝會
セメント界彙報　每號　日本ポートランドセメント同業會
エンヂニヤリング　每號　其社
經濟資料　每號　東亞經濟調査局
通俗衛生　每號　大阪府衛生會
京都の實業　每號　京都商工會議所
都市創作　每號　其會
產業　每號　其會
日本美術協會報告　每號　其社

役員

會長　理事　評議員　片岡安
副會長　理事　評議員　古宇田實
副會長　理事　評議員　日高胖
監事　波江悌夫
監事　光安梶之助

常務（主記）評議員　小川陽吉
常務（主記）評議員　小川安一郎
常務（主記）評議員　阪井米吉
常務（主記）評議員　松本儀八
常務（主記）評議員　森本藤吉
常務（主計）評議員　大原芳知
常務（主計）評議員　岡部顯則
常務（主計）評議員　德政金吾
常務（編輯）評議員　小西一良
常務（編輯）評議員　高橋榮治
常務（編輯）評議員　本間乙彥
常務（編輯）評議員　村野藤吾
評議員　池田實　評議員　伊東宗太郎
評議員　岩尾保術　評議員　小笠原朗
評議員　岡本新次郎　評議員　加藤誠二
評議員　籠田定憲　評議員　木村寬一
評議員　久保田筆雄　評議員　小寺彌一
評議員　酒井勇三郎　評議員　白石登喜男
評議員　芝田知重　評議員　篠原太郎
評議員　須川廉太郎　評議員　須藤隼人
評議員　武田經一　評議員　高田利一郎
評議員　永田三次郎　評議員　原科準平
評議員　前內文二郎　評議員　三木來三
評議員　村上徹一　評議員　八木幸次郎
評議員　山田亟平　評議員　山田初次
評議員　山中茂一　評議員　渡部圭吾

懸賞圖案當選者發表

豫て募集の小住宅設計圖案審査の結果左の通當選決定す

昭和六年九月

生活改善健康住宅展覽會
社團法人日本建築協會

第一等　大阪市港區東田中町四丁目九三ノ三　堀　武雄　氏

第二等　大阪市東淀川區木川町二七九井原方　櫻間大丈夫　氏

選外佳作　大阪市住吉區平野西之町六〇三ノ四市營住宅第九號　金子春夫　氏

同　大阪市北區空心町一丁目二〇　鐘ケ江正人　氏

同　大阪市東區森ノ宮西之町六二二　後醍院重正　氏　合作

同　神戸市池田廣町一四一橋本慶一郎方　田中信夫　氏

同　東京府下井荻町上荻窪四三五春日方　鳴海安雄　氏

同　神戸市平野雪御所町七〇　禰屋毅一　氏

同　大阪府中河內郡楠根町稻田關西土地建築課　能口彌一郎　氏

同　神戸高等工業學校建築科第一學年　水野安平　氏

同　京都市中京區聚樂廻リ松ノ下町七本松通丸太町上ル西へ入ル十二番地　山口正雄　氏

同　大阪市港區九條通一丁目六六　湯原來　氏

同　神戸市中山手通二丁目十九ノ六八番地　渡邊辰之助　氏

（五十音順）

豫て募集の香里園改善住宅設計圖案審査の結果左の通當選決定す

昭和六年九月

香里園改善住宅展覽會
社團法人日本建築協會

第一等　東京府下西巢鴨町宮仲二八六三　長野八三二　氏

第二等第一席　大阪市東淀川區木川町二七九井原方　櫻間大丈夫　氏

第二等第二席　大阪市北區南森町天滿ビルヂング內　角田建築事務所

第三等第一席　大阪市西淀川區傳法町北一丁目　福富昭兒　氏

第三等第二席　大連市監部通百二十四番地　梅田善重　氏

第三等第三席　大阪市東淀川區三國町七三一　仁木謙治　氏

選外佳作　橫濱市鶴見區生麥町一五二一　小川增吉　氏

同　大阪市外豐中町新免九二五　小林武夫　氏

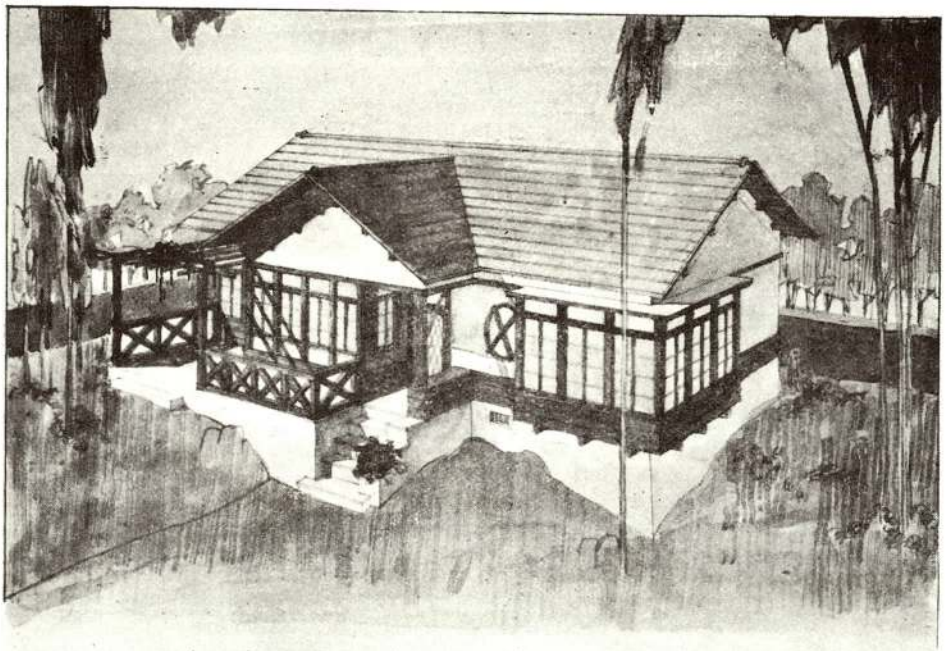
同　大阪市東區京橋三丁目大林組設計部內　高木貞一　氏

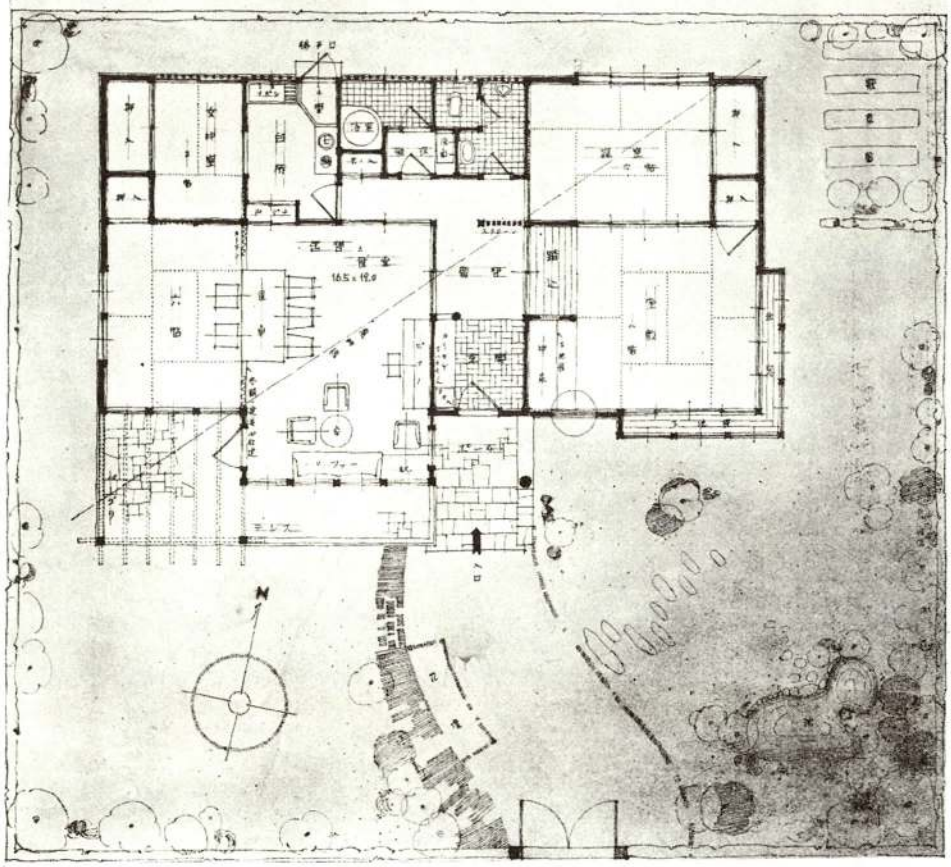
同　大阪府中河內郡楠根町稻田關西土地建築課　能口彌一郎　氏

同　東京市京橋區京橋二丁目一ノ六　水谷一百　氏

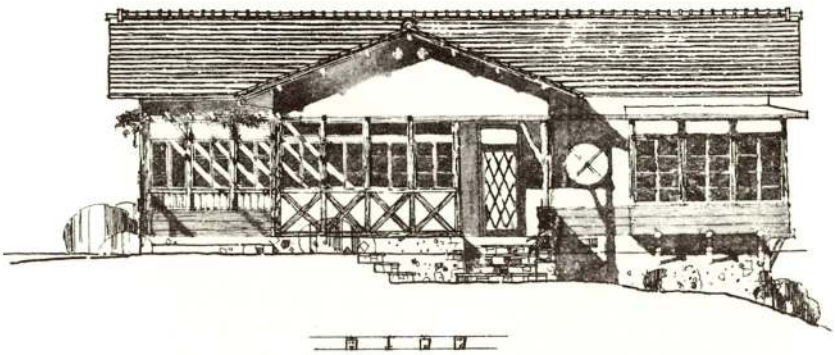
同　大阪市港區九條通一丁目六六　湯原來　氏

（五十音順）

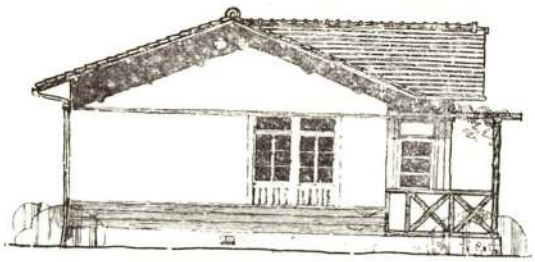




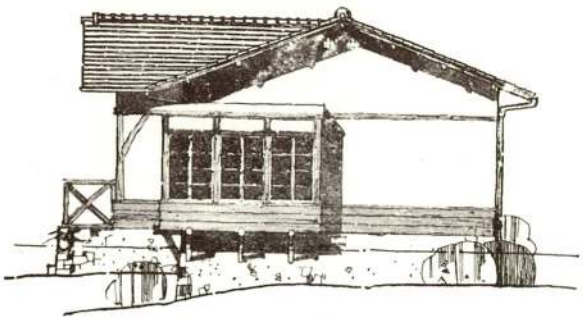
神戸鈴蘭臺住宅設計懸賞圖案　　一　等　　堀　武　雄　氏



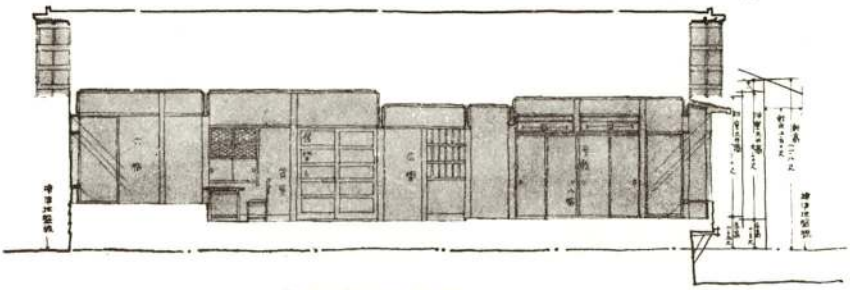
南正面圖



西側面圖



東側面圖



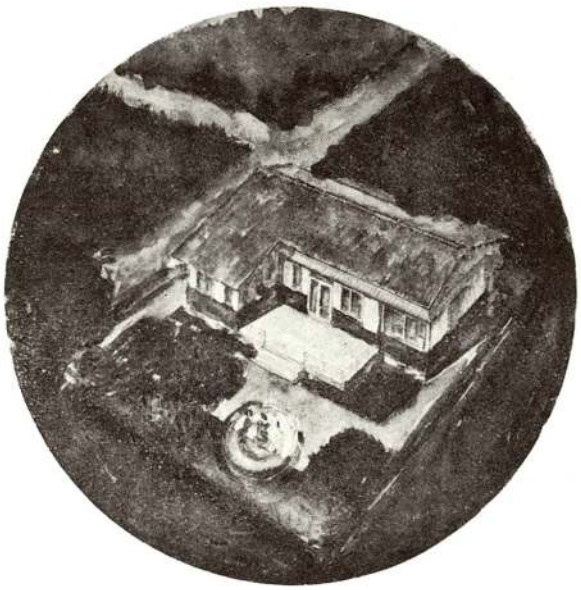
縱斷面圖

仕様概要

木造瓦葺洋風平家建　一棟
建坪　二十六坪七合五勺
一、建築費　三千五百圓
一、家族　五人
一、様式　日本趣味を加味したる洋風山荘
一、構造　基礎コンクリート打土臺ボール締木造和小屋
一、外部　鐵網張りの上モルタル塗、白セメント凹凸仕上腰廻り下見板防腐劑塗りポーチ床及腰廻り鐵平石貼付
一、内部　洋室眞壁、漆喰塗り、和室砂壁、臺所、廊下、浴室、便所等は押へ塗り仕上木部ラック及ペンキ塗とす
一、床　洋室、檜及米松板張り和室疊敷、其他タイル床等
一、天井　洋室漆喰天井和室杉又は米杉、竿縁天井
一、屋根　土居葺きの上四寸勾配平安瓦葺
一、臺所設備　圖面の通り人造石流し一個、七輪臺一個、戸棚等設備す
一、浴槽　徑二尺四寸、長州風呂とす
一、便所　水洗式
一、防暑設備　採光に差支へなき迄軒の出を深くし日光の直射を防ぐ床下の通風孔により各室の換氣通風を良くす、天井にも換氣孔を設け熱氣を小屋裏に出し、切妻壁の通風孔より換氣す
一、防冬設備　冬期は電氣又は瓦斯の置ストーブを用ふ

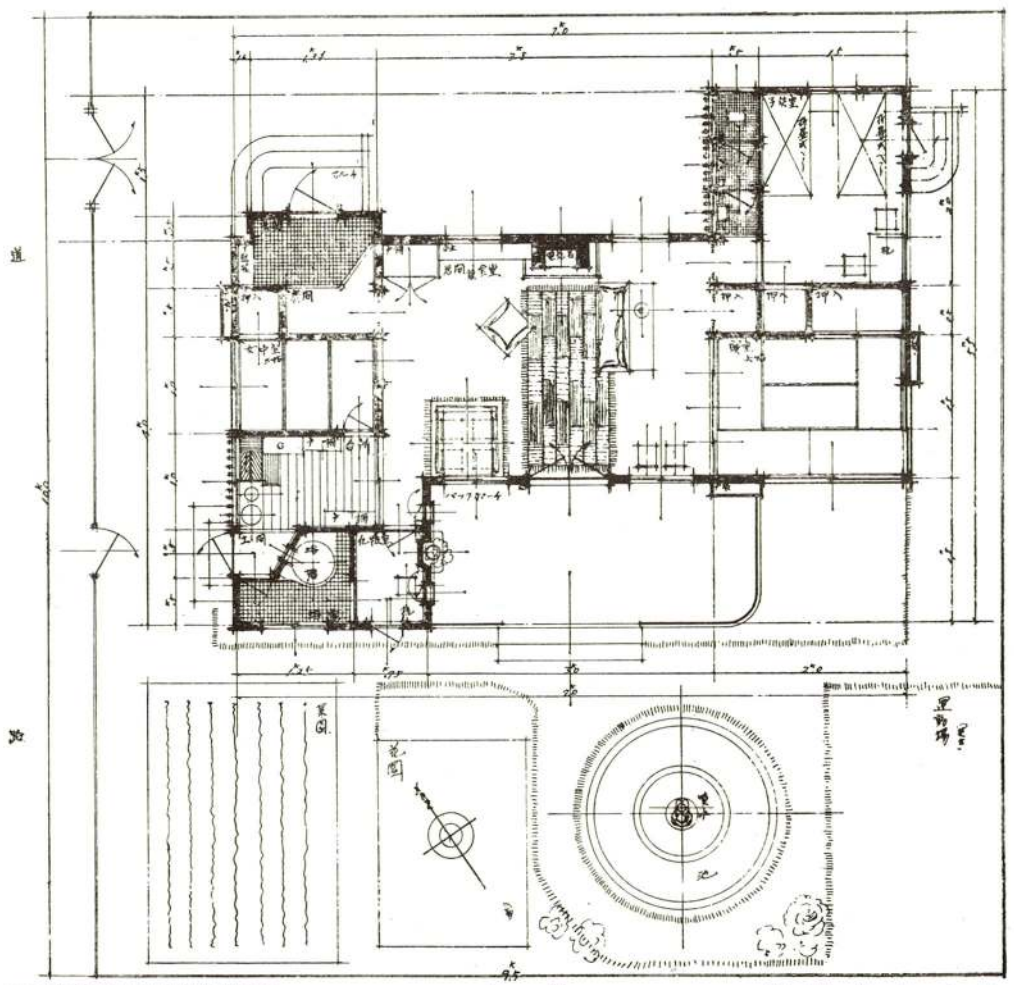
氏名　堀武雄　　一等

神戸鈴蘭臺住宅地計懸賞設計案圖

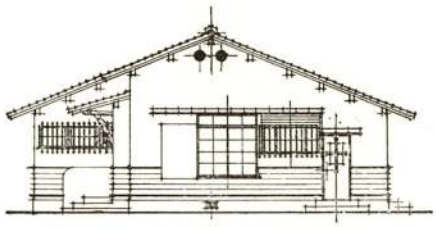


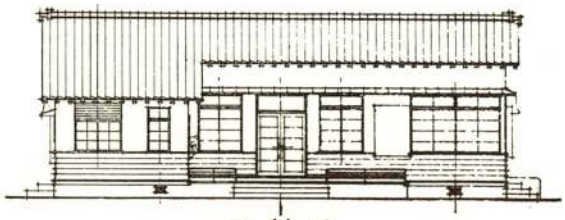
上透視圖

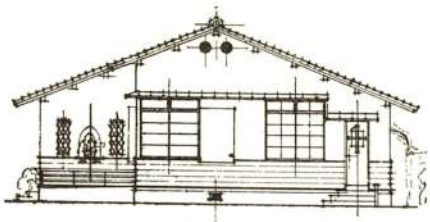
下平面圖

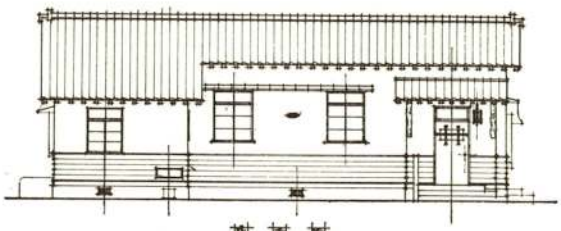


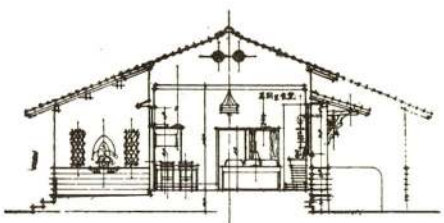
神戸鈴蘭臺住宅設計懸賞圖案　二等　櫻間大丈夫氏

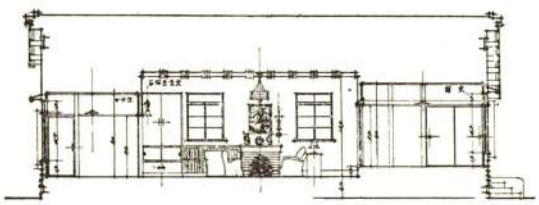












設計概要

一、位置　神有電鐵沿線鈴蘭臺丘上

一、家族　夫婦、子供二名、女中一名

一、敷地　西北に道路を有する土地　九十五坪

一、建坪　二十三坪八合三勺五才

一、建築費　三千五百圓也但し木造平屋建

構造概要

一、基礎　割栗地形柱土臺下廻り混凝土打ち

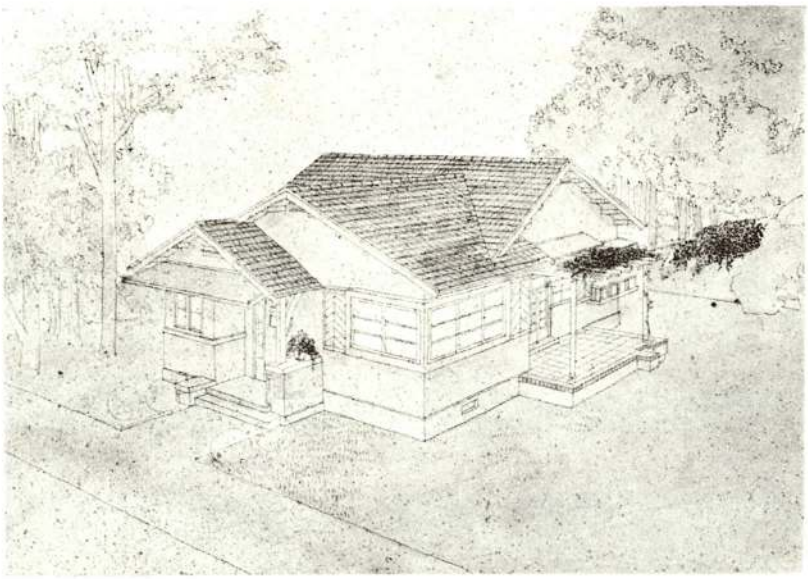
一、外部　大壁「スタツク」「モルタル」塗、腰廻り下見板防腐劑塗「ポーチ」床土臺下腰廻り石張り

一、内部　居間、食堂、小供室壁紙張り大壁、床甲板張り、天井漆喰天井、其他は眞壁床甲板又はタイル張り但し寢室女中室は疊敷天井、竿緣天井

氏名　夫丈大間櫻

等二

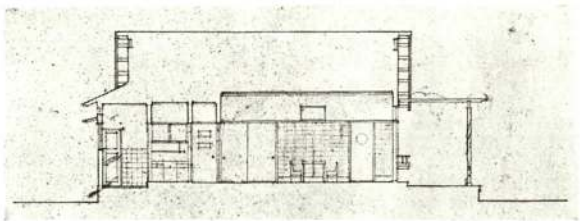
神戸鈴蘭臺住宅設計懸賞圖案



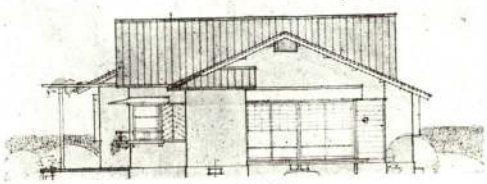
透視圖



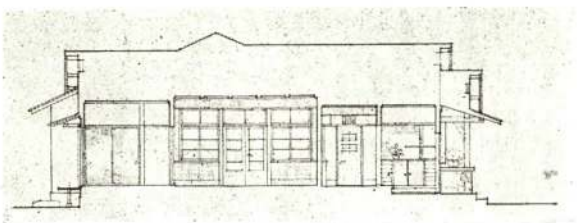
正面圖



横斷面圖



東面圖



縱斷面圖

說明書

建物坪數　二九、五坪

建築費　三千五百圓一坪當約百二十圓

同敷地　百坪

構造及仕上

基礎　コンクリート割栗石地形

軸部　柱米栂一部檜及杉使用

小屋　和小屋材料杉及松

屋根　勾配四寸五分日本形赤瓦葺

外部　全部鐵網モルタル塗、白色セメント着色材入粗面仕上

内部

床　玄關浴室床コンクリート叩タイル敷洋間床米栂フローリング板張り日本間疊

壁　木舞壁土壁及漆喰塗、仕上一部木摺漆喰塗ペンキ塗仕上

天井　日本間棹縁天井其他格縁タイガボード張及漆喰天井水性ペンキ塗

塗師　内部洋間ラック塗、床ステン塗、外部木部全部ペンキ塗り

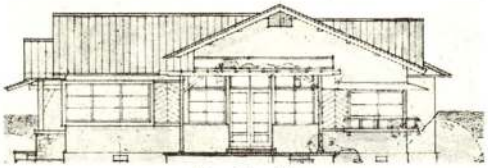
便所　大正式又は内務省改良便所構造

建具　杉及檜造り

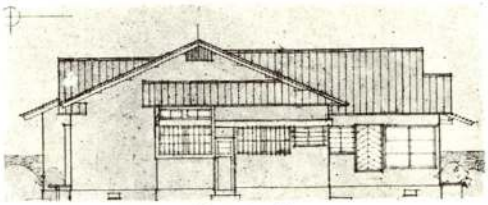
氏名　長野八三二

一等

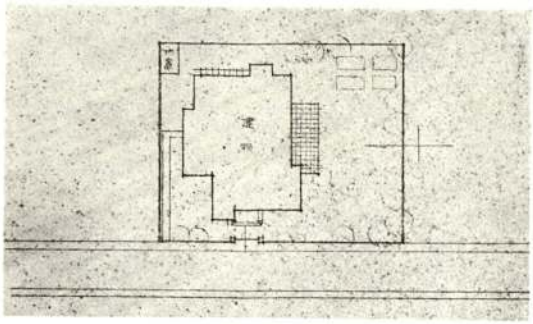
香里園改善住宅設計懸賞圖案



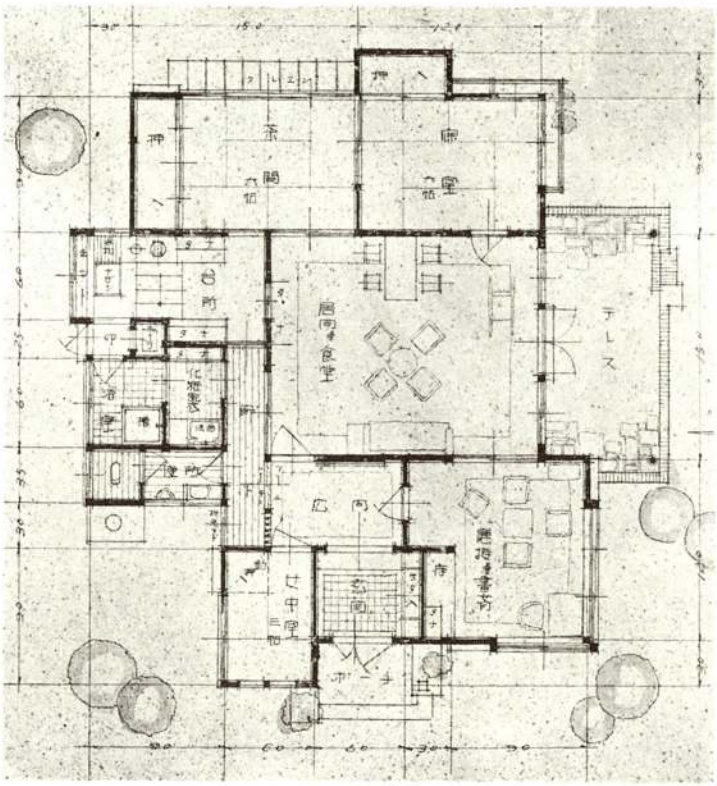
南 面 圖



北 面 圖

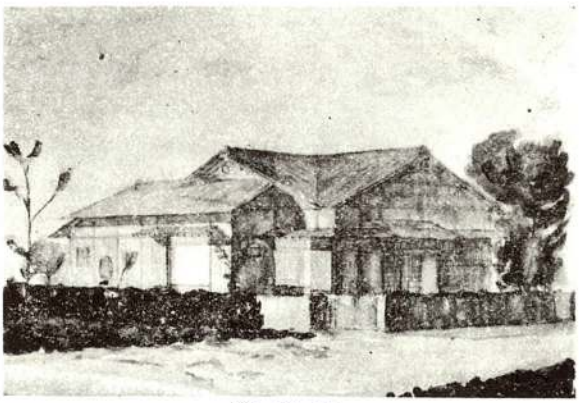


配 置 圖

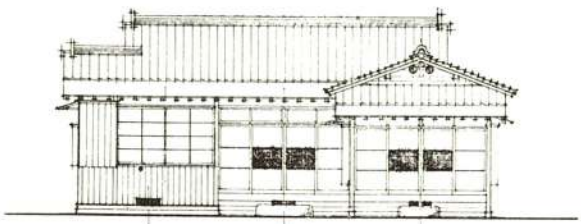


平 面 圖

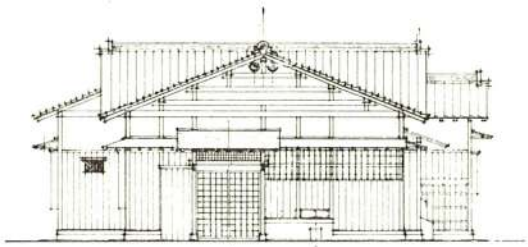
香里團改善住宅設計懸賞圖案　　一　等　　長 野 八 三 二 氏



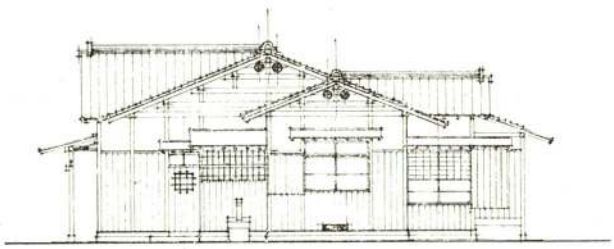
透視圖



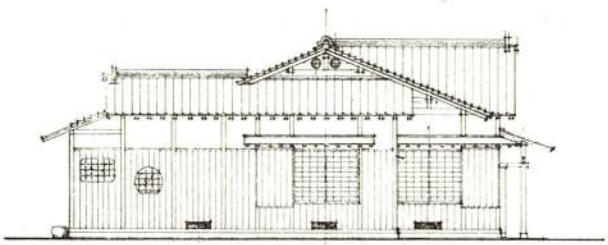
南面圖



北面圖

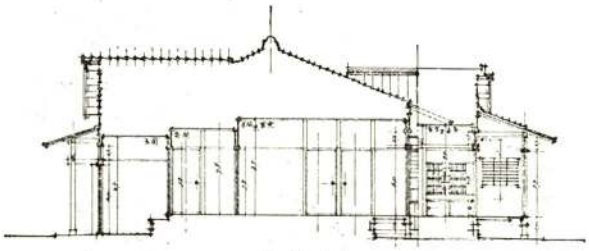


西面圖

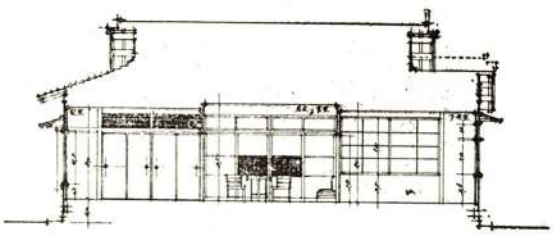


東面圖

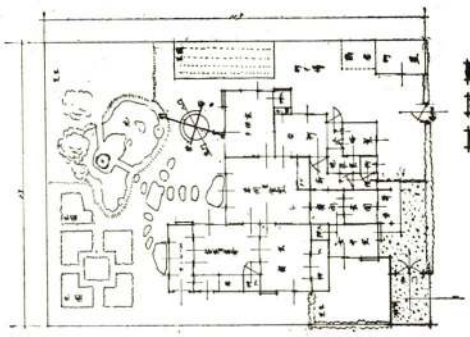
香里團改善住宅設計懸賞圖案　　二等一席　　櫻間一大丈夫氏



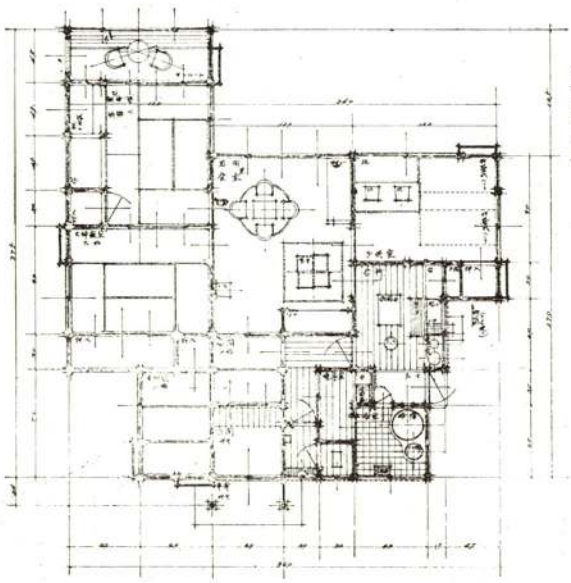
側面図



側面図



配置図



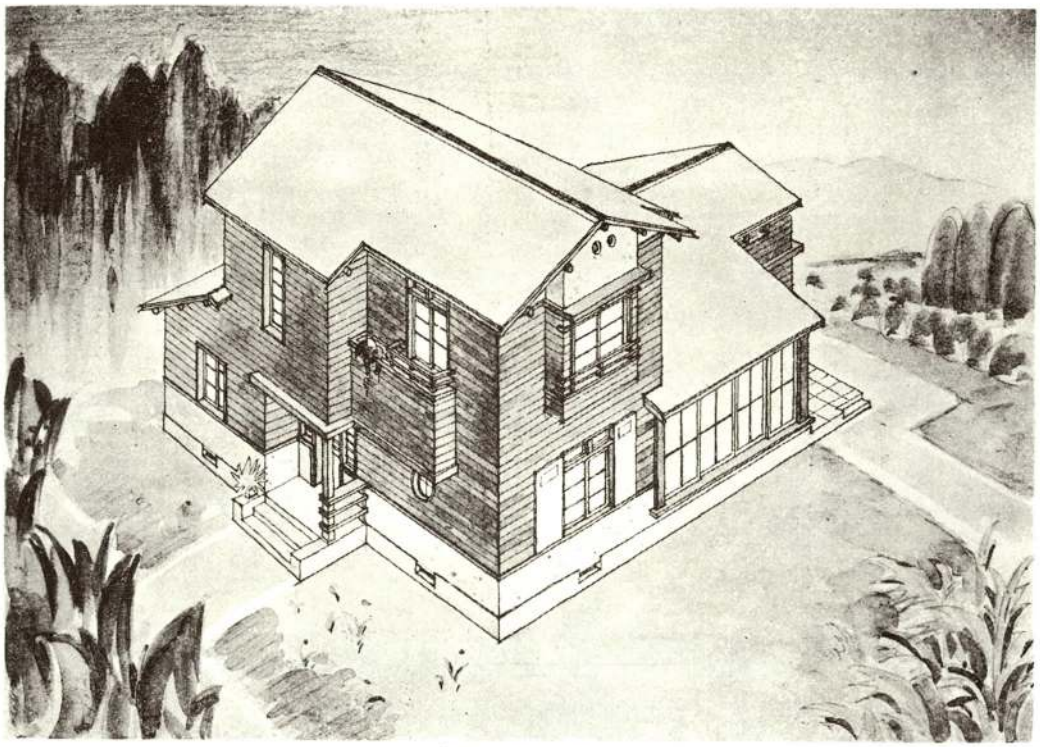
平面図

設計概要

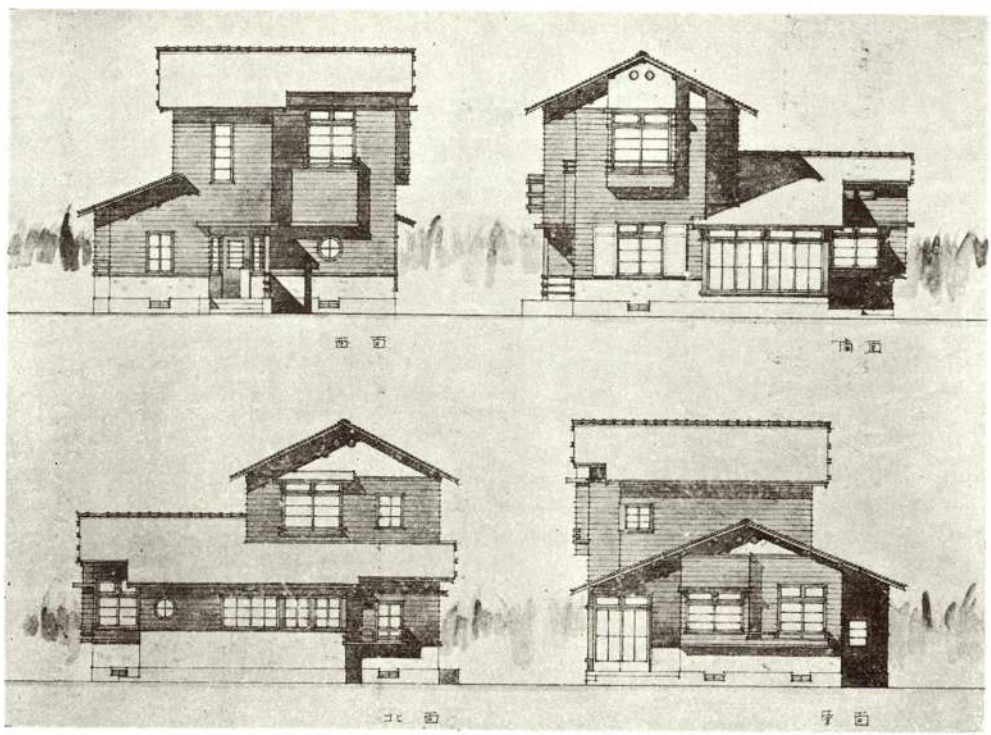
位置　京阪電鐵沿線香里園
家族　夫婦、子供二人、女中一人
敷地　九十七坪七合五勺

建坪　二十七坪一合五勺（車寄を含む）
様式　和風木造平家建
屋根　日本瓦葺一部銅板葺き

香里園改善住宅設計懸賞圖案　　二等一席　　櫻間大丈夫氏

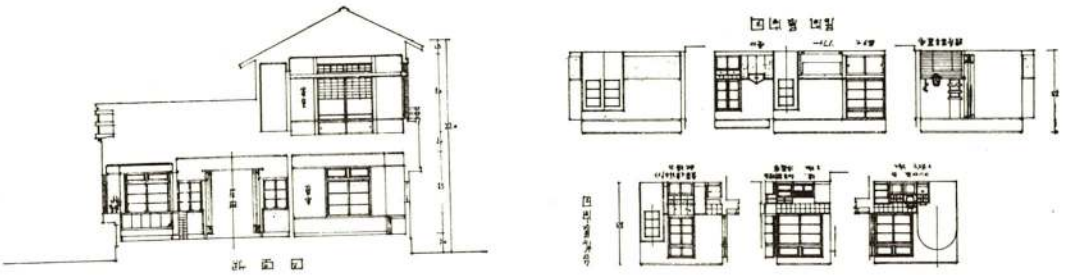


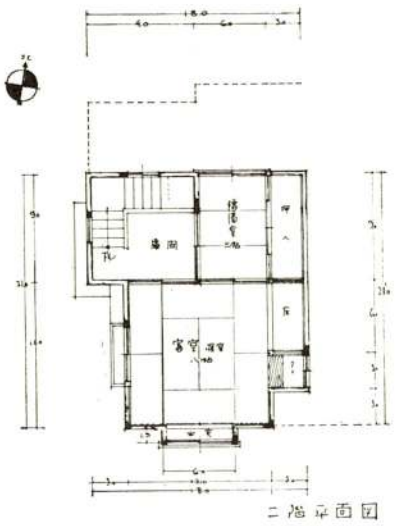
透 視 圖



立 面 圖

香里團改善住宅設計懸賞圖案　　二等二席　　角田建築事務所



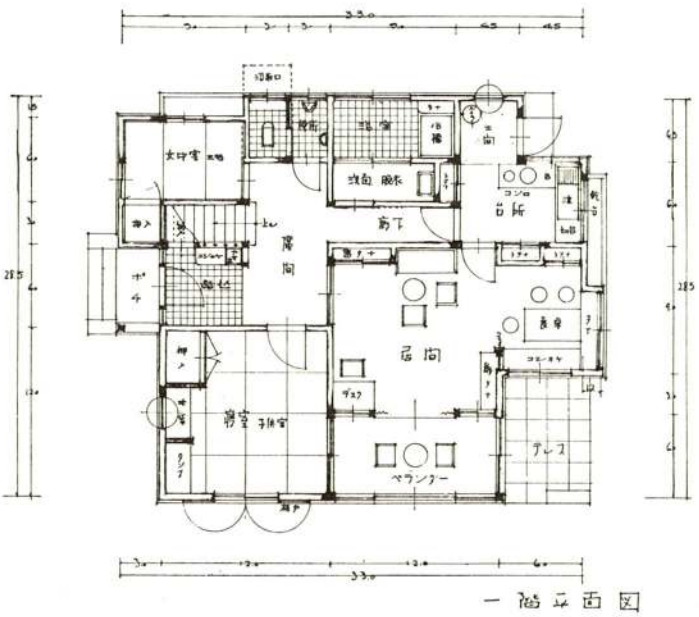


一、建物坪數

一階　二二坪六八

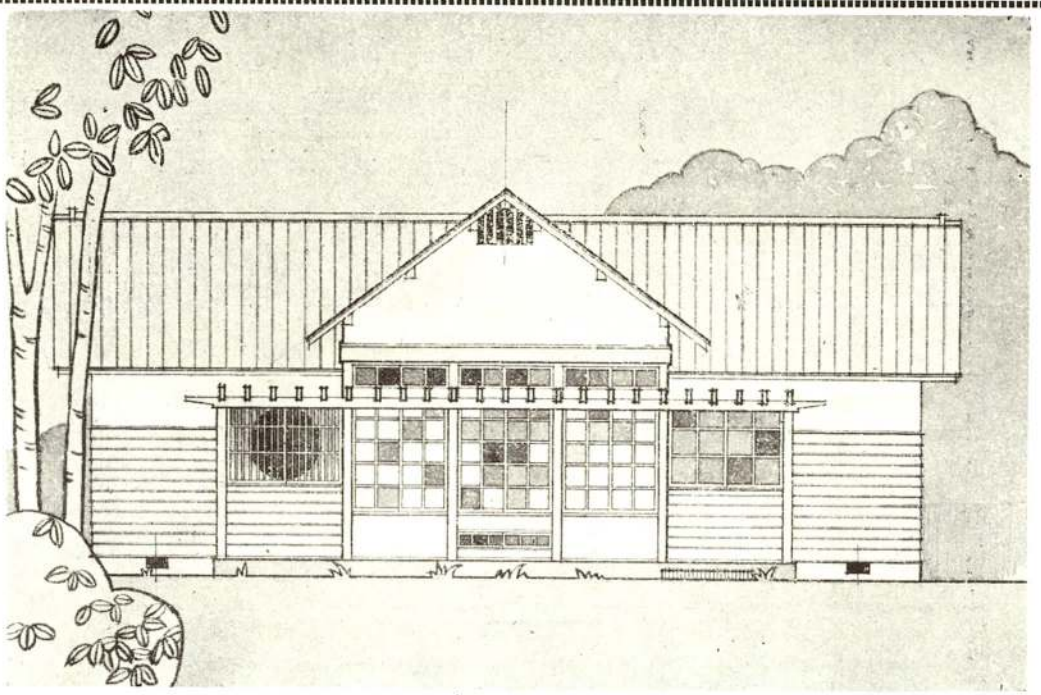
二階　九坪二五

延坪　三一坪九三

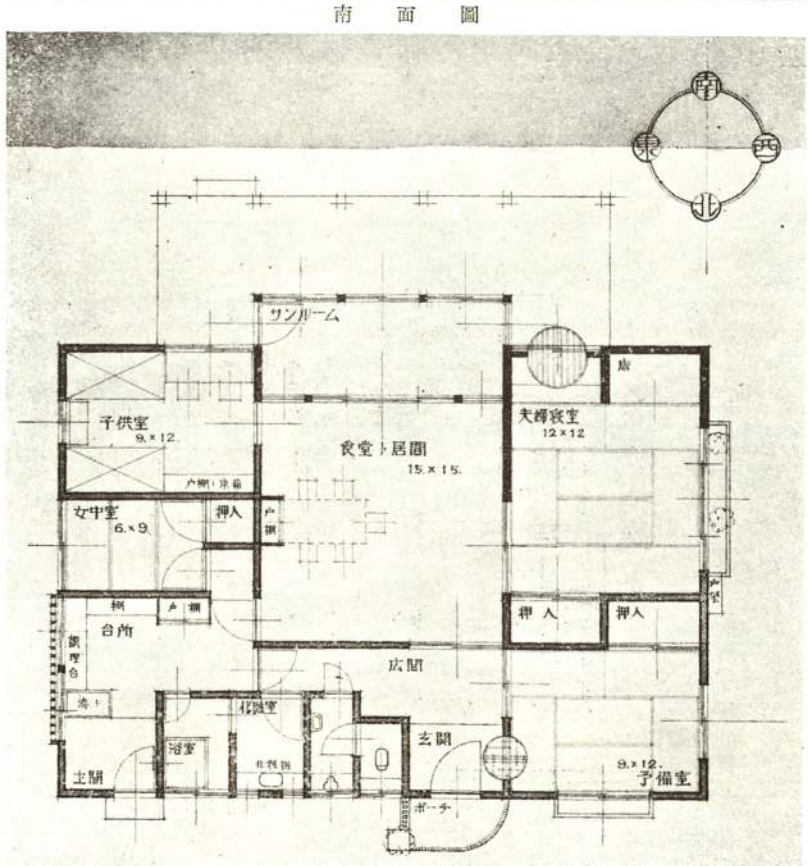


一階平面図

香里團改善宅住設計懸賞圖案　　二等二席　　角田建築事務所



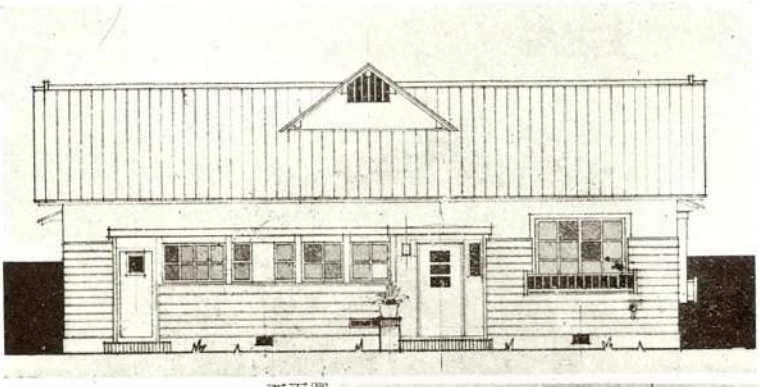
南　面　圖



平　面　圖

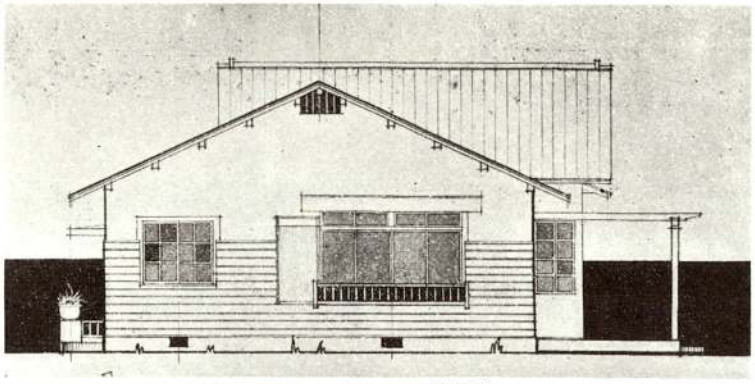
香里園改善住宅設計懸賞圖案　　三等一席　　福富昭兒氏

北面圖

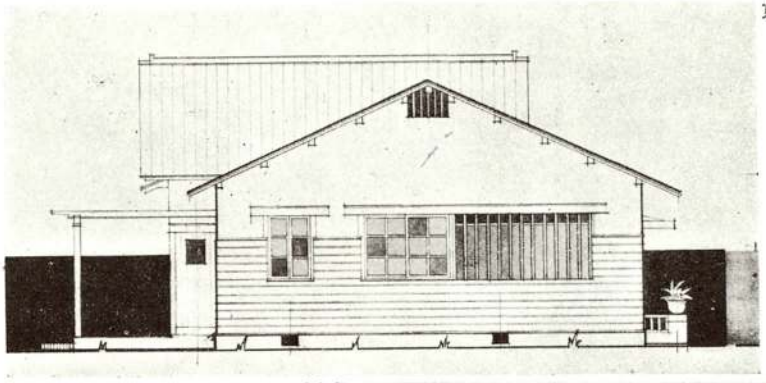


木造平家瓦葺
坪數 三〇、五坪
家族 五人 サラリーマン向

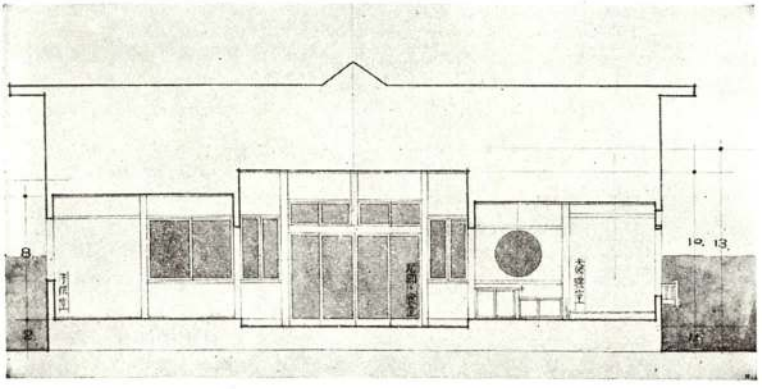
西面圖



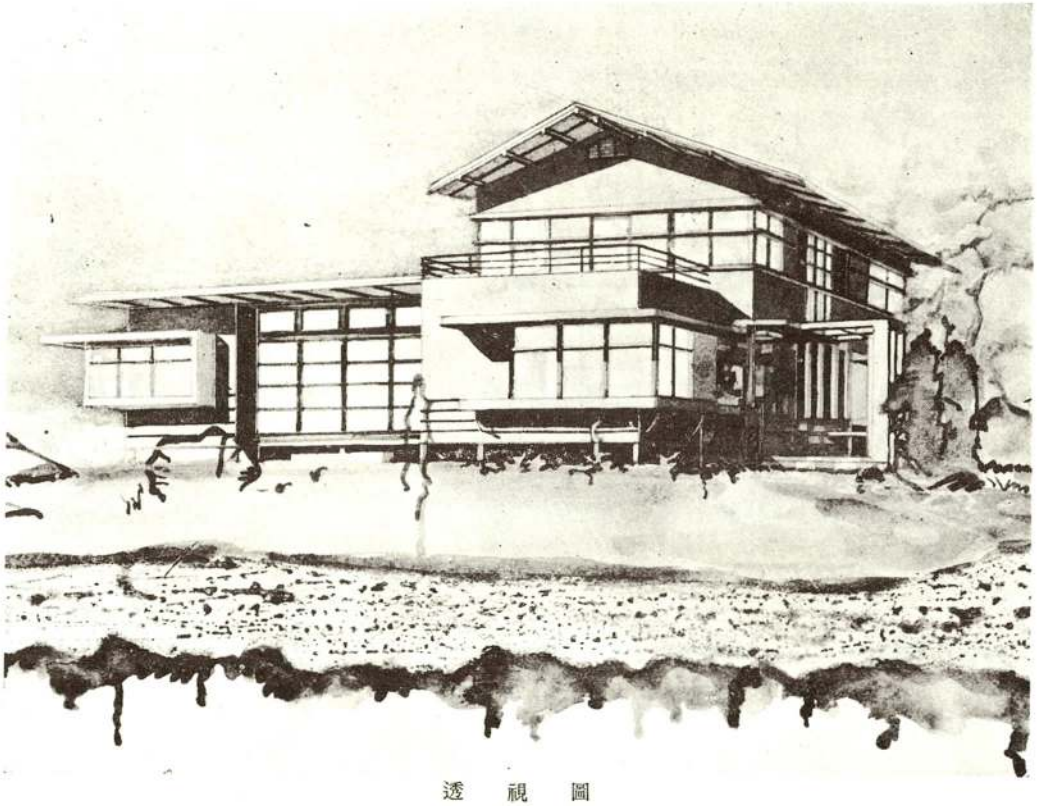
東面圖



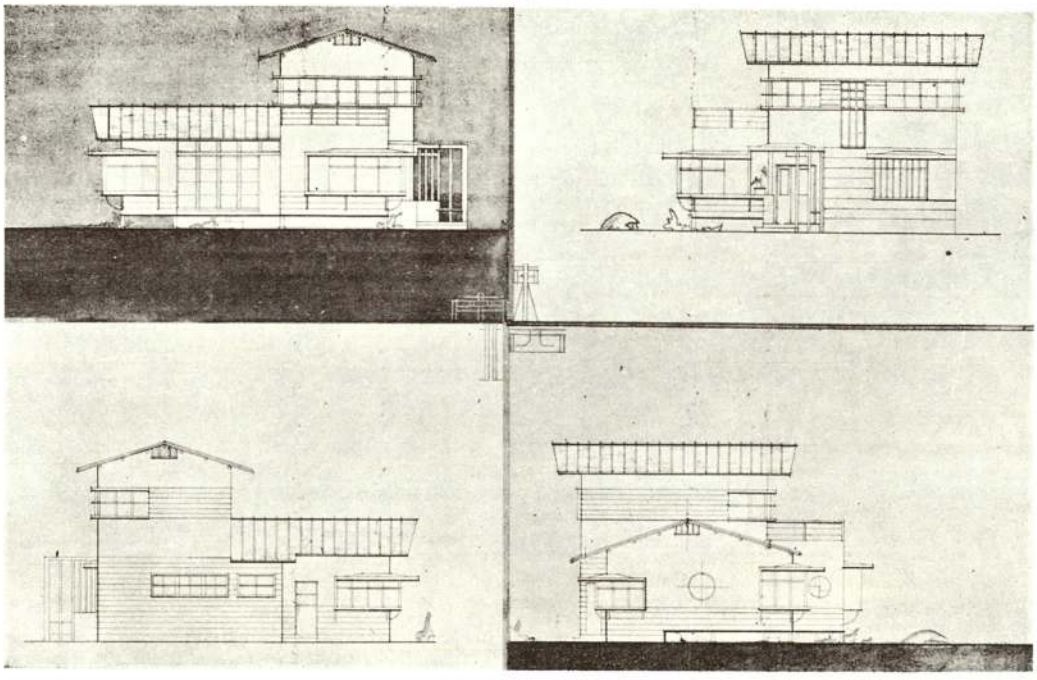
縱斷面圖



香里園改善住宅設計懸賞圖案　　三等一席　　福富昭兒氏

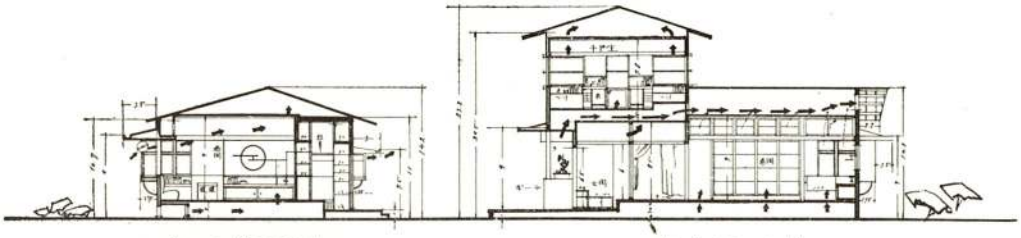


透 視 圖

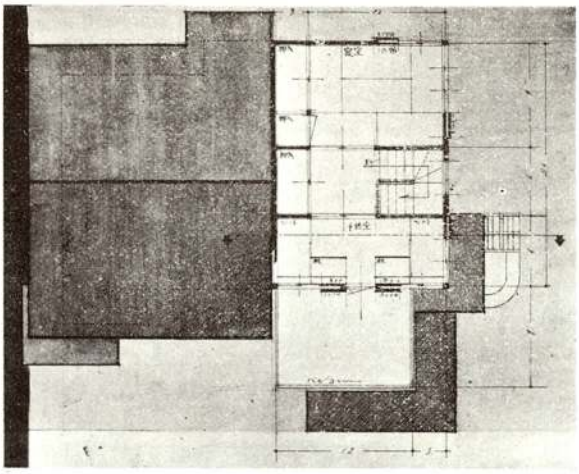


立 面 圖

香里團改善住宅設計懸賞圖案　　三等二席　　梅 田 善 重 氏

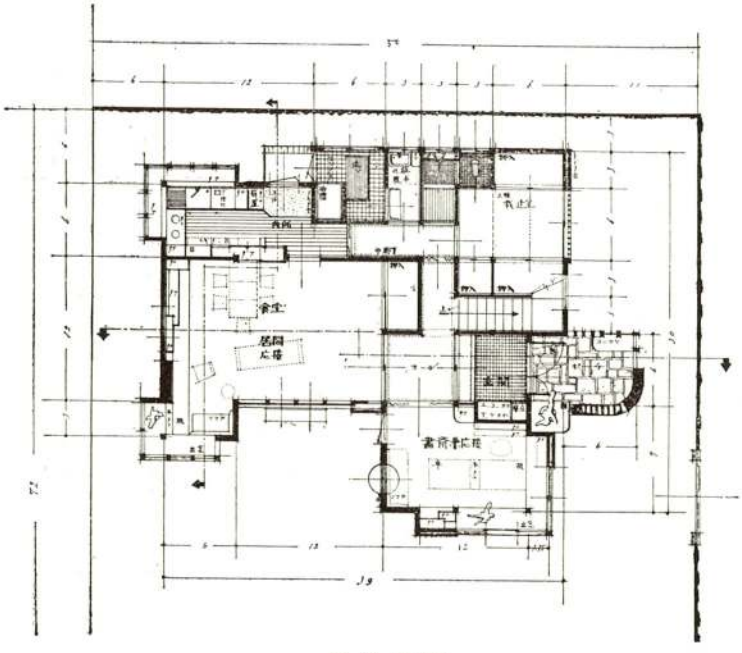


東西斷面圖　　南北斷面圖



二階平面圖

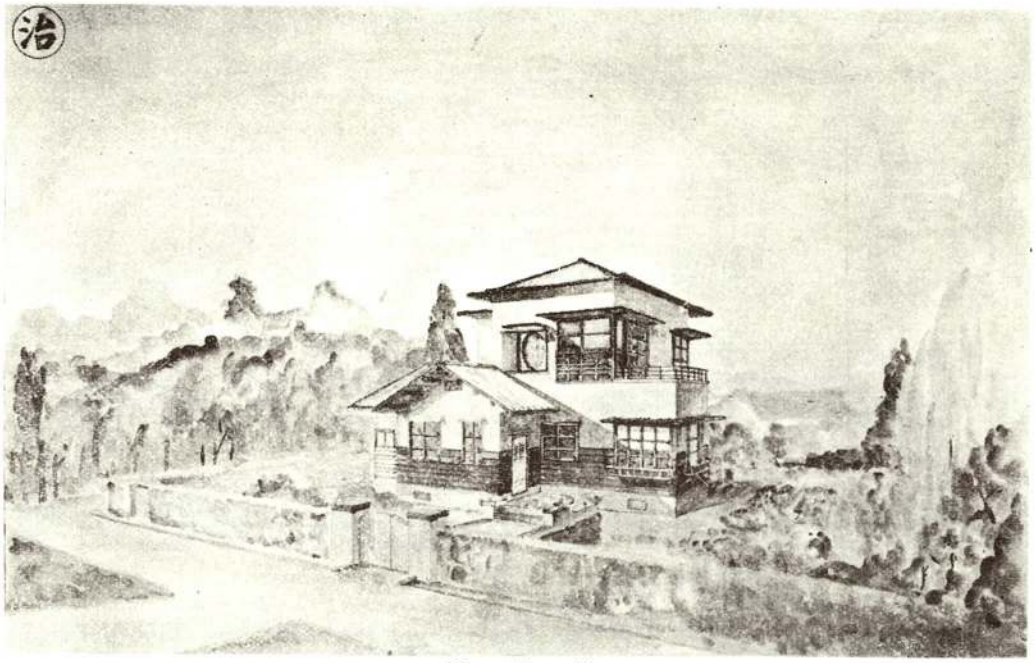
敷　地　一〇〇坪
建物坪數　三〇坪（一階二一、二五坪
二階八、七五坪）
建築費　四千圓
構　造　柱下土臺廻り地形及便所、風呂、玄關廻りはコンクリート打ち、土臺桷、柱、間



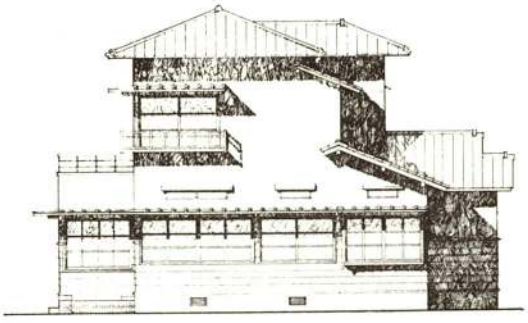
一階平面圖

柱筋違は杉、小屋組、梁、根太の横架材は松、軸部構材は日本材を用ふ、各要所に筋違、補强金物を用ひ、各室天井釣木受は杉角材を用ひ釣木は四分ボールトを使用す

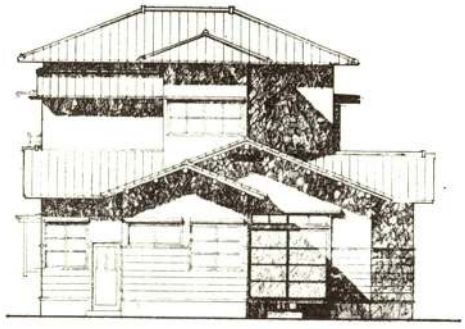
香里園改善住宅設計懸賞圖案　　三等二席　　梅田善重氏



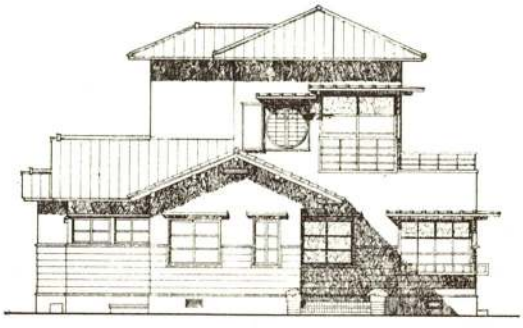
透視圖



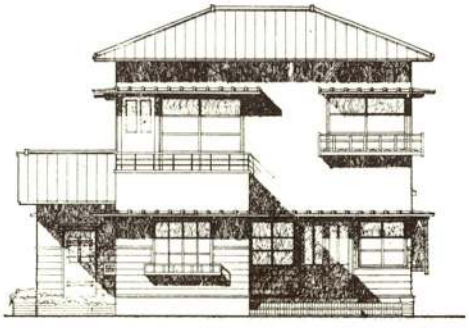
東面圖



北面圖



西面圖



南面圖

香里園改善住宅設計懸賞圖案　　三等三席　　仁木謙治氏



Ⓐ-Ⓐ 斷面圖



Ⓑ-Ⓑ 斷面圖

略仕樣書

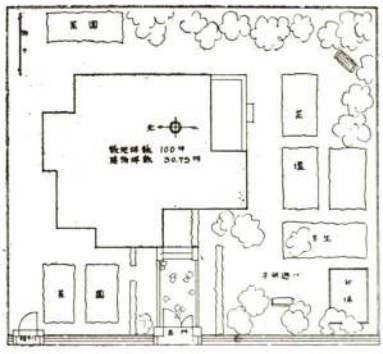
一、敷地坪數　一〇〇坪

一、建物坪數　一階　二〇、一八坪
　　二階　一〇、五一坪
　　計　三〇、六九坪

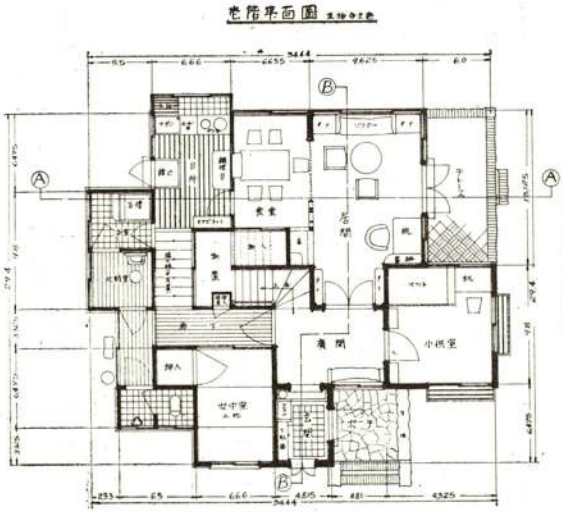
一、建築費　三千五百圓（坪當一一四圓）

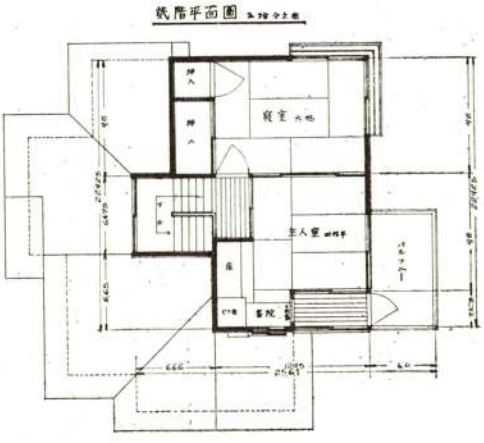
一、構造概要

基礎はコンクリート造とし、土臺檜三寸六分角ボールト締め、柱米栂三寸五分角化粧の部分は無地上材とし其他の軸組材は凡て米松並材を使用す小屋組は和式とし、小屋梁は日本松丸太を使用し家根は勾配四寸五葺きとす



敷地配置圖





香里園改善住宅設計懸賞圖案　　三等三席　　仁木謙治氏

懸賞募集小住宅設計圖案審査概評

審査員　日本建築協會々長工學博士　片岡安
同　同副會長　古宇田實
同　同副會長　日高胖
同　同住宅委員會委員長　葛野壯一郎
同　京都帝國大學教授工學博士　藤井厚二
同　生活改善健康住宅展覽會副會長　加藤源次

今回の鈴蘭臺住宅設計の應募圖案は一百九十通の多きに達せしも要求したる佳作に乏しかりし事を遺憾とす、其の内より三十通を選出し更に左の等級を選定したのである

應募作品に就いて概括的に評すれば

一、現代の住宅として吾人の要求に適合した創案を得ざりし事

二、間取、外觀共煩雜變化多く簡明の作少かりし事

第一等

間取は簡明に良く纏り方位も考慮し室名を限定せず住む人々の自由に任してある點は面白いと思ふ尙外觀も共に山莊的氣分見えて無難である

第二等

間取は簡素ではあるが其形狀が感心せない自然無理な所が著はれて居る方位を念頭に置いて今少し研究を要す、外觀は平凡である

選外佳作

佳作のものを總括して概評すれば外壁の屈曲甚しく又大邸宅を創案する氣分で室數を多く設けてあるが實際に使用する場合には不便である、外觀は間取に從て頗る煩雜餘裕なきを遺憾とす

懸賞募集香里園改善住宅設計圖案審査概評

審査員　日本建築協會會長工學博士　片岡安
同　同副會長　古宇田實
同　同副會長　日高胖
同　同住宅委員會委員長　葛野壯一郎
同　京都帝國大學教授工學博士　藤井厚二

今回の香里園改善住宅設計の應募圖案は非常に多數で中には全く素人である人の圖案もあつた事は今回の催が如何に一般の注目を引ひた事が多かつたかを考へて審査に大なる興味を覺へた事である、應募數は全部で二百二十五通であつた是を第一次に五十通を選出し更に其内から下記の等級を選定したのである。

今回の應募作品に就いて概括的に言へば

一、現代の要求に切實に適合せる創案を得ざりし事

二、全體に平家に傑出せるもの多く二階家の佳作が乏しかりし事

三、間取並外觀共餘りに煩雜變化を主としたるもの多く簡素、明快の作少なかりし事

四、從來の懸賞當選型に拘泥したるもの多かりし事

第一等

平面に付ては各室の配置及採光通風の關係は頗る巧妙なり强て缺點を擧くれば寢室の東側に押入をとり主要なる採光を防ぐるは遺憾である

其他女中室の押入及同室入口玄關北側の格子窓等は更に考慮の餘地ありと認む

此種の小住宅にありて浴槽に給湯ボイラーの設備は不適當なり寧ろ浴槽を臺所側に寄せボイラー室の個所より直接に焚く方よからん猶洗面所と浴槽室との間に採光窓を設け洗面所に間接採光を要すべし

外觀は平凡なるも無難なり

第二等第一席

各室を個々に考へたる場合には其機能は充分なるも相互間の連絡に研究の餘地ありと認む

玄關二帖は稍採光不充分猶同室は寧ろ板張を可とす

各室入口は半間片引の多きは日本室として不愉快なり又炊事場を西向にとれるは缺點なり

外觀に關しては屋根の形を故意に復雜にせる感あり

第二等第二席

應募圖案中二階建の代表的のものなり各室の連絡内容共よく考慮せられ配置頗るよし

建物全體として西側よりの通風は稍不充分なりと思ふ、浴室は此程度の小住宅として面積過大なり又洗面所の採光及浴室との關係、配置は更に研究を要す

外觀は形として申し分なし、屋根の石綿「スレート」を日本瓦に變更すれば更によからん、壁面の凹凸稍不自然の觀あり

第三等第一席

平面外觀共頗る簡素にして可なるも只外觀に於て左右均勢ならしむるに意を注ぎ過ぎ窓入口に無理あるを缺點とす

第三等第二席

平面は自由にしてよく纏まれり、實際上より見て疊敷の室の少きは缺點とす

外觀は新味を充分發揮せられたるは之れを多とするも之に捕はれ衒氣の過ぎたるを缺點とす

第三等第三席

室の配置は充分よく研究せられたるも餘りに復雜に失し殊に外壁の屈曲甚だしく大邸宅の縮圖の觀あり外觀又之に應じ屋根の形狀頗る煩雜餘裕なきを憾む



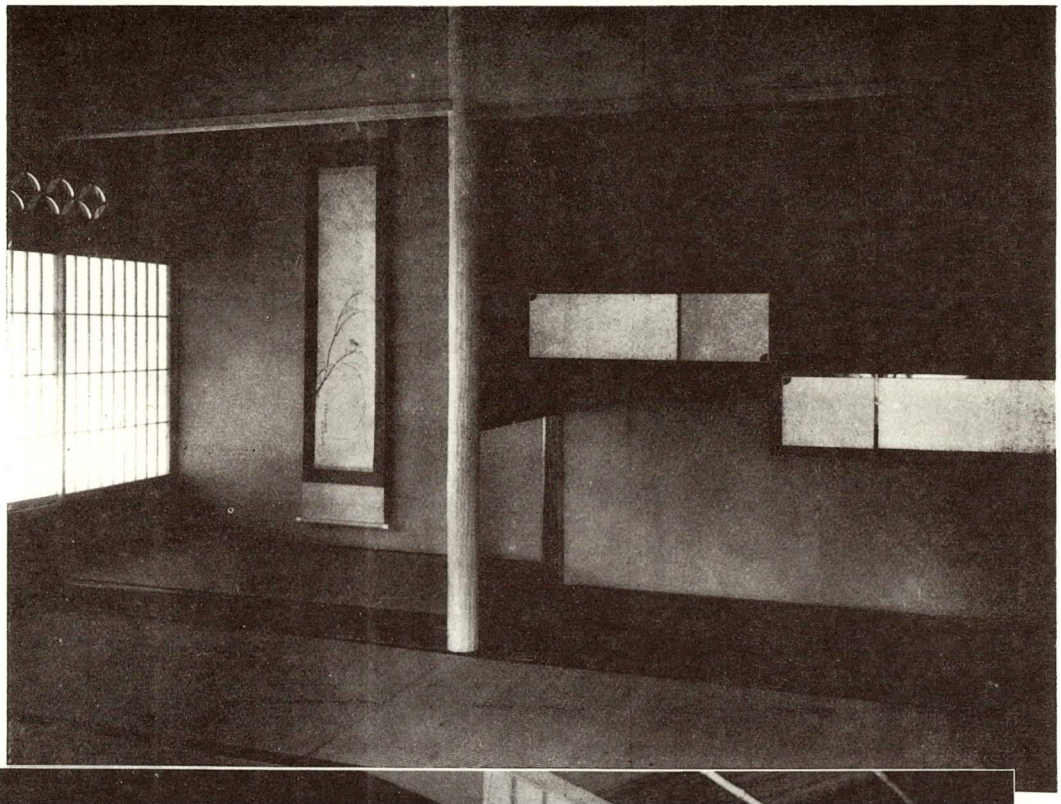
ふねのある都會風景

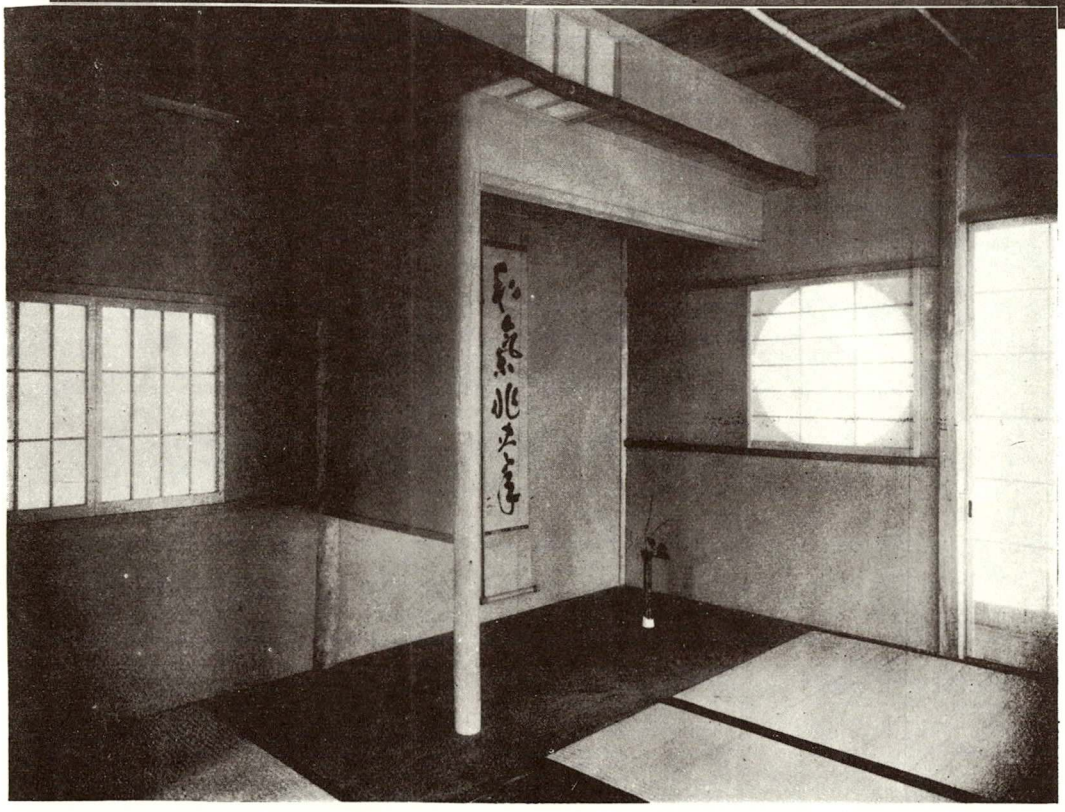
建築と社會

第十四輯第九號　昭和六年九月發行

目次

神戸鈴蘭台及香里住宅設計懸賞當選者發表……（一）
神戸鈴蘭台住宅設計懸賞圖案……（二）
香里園改善住宅設計懸賞圖案……（六）
神戸鈴蘭台及香里住宅設計圖案審査概評……（一八）
卷頭插畫・ふねのある都會風景……（一九）
床及棚十種……藤井厚二……（二一）
住宅の間取と構成について……川喜田煉七郎……（二五）
＝アレキサンダークライン氏の所謂「平面圖の要素」に關する一考察＝
要の一點……笹川愼一……（三〇）
神戸地方に於ける風向の時別變化……南信……（三一）
住宅の間取に就いて……柴谷邦子……（三三）
室内裝飾に就いて……梶原緋佐子……（三七）
臺所改善資料としての調査……鷲井清子・角静子……（三八）
組み合せ式臺所……岡田孝男……（四五）
臺所數種……松本儀八……（四九）
我が農耕的小住宅……堀田猷次郎……（五三）
小住宅五種……佃十俊……（五六）
住宅寫眞集……（五七）
都市・建築・音響……（12）……佐藤武夫・中野勉……（六八）
吉祥山正傳寺……（上）……天沼俊一……（特附一）
國際新建築集……（附四五）



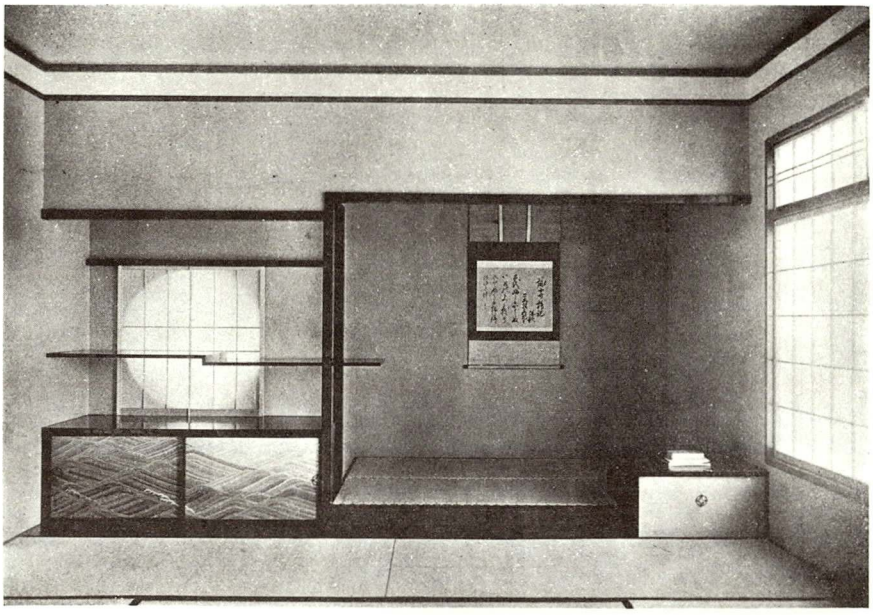


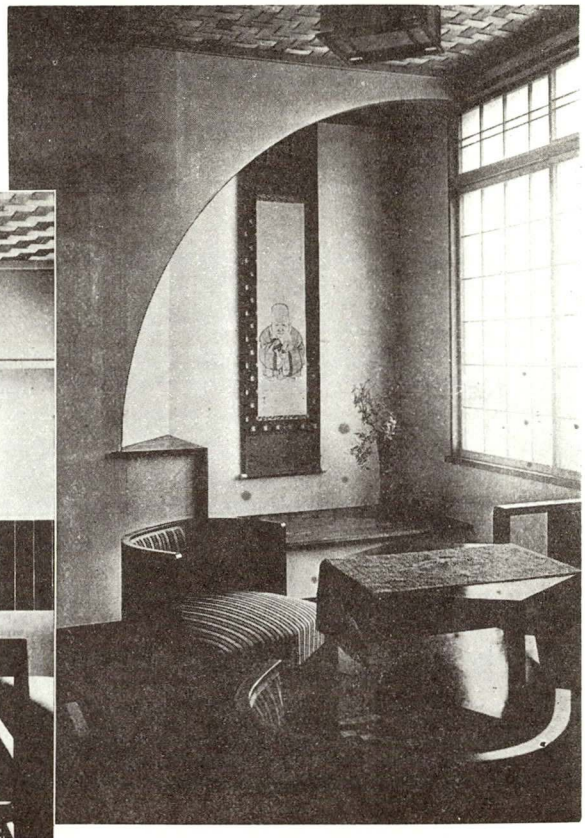
上　客室の大さ八疊、床一疊、床脇一疊
下　茶室踏込床、室の大さ四疊半、内一疊が松板

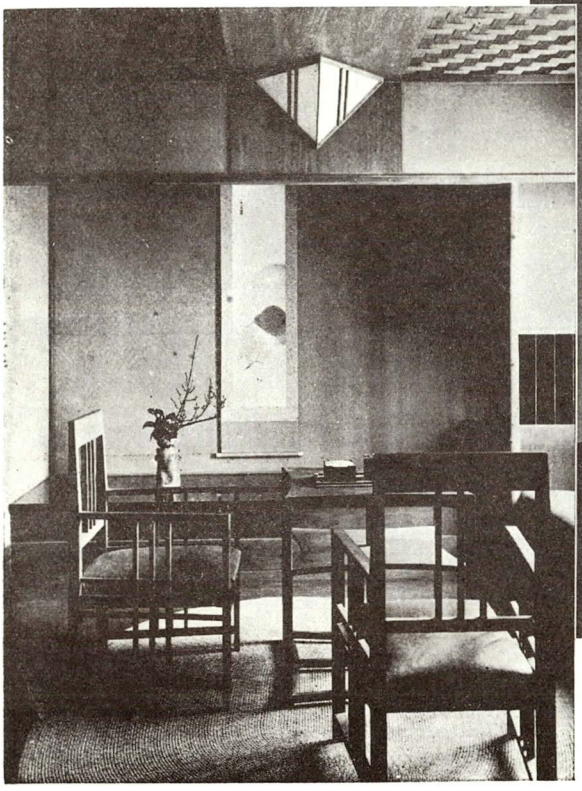
床及棚十種

藤井厚二氏作

上、客 室
室の大さ十疊
床の奥行一間



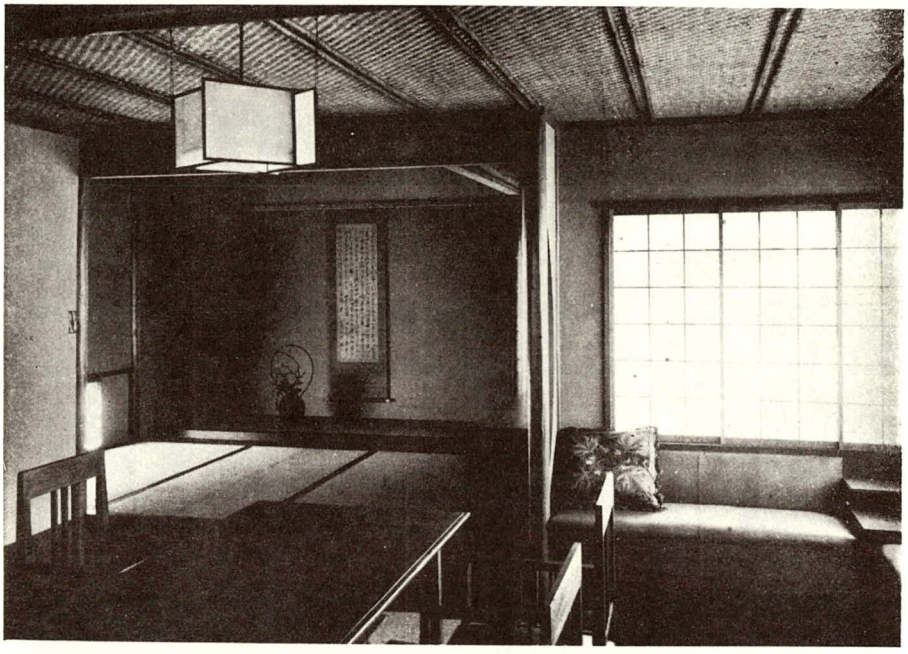


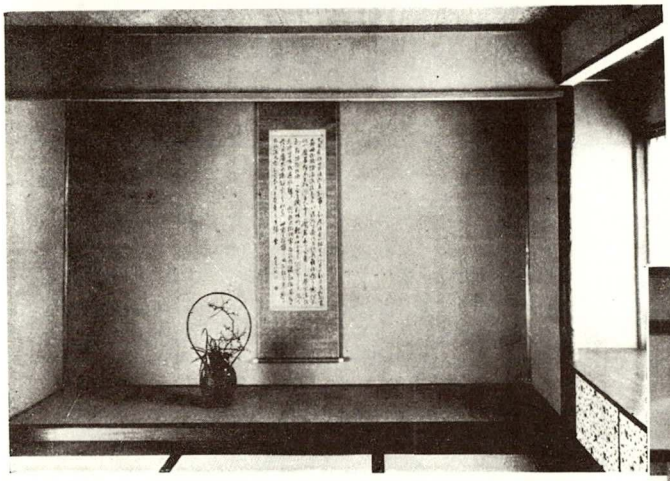


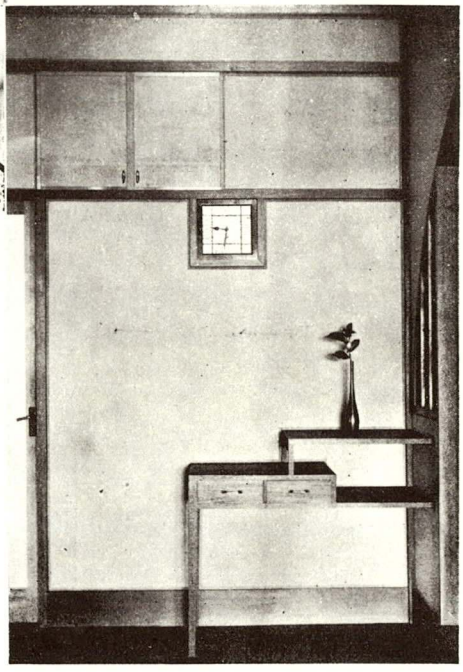
中、下、應接室 四疊半

床 及 棚 十 種

藤井厚二氏作



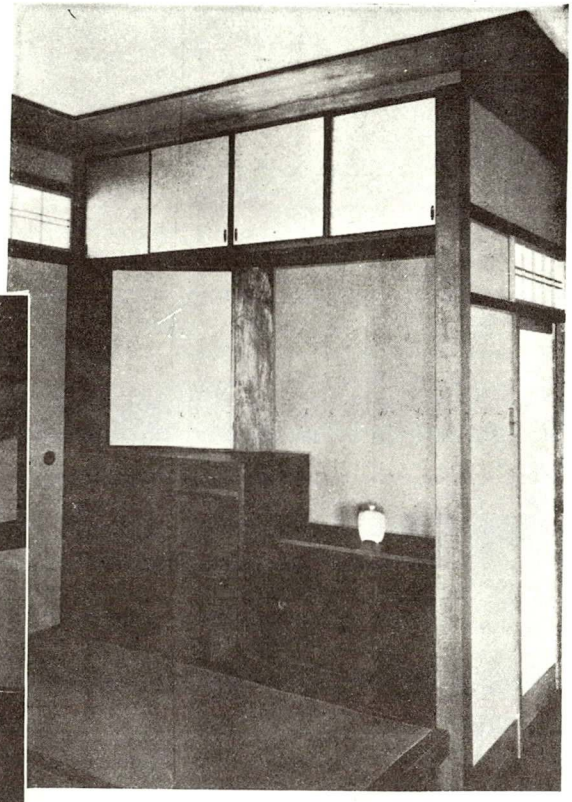


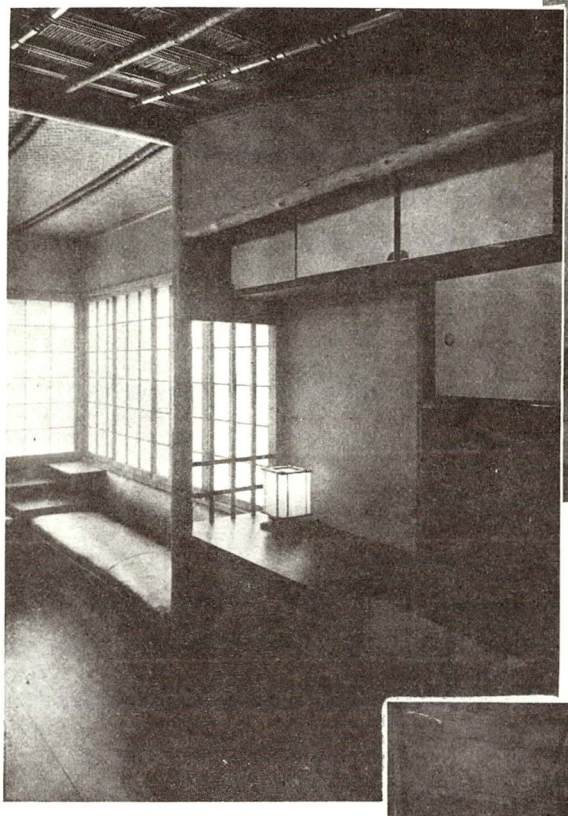


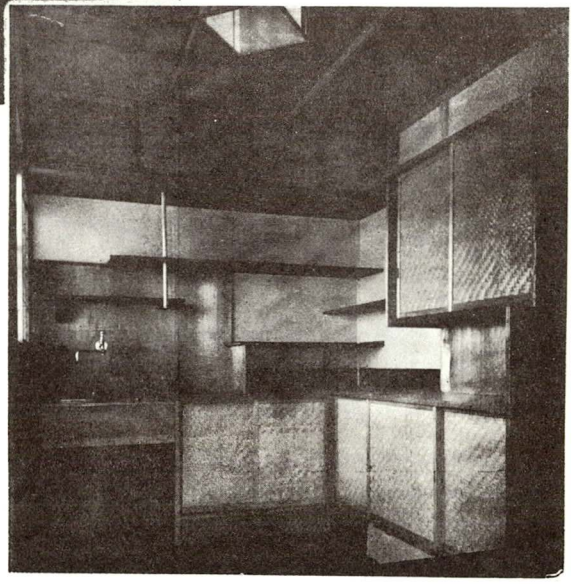
上、中　客室
下　居間の一隅

床及棚十種

藤井厚二氏作







上　佛　　檀
中　客室の一隅
下　調理室の一隅

床及棚十種

藤井厚二氏作

住宅の間取と構成について

——アレキサンダー・クライン氏の所謂『平面圖の要素』に關する一考察——

川喜田煉七郎

住宅の間取については嘗て、ア・クライン氏の研究から出發しました。その科學的な解折の方法を「國際建築」「建築世界」「建築畫報」などへ書いた事がありすが、その後、少しづゝこれに批判を加へ、かなり書きかへたいところも出來ましたので、ここで再びこの問題をとりあげて見ます。

尙、ここにあげたア・クライン氏の間取の實例は R·F·G (REICHS FOR'CHUNGS GESELLSCHAFT 叢書の第一編『平面構成と住宅經營』からとつたもので、此編には尙 DERLITZKI 教授、V. STRANTZ 夫人の「間取」に關する科學的研究の貴重な文献がのつてゐます。(後者は追つて紹介するつもり)

× × ×

第1圖にあげた四つの平面圖はどれもアパートメントの一單位である住宅であつて、その平面積、室數等殆んど等しいものです。

これを不用意に一見しましても全體の連絡とか機能の便不便など大した變りもない様に思へます。

しかし、次の A·B·C·D の四つの方向からこれを解剖し、吟味いたしますと、そこにある間取・構成の「組織的な要素」と「でたらめな要素」とが實にはつきりと解つて來ます。

勿論、今迄我々は經驗的にこれ等の吟味や解折の方々に觸れてきては居ます。しかし、そこには未だ個人的な作家感情の動き——設計の上の主觀——によつて、知らない内にかなりこの正しいものがゆがめられた事が多かつたのは事實です。

クライン氏が、萬人共通につかへるこの平面圖解剖の方法をもつて、我々が今迄雲を掴む様にこころみてゐた經驗法則を清算して、それをはつきり明るみへ持出してくれた事は、我々が大いに感謝していい事だと思ひます。

さて、この四つの方向とは左の通りです。

① {A——動線による批判 / A'——(Aの第二義的な吟味として)通行面積による批判}

② {B——活動面積による批判 / B'——床面の上のかげによる批判(Bの吟味)}

③ {C——平面圖の要素による批判 / C'——Cの各部に於ける吟味}

④ {D——壁面の展開による批判 / D'——Dの壁面蔭影による吟味}

この一々についてここで述べる事は、自分の前の紹介*とも重復しますので、略す事にいたしますが只今Cの「平面圖の要素」の批判について、稍くはしい説明をさせていたゞきます。

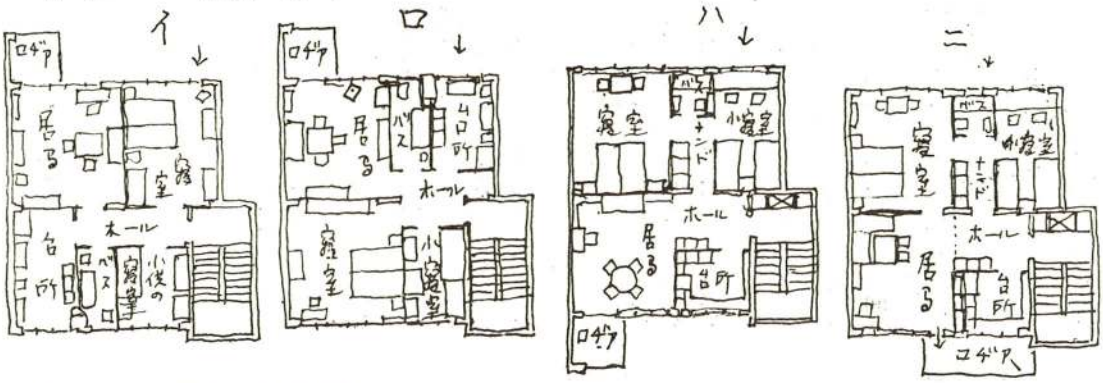
* 國際建築第六卷三號、四號、十二號、建築世界第二十四卷四、七、八號等々參照していたゞけば幸甚

「平面圖の要素」といふ言葉はクライン氏のいふ GRUNDRISS-ELEMENTE を譯したもので、これを尙、クライン流に定義すると、大體『眼の高さに於ける部屋の水平斷面』をもつて示された平面圖をいひます。

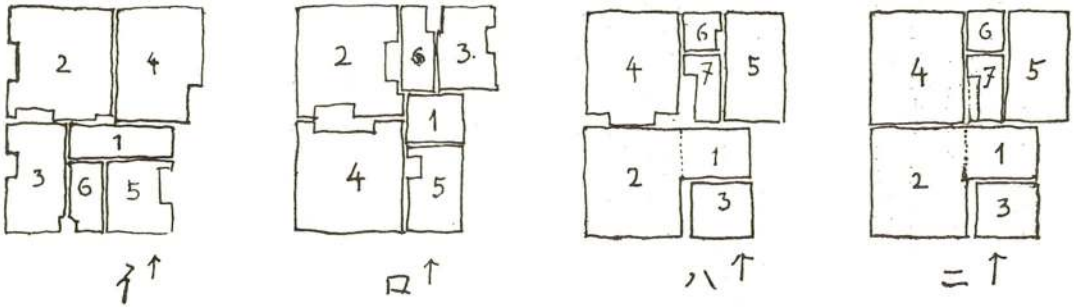
第2圖は第1圖の「平面圖」をこの眼の高さできつた「平面圖の要素」であらはしたものです。

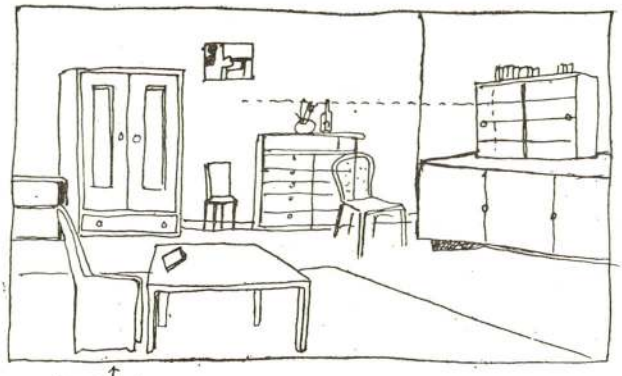
しかし、クライン氏は何故眼の高さでこれを橫斷したか、といふ事については何處をさがしても何

第一圖　R.F.G. 叢書第一編より



第二圖　R.F.G. 叢書第一編より





第參圖

の理由ものべて居ません。

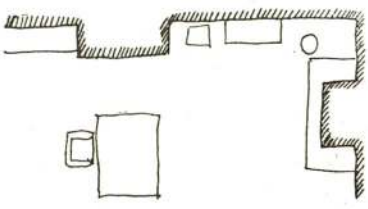
そして、これを横斷した理由として『我々が室内にはいると眼の生理的關係から（我々の眼はその形から見ても常に横に長くうごき縦にうごきにくい）室内の印象が先づ横の方に多く把握される』と述べて居ますが、どうも觀念的ではつきりしませんでした。

その後色々研究した結果、彼れの所謂「平面圖の要素」の意味がはつきり摑めました。

即ちここで室内構成と平面圖の要素について改めて自分の考へをのべる次第です。

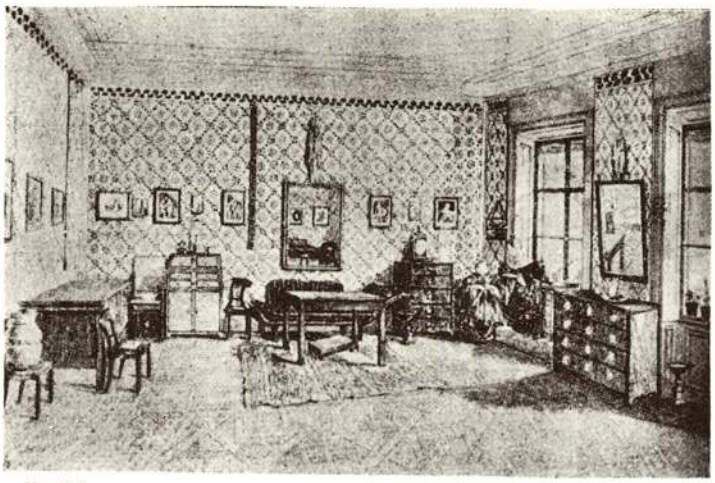
× × ×

四角い室に暖爐が突出し、急にアルコーブを設け、或ひは洋服戸棚、本棚、簞笥、さらに簞笥の上に品物がと、いろ〳〵な高さのものを恰も家具商の店の様にひたすらそれが必要なるが故にと並べる事はかへつて室を不便にし、その印象をきづつけるとになります。第3圖參照。尚第4圖は例のヨゼフ・アウグスト・ルツクスの著書「EMPIRE UND BIEDER-MEIER」からとつたその當時の「市民の居間」の圖ですが上述の「家具やの店」と當時ののんきな社會狀態を知



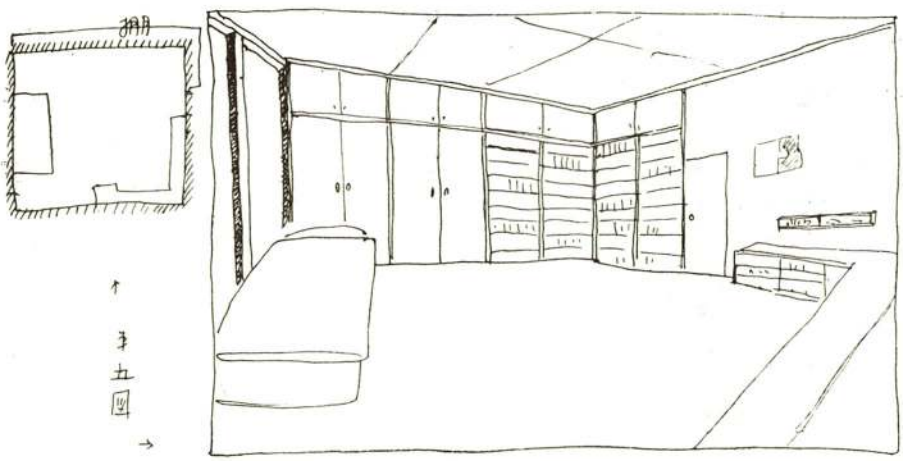
る上にすこぶる興味あるものだと思ひます。

當時は大低の家が廣くて、樂に家具を（建築と密接に關係のない家具）をこんな風にいくつもいくつも持ち込んで竝べて置かれたものらしいのです。所謂現在、室内設計家の因襲となつてのこつてゐる「室内のデザイン」のふりきれぬシツポが、はつきりと曝露されて居ます。



第四圖

これを證明する爲、ほゞ眼の高さを以てかうした室を横斷するとその切口は3圖の下にかいた様に或ひは2圖の左のプランの様に凹凸が、甚だしく室の印象をもつたいなく複雑にして居ます。在來の所謂室内意匠家は先づ室の視覺的な構成を工夫することを考へて、普通そのコンポヂションの上から戸棚、本箱、箪笥、テーブル等を例へばこんな風に配置しました—3圖—その結果多く問題は形が主題となつてともかくかうしたコンポヂションが適當に實用的であればいゝとされて居ました。或人は眼は水平にかゝる凹凸に添ふて歩き、ます〳〵室の印象をピクチユアレスクに美しくするものであると主張されて居ますが誤れるも甚しいものです。こゝで我々はかへつて在來の日本の建築からいろ〳〵な示唆を感ずるものが多い様です。



家具は寢台(蒲團)、椅子（座蒲團）にしてもたいてい建築の内に仕舞ひこみ、押入をつくつて壁面同様な戸(襖)等がこれを覆ひます床の間、違ひ棚等を吟味してみても、かゝる必要の要求から出發した形式であることが解ります。家具と建築とはこゝで決して區別出來ません。例へばルイ式の食堂にある置戸棚とか、飾戸棚とかの不必要な「裝飾の家具」はありません。日本間を眼の高さに於て横斷しても凹凸のないのが原則です。第5圖はかゝる點に注意して設計した室内構成の一例です。圖の左にあるのが、この室の眼の高さの水平斷面です、いたつてサツパリしたものです。

以上を別な方面から說明してみませう。大體壁面は三つの部分と性質に分けて考へるべきで

(1)床と云ふ塵埃の溜り易い部分に最も近いもの

(2)それから上三四尺の人の通行や物品のもち運びの爲損じ易い部分

(3)その上天井までの人の殆ど觸

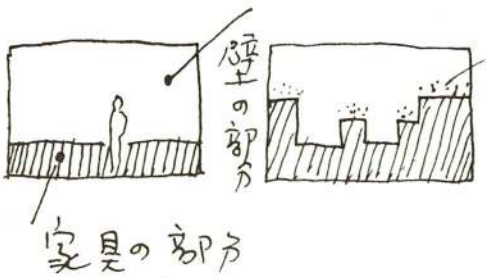
れないところ

と大體區別すべきです。この三つは現在でも適當な材料的な仕上と解決が與へられて居ます。（巾木と腰羽目と壁紙の如き）

尙この(1)と(2)を一しよにして大體これを二つに區別すると

(I)　机、テーブル、ベット、置戸棚或ひは机の上の簡單な整理棚等々の床からの高さで制限出來る『家具の部分』―之は高い室なら室全體の壁下の三分の一の部分にも當りませう。

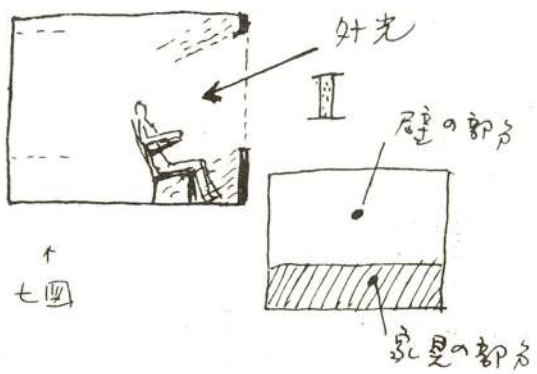
(II)　そして其れから壁の2/3に當るところを『壁面の部分』と區別して室の機能、室の印象の上から



第六圖

別な取扱ひをすべきであらうと思はれます―6圖參照―この廣い『壁の部分』に無理に下の『家具の部分』の要素をおくこと、例へば大きな丈の高い戸棚をおいたり本棚等をいくつも高くつみあげる事は機能の上から見てもよい結果を生まないと同樣に、又衞生からみてもよいものではありません。即ちこの部分はいたつて塵が溜り易く、且つたまつた塵がめだたず、又掃除をする上にも不便です。即ち、この部分は『壁』としての性質を出來るだけとるべきであつて、下の家具の部分とは全く性質を區別して考へるべきものです。前の水平的な橫斷を眼の高さでしたのは、實はこの「壁の部分」の稍中心になるところで室を切つてみて、そこに「家具の部分」が如何に浸入して居るか、混入して居るかをみることだつたのです。これがヂクザクになる時は多く「家具の部分」の浸入を證明する事になります。

戸棚或ひは本棚等でも例へば5圖に示した樣に「壁の部分」として取扱へば塵埃性を防ぐことによつて、或ひは又機能の上に於て効果があります。壁の部分に空間をのこしても、恰も床の間が小壁の下の凹みとして依然壁の性質をもつて居る樣に構成すればよいわけです。

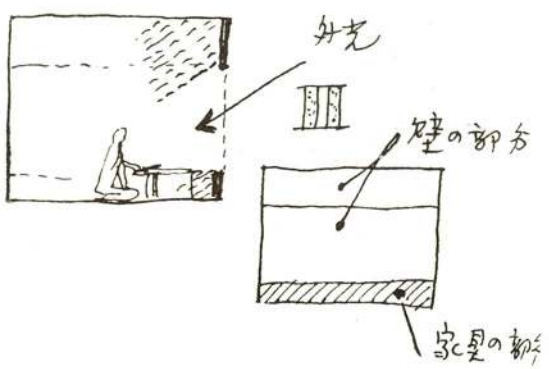


第七圖

窓はネガテイブの壁として考へられませう。入口は或時は壁として、（戸のガラスならざる場合）或時は前の窓の場合の樣に（ガラス戸の場合）考へられませう。

要するに私はここで家具の建築化を主張し、或ひは各室の家具化（MOBELIERUNG―コルの言葉）を主張するものであります。

これを次ぎに窓と壁の構成の問題に及ぼしてこの構成が在來の日本住宅から如何に、今明日の我々の住宅に進化すべきかを述べてみませう―第7圖參照。在來の固定樣式となつた日本の住宅でも家具の部分と、壁面の部分とは明らかに分れて居ました―7圖II。



だが前にあげた家具の部分よりも低かつたのです。座式と云ふ生活形式が必然そうさせたとみることが出來ます。（肘掛窓や机の高さ或ひは障子の腰板の高さ等々）

壁の部分はその生活の中で(1)少くも我々の手のとゞく範圍と、さ

らに(2)天井に接して人の觸れない部分に分れます。後者は鴨居によつて(1)の下の部分と區別され所謂小壁となつてゐます。これは材料の關係からも決定されたと見る事が出來ますが、今日或ひは明日に於ける必ずしも座式に束縛されない自由な生活形式では7圖の1の様に眼の高さも上になり、疊、押入等の固定した定寸も組織的に整へられていろ〳〵な型が出來て行くと同時に、ある時は小壁の部分迄も利用される機會が多くなつていつて居ます。殊に外光をこの自由な生活形式に適合させ様とする場合、主要な窓の高さは屢々この部分迄も來ます。

またこれも7圖に見る様に、在來の窓は、座式の形式に適合してその主要な光りが、例へば座して仕事をするに最も便利な様に窓の高さ（床からの高さ及び窓自身の高さ）が定まつたと見る事が出來ます。現在我々の生活形式ではこれを總體に上にあげて、其主要な光りを主として椅子によれる仕事に便利な様に補正されて來ます。

手のとゞかぬ部分も例へばサツシュ等の便利な發明で現在でさへ可なり自由に裝置され始めて居ます。

以上で大體「平面圖の要素」の第一番目の意味——「壁の部分」と「家具の部分」は區別して考察すべし——といふ事を述べ終りました。

しかしこの眼の高さに於ける壁の部分の横斷面は次に室内の平面の性質を批判する要素となるものでして、從つて室相互間の統一的比較、幾何學的相似等の問題に關係して來ます。

第2圖を再びみますと左の二つは右の二つに比べるとヂクザクの部分の多いことは前に述べたことですが、次に各部屋の平面圖要素(1)から(7)までの番號を以て示されたもの）を夫々の住宅に就いて比較してみますと

左の方の(イ)、(ロ)はその各室各空間の平面圖の要素の形態がいづれも違つてゐるのを發見します例へば(イ)の(1)ホール(2)居間(3)台所の三つの空間は(1)は細く、(2)はこれより太く、(3)はさらに太くなつて居ます。(ニ)の平面に於ける(1)ホール(2)居間(3)台所はいづれも全く同じ様な矩形で只それが擴張され、縮少された形態をなして居ります。

で、この平面圖の要素の相似、類似と云ふことが如何に建築の構成に及ぼすかを說明してみます。

私はこの平面圖要素の相似の問題は、いろ〳〵な意味で新いし室内構成（建築）を解決する鍵となるものだと考へます。

いまゝでの室内構成と云ふものは社會の生産關係の影響として、眞實な構成より視覺的なものが必然的に重ぜられて居ました。いままでのモダン建築家は昔の表面的な様式と云ふものに如何に飽迄新しい形態を置きかへるかと云ふのが恐らく問題でした。

で必然的に室内構成では、甲の空間から乙の空間へ移るとき、舞台裝置的變化が重じられて居ました。例へば卑近な例ですが、欄間の透し彫りの如き、庭園の石と木と水の配置の如き、或ひは拜殿に近づく時の一の鳥居二の鳥居の面白さの如き、所謂視空間における暗示の面白さ、——サゼツションの面白さと云ふものが、かなり考へられてゐました。例へばこの時代の盛期に現れたライトの建築等によくこれが反影して居ます。

恐らくライトは建築を自然のうちに草木の發生する様に考へて居ました。野や山を散步して、自然の美しい丘や草木が見えてきたり水があらわれたりするその視覺的な面白さを、建築に入れようとしたこの考へ方、所謂サゼツション的な考へ方が彼の建築の到るところに力强く現はれて居ます。

しかしかかる自然的、生物的な考へ方より建築と云ふものはむしろ科學的に生活の函を組み立てゝ行く様なものではないでせうか。我々はこの平凡な相似的な共通共同の函（空間）で、最少勞果の生活を生活しなければなりません。

この意味でクラインの平面圖要素の相似類似の批判は學ぶべきだと思ひます。試みにライトの代表的建築をこれによつて解剖してみますと、動線とか活動面積に於ては極めてすぐれたものが多いのにもかかわらず、この平面の相似と云ふ點から批判しますと殆ど價値ないものが多いのです。これはライトの建築がルネツサンスから様式選擇時代にかけての例へばシンメトリー偏重といつた様な形式主

義、ファサード主義を克服して立體的な建築をつくりあげた功績があのたくみな動線、活動面積の運用によつて示されて居ると同時にこの平面圖要素の相似的統一と云ふ問題から批判しまして、既に今明日の建築家ではないと云ふことを暴露して居ます。

ともかく、**平面圖要素の相似性から生ずる効果は**

●……住宅に於けるあらゆる技術的なエフエクトを發揮することが出來ること。

●……同時にそれは極端な經濟性を暗示して居ます。

で例へば窓のサツシュの様に同じ様な工業生産による型で室の機能を融通させてゆけます。

●……何も識別されない空間に自由に樂々と休息して居ると云ふ感が個々人に無意識のうちに生じて來ます。恐らくそれは最も近路をとつた形のない將來の建築へ共同共通の建築へ憧憬して進んで行きます。

●……各部屋を窓ガラスとか、ドアで相互に明快にすることが容易になつて來ます。（了）

要の一點

笹川愼一

凡そ社界の容器（いれもの）のうちで住宅ぐらひ多種多様に取り扱はれて居るものはあるまいと思ふ。又事實多種多様に扱はるべきで、甲の國、乙の國、甲の地方、乙の地方、甲の風習、乙の風習。有産階級、中産階級、猶又無産階級等、等。社界層の複雜極りなさに正比例する事は言を俟たない。

○

洋服の人、和服の人、しるしばんてんにパッチの人、シャツに半ズボンの人、世の人様々に其纏ふものは任意である如く、其生活の容器も人それ〴〵によつて採るべき行き方は任意である。只この種の容器を設計する人々が如何なる形式を撰ぶにしても、總ての方面からイーヂーゴーイングに陷らぬ様に努めねばならない事だと思ふ。

○

共イージーゴーイングで不快な一つは樣式偏重である。この過ちから割出された實用の遠慮とか、意義無き手法や、裝飾はよろしく切り捨てるべきだが、猶もう一つこの病が進で設計者から受繼いだ居住者の日常生活に迄「樣式の芝居」が割り込んで行く事。尤もこれは居住者の性質にもよる事だらうが設計者の不覺からそうした結果を生む事は世上屢々見受ける事で。尙重複するけれども、樣式に負けた設計者の消化不良の技術が居住者の生活線に迄及んだ樣は、ちやうど胃擴張患者が意地汚くあれこれと亂食して胃の腑につかへた食物が一向こなれないで靑息をついて居るさもしい姿を見るのと同じ樣な不快さを感じるものだ。

○

總ての立場から健康な消化力を持つて相應に意匠された快さを得る爲めには、設計者の生やさしからぬ自覺と努力を要とする。モダーンの皮を被てモダーンならざるもの、一見古きが如くして素晴らしく新鮮なもの、何れも當事者の心の健康、不健康に歸する事は言ふもおろかな事だ。

それから合理化の亂用——これも住宅建築に屢々起るデイレンマだと思ふ。

○

こんな例がある。ある家に作りつけの折疊式アイロン台を取りつけて、使用人の丈の高さに應じて使用の位置を三段位區別して拵へて置いた處、實際使用の際には丈の高いものが高い位置に、低い者が低い位置に据えて使用する事が滅多になく、いつも最初下した位置のまゝで高い者も低い者も其儘

使用して一向其段を利用しなかつたと云ふ事。

これを設計した人は大に合理的にやつた心算だらうが、何事にも單純化す事に妙を得て居る日本人には一々この高さの差別が却て煩はしい事になつて、一向其効果をあらはしてくれない。

○

こんな場合設計者は使用者の頭腦の働が悪いからだと不平をとなへるだらうが、これ等は誰にでも共通な適當な高さを撰んでその幾段にかなつて居るのを只一つにすれば經濟的にも、亦合理的にも、却て非合理の合理と云ふ事になつたのであらう。

くだらない一例に過ぎないが、これに類似の例はあまりに多く、あまりに屢々住宅建築に起り得る事實である。

○

本當の意味の合理化は總ての意味で單純化されたある一點を見出す事で、其一點をどうすれば握り得るかが設計者のねらひ所である。それを盲さがしする苦心こそ誠に味ひ深い事だと思ふ。

贅物をいくら澤山並べた處で、又如何に腕を振て器用に細部を仕上げた處で其一點を外して居たら其設計は零に等しいものである。

○

重ねて言はう、世にはこの例があまりに多過ぎる、單純化された要の一點を得る爲めに吾々は常々最大の努力を惜んではならない事だと思ふ。

神戸地方に於ける風向の時別變化

南　信

夏の風がどういふ方向から吹くか。

氣溫が最も昇る時刻に、或は室内溫度が最も高くなる時刻に、主としてどういふ風が吹くか。

そういふ事は知つて居ても悪くない事であるが、一般に測候所の統計の中に見出せないのは甚だ不便である。

○

神戸地方で、屢々住宅の計劃をして、そうした不便を感じて、神戸の測候所から貰つた統計がある。

これは高山四郎氏が同測候所の機關紙『海と空』第一卷第五號（大正十年九月發行）に發表されたものであるが、同氏の發表のものゝうち、夏期の六七八九の四ヶ月のものだけを、見易くする爲め圖表に書き換へて見た。

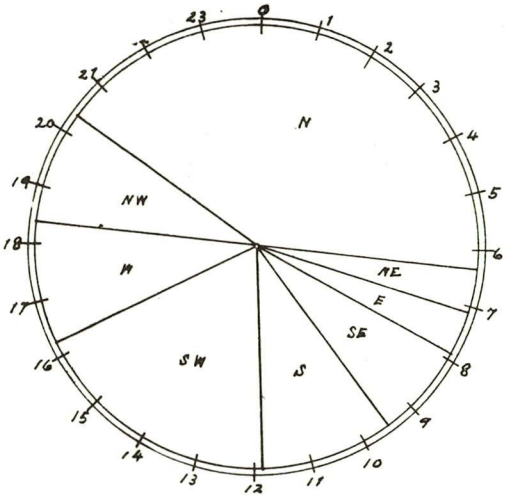
第一圖に屬する四圖は各月に於ける風向變化の平均時刻を表すものである。即ち風向を八方向として、各時刻に吹く最も多い風向を示すわけである。

第二圖に屬する四圖は、平均風向とその回數のパーセンテージをベクトルにて表したものであり、各ベクトルの端に示す數字は時間である。

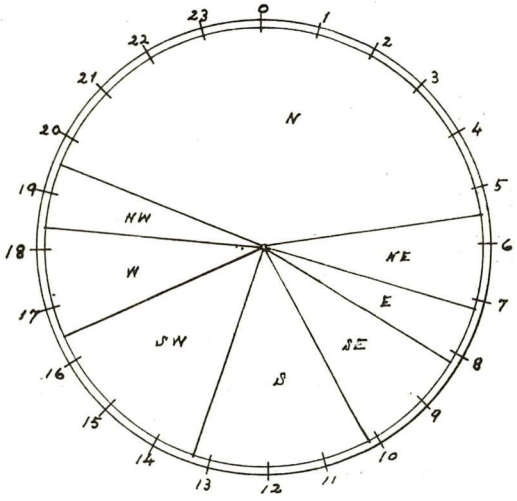
○

是等の表を見て見ると、一日の風向の變化は大體に於て夜半北風であり、午前東風に變り、正午に近く南風となり、午後西風となつて一週する事になる。

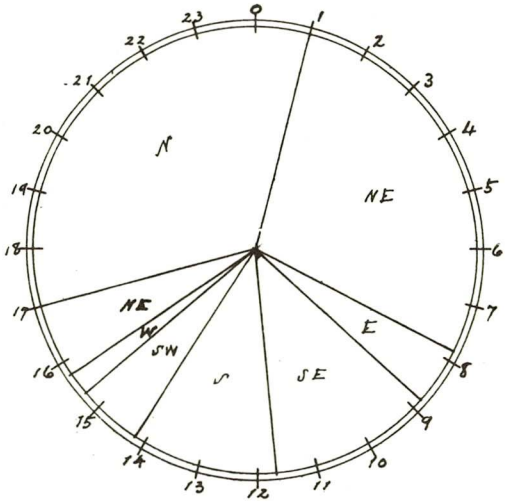
これは風向の變化が太陽の方向に一致するといふので太陽風と名付けて居るといふことであるが、かなり明瞭にその傾向を見出す。神戸地方及び阪神地方に於ては一般に西の開いてない家は暑いと信じられて居るが、室内溫度の最も上昇する午後四時前後から、住宅としての機能を最も發揮する夕刻の多くの時間に於て、南西乃至北西の風を持つ事は、此の信仰に對して可なりの重みを持たせる事になる。



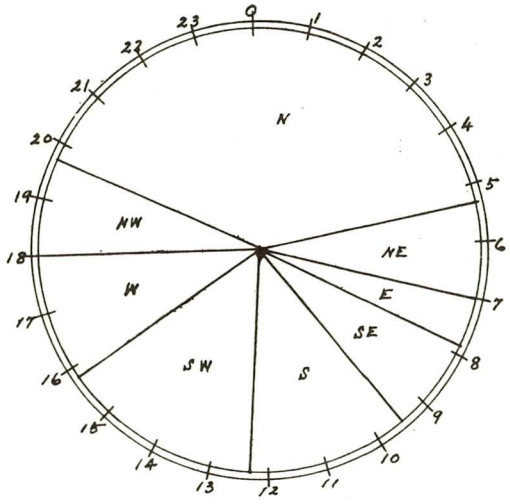
第一圖(b) 風向變化の時刻・七月



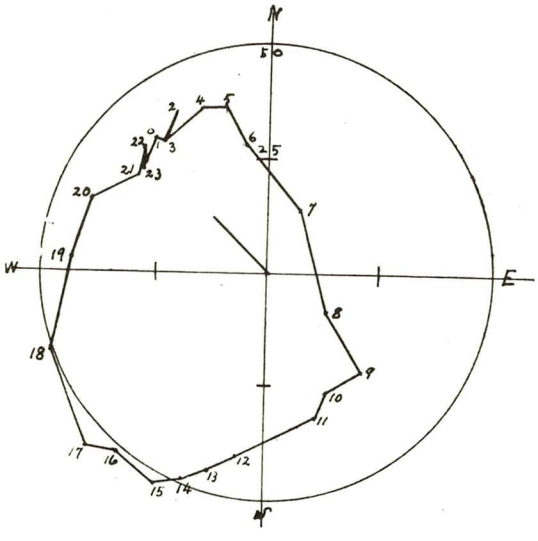
第一圖(a) 風向變化の時刻・六月



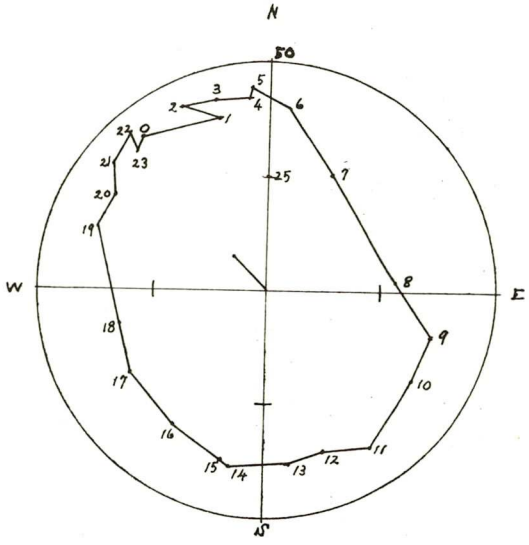
第一圖(d) 風向變化の時刻・九月



第一圖(c) 風向變化の時刻・八月



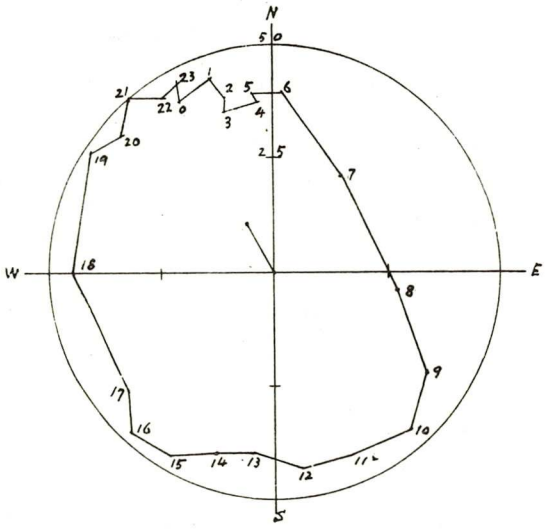
第二圖(b) 平均風向及回數・七月



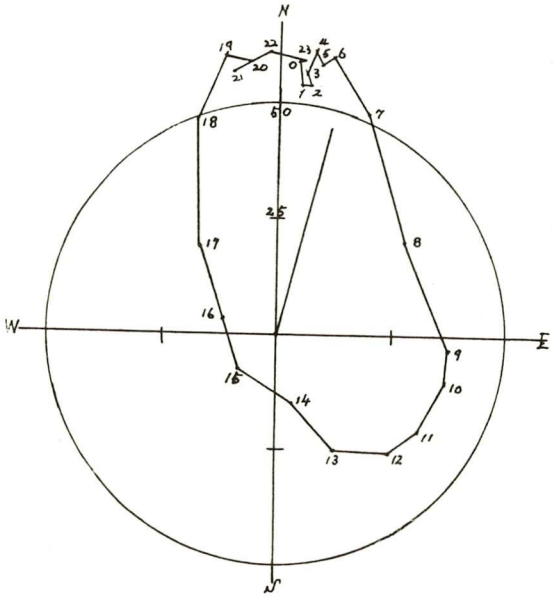
第二圖(a) 平均風向及回數・六月

住宅の間取に就て

柴谷邦子



第二圖(c)　均風向及回數・八月



第二圖(d)　平均風向及回數・九月

我が國民の最初の住家形式は、「天地根源の宮造り」が其の根本であつたが、時と共に發達して三韓征伐、佛教渡來などの事變がある毎に急速の進歩をとげ、平安朝になつてからは遂に所謂「寢殿造り」といふ上流邸宅形式が成立ち、この時代の一般庶民達は寢殿造りの中の一棟である對屋（たいや）の粗末なのを住家としたと見なして差支ない。鎌倉時代には「武家造り」の一つの新たな形式を作り、之が足利時代に及んでは武家造り中の表座敷を襖を以つて區分し、又上段の構へには明り障子即ち書院を設けて疊をしきつめ、雨戸をしつらへて所謂「書院造り」の形式が出來たのである。是等の住宅の形式に變化する事はその時代の思潮風俗に大いに關係のある所であるがそれに加へての趣味道即ち茶道、華道、盆景等々の力も亦大いなものである。此の書院造りは抑々今日の住家形式の元祖である。書院造りは豊臣時代の前後に於て大いに發達し、徳川三百年間には武家邸宅、商家、農家等各種各樣の形式で完成して來た。現代に於ては維新後既に六十有余年を超えて文物は非常に改まつたのであるが、住宅は今日尚徳川末期時代のものが多い。

住宅は生活の容器である。生活要件が變れば、之にともなつて容器の變る事は至當の事である、變らねば生活能率の擧がらぬ事も亦當然の事である。

◇

抑々住宅はこれを最小限度に縮少すれば、居間 Living Room 臺所 Kitchen 便所 Water closet の三部に歸着するのであつて、其の他の諸室はありとしても是等からそれ〳〵分化したものと見做してよいのである。例へば客間、食事室、寢室、書齋、納戸等は居間から變化分化したものであり、日本流の浴室、女中室等は臺所から分化したものであるとみて差支へがない。

現今中流住家に必要な諸室は其の用途から、家族用（奥の部）調理用（働の部）接客用（表の部）の三部に大別せらるゝが是等は各々獨立しつゝ適當に組合せねばならぬ。生活の程度、人々の趣味等に依つて更に雇人用浴室、化粧室、物品貯藏用其他の諸室が其の間に附加せられることもある。

住宅の間取は其根本に於て二つの方式に大別する事が出來る、即ち一は各室を獨立させ夫々の室を嚴格に其職能 Function を保持させるものである。即ち食事室は食事室、客間は客間、寢室は寢室として獨立するもので此の方式は大邸宅には便利であるが、小規模の中流住宅に應用すれば勢ひ室を數多く作らねばならぬ事になつて使用上甚だ不經濟である。

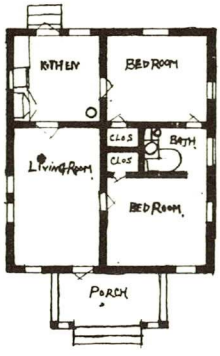
他の一つの方式は家族は居間を中心として生活し、居間のほかに數個の室があつてそれ等が必要に應じて種々の目的に使用さるゝやうにつくられるのである。日本在來の中流住宅のゆきかたは全く此の方法で比較的小さい住家に於ては、茶ノ間が中心となり、茶ノ間で食事もとり、來客との應待もこゝでし、夜になると是を寢室として使用さるゝのである。同程度の生活者で少し大きな家族になると、茶ノ間のほかに二三室をとり、それ等が大低家族の寢室として用ひられたものである。

◇

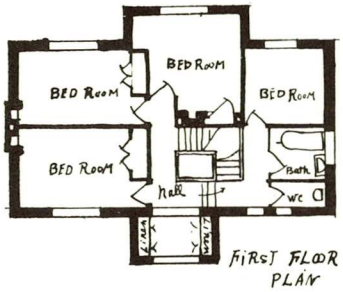
更らに少し大きな家族になると茶ノ間のほかに客間即ち座敷といふものが置かれてある。是が來客との面會所であり、來客に對する食事室であり、滯在客の寢室に用ひらるゝのである。

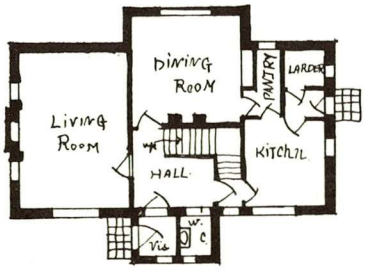
このやうに使用すれば非常に經濟で中流生活者からは喜ばれるのである。

更に西洋の住宅では勞働者の住家やアメリカ中流生活者の住宅は、勞働者の住家から自然發達したもので日本在來のとほゞ似て居て居間 living Rm. が中心となり、この室が家中で最も大きな室である、其處は家族の日常團欒する場所、來客の接待所、來客を含めての食事室ともなるのであつて他には小さい寢室だけである。



Living Rm. 中心ノ住家圖（米國）





Hallヲ中心トセル住家（英國）

イギリスの中流生活者住宅……それは最も多く日本に影響を及して居る西洋住宅である。昔十九世紀の頃に完成されたものであるがヴクトリア王朝時代に次第に富んで來た庶民は中流生活者であり乍ら、貴族の邸宅の樣式を模倣したのである。即ち小さい家であり乍ら Hall をとり、立派な客間、食事室を設け、そして各々家族の寢室を出來る丈け別々にとるといふやうな有樣である。故に同じ家族數であつても比較的多くの坪數を必要とし且つ雇人の手を多く要して經濟上甚だ不利なものであつた。しかし各々自己の室は他人におかされぬといふ Private が保持される點は長所である。

我國在來の住家は中流生活者の簡易生活には最も便利なものであつて、殊に室と室との間の仕切が西洋人の言ふ Sliding

paper walls で閉されて居るといふ事は一朝事のある時には、襖を取りはづして兩方の室を一つの室として使用することが出來るようなり、經濟上の立場から見ても推賞さるべきものと思ふ。たゞ襖であることは飾棚とか本箱等の家具を置く時に落ちつきがない。故に襖をとりさつて兩室を一つとして使用するのに妨げのない場所に相當の壁面をとるやうに考ふるべきである。近來簡易生活者は生活改善のために椅子式の室を必要とするが、簡製の椅子及輕るい卓子等が是等の室に用ひらるゝといふ事は、經濟上非常に便利な事であつて、是等の輕い家具は室を必要に應じて寢室などに使ふ場合に、西洋風の室内家具とちがつて安々と他の場所に運搬する事が出來て一つの室を種々の用途に用ひ得る便宜がある。

寢臺を用ふる事の最も利益な事は床面一尺以下の高さの所には塵埃と黴菌とが最も多いからその中に頭を横たえぬといふ事である。故に狹い家であれば晝間は折疊んで押入の中に始末をするやうな便利な寢臺を使用すればよろしい。

以上の様な二つの異つた方式があると同時に平家ならぬ二階建の住家にあつては、その室の使用法は二つの方式を見出すことが出來るのである。

一つは階下を居間、臺所、家族の寢室等にあて、來客に關係あるやうな書齋、客間等を二階にもつてゆくといふやうな都會地に發達した形式と、今一つは階下に居間、臺所、食事室、客間をとり、二階は全々家族用の寢室などに當てるやうな洋風式の間取とがある。

何れがよろしいかは住む人の職業とか、趣味、家族の狀態等からして判斷すべきであるが、衛生上の立場から考へれば家族の寢室を比較的塵埃の飛散の少ない、清淨な空氣のある、臺所や玄關等の繁雜な音響から遠ざかつた二階にとつた方が有効である。

◇

以上のやうに居間中心と相間（ホール）中心との二つの形式を述べたが、現代の中流生活者がはたしてどちらを取り入るるであらうか？個人主義個人意識の強い近代は家族全體一つ所に居るよりも各々專用室を持ち他人におかされぬ室のある事を欲して居るのではあるまいか？只經濟上最も便利な點のみでなく愉快を欲する心とか、變つたものを好む心とか、西洋風の生活をとり入れたい心とかの働きの多少に依つて、前者をえらぶべきか或は後者にしてよろしいかが決定さるべき事であらう。

是等は間取をする際に概念的に考へおくべき事であるが、そのほか間取の際の注意事項を擧げてみやう。

一、各室の連絡をよくすること。
一、各室とも各季節を通じて成るべく多くの日光射入をうけること。
一、通風がよく室内が乾燥しうること。
一、家全體のまとまりがあること。
一、家には相當のゆとりを持つこと。
一、最も經濟的に建てること。
一、家と道路との連絡をよくすること。
一、非常時の場合には避難しやすきこと。

等であつて、前にも一寸述べたが室の配置を

表ノ部―玄關、應接室、客室、書生部屋及之に附屬する便所、洗面所。

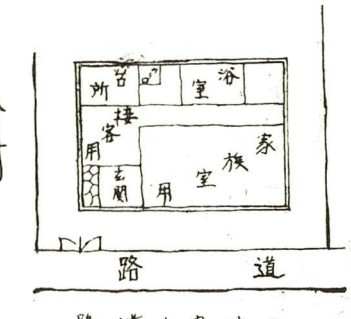
奥ノ部―居間、寢室、兒童室、食事室、納戸、女中部屋及之に附屬する浴室、便所、洗面所。

働ノ部―臺所、洗濯所等に分類する。

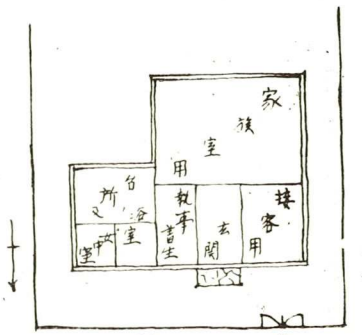
奥ノ部に屬する室をば多くは東南或は南に向はせるのが最上である。こゝは一家の中心の室であれば、日光の射入を充分にうけ、風通しよく衛生にかのふた位置にする必要がある。

表ノ部は多くは他人の出入に便利のやうに、道路に近くし、北或は東北にむけ、働ノ部は水や火を取扱ふべき所であるから、大凡これ等をまとめ裏口に近い方が便利である。但し大邸宅は道路の南側が敷地であれば、重要な室が大體日光をうけて衛生的な住家が出來反對に小住宅の場合には道路の北側にあつた方が衛生的である（圖參照）

若し又東西に狹く南北に細長い間取では晝間の充分な日光をうける事が少ないからかゝる家は冬季には寒く、夏には朝夕の仰角の小



少住宅ト道路



大都住宅ト道路

なる日光の射入から所謂田樂刺で一日中朝から晩迄暑くて耐え難い狀態になる。風向きから云ても南北の方向に風が通る家は涼しい。昔幕末の奇士松浦北海翁の書齋に一疊敷のものがあつたとて珍奇且つ理想のやうに評されたのを讀んだ事があるが、是は趣味のものとしてならよろしいのであつて、實際こゝにとじこもつて研究したり讀書したりするのは衛生上よろしくない。何ぜならば居室は一人宛の呼吸による瓦斯の量に依つてきめられるものである。最小限度大人一人宛十五立方米の廣さとされて居る。故に子供室でも作ろうと思ふて、二人の姉妹を一室におくなら最小限度三十立方米即ち八尺の高さの天井で六疊間以上なければ不衛生なのである。之はコツペンハウエルといふ衛生學者の實驗報告されて居るもので權威ある研究である。されば家族の數に依つてその廣さが大凡きめらるべきものである。

◇

室は使用上正方形、或は長方形がよろしい、むやみにきどつて鋭角とか鈍角の隅をもつた室は家具をおくのに不便であつて使用しにくい。住宅は家庭の外包であり生活の容器であつて、風雨寒暑を凌ぐの用のみではなく人間はその中に生れ、育ち、いこひ、老を養ふのである。婦人にあつては尚更四六時中全生涯を通じて、全生活をこの中で營むのであるから、住宅は健康、德性、和樂、活動等家族全體の心身を支配し、やがては社會のそれ等を支配するのである。住家は或意味に於ては人間生活を支配するといふ事が出來、人生に對して重大な意義を有するものである。

◇

近來は都會生活者にも容易に簡易に住まわれるやうに、アパートメントハウスが建てられ、利便をはかられて居る。このやうな所から考へると、あへて個人吾々が頭をなやまして設計をし家を建てるの必要がないやうにも思はるゝが一方政府の一つの國家的觀念涵養のための政策か、中流生活者には低利資金を貸與して個人の住ひを建てさせ、國家の根本たる「家」の觀念をもたせるといふ樣なことを參酌してみても、此の階級ですでに、是から各々の住家を建てるといふ事は益々あると思ふ。

それに各階級を通じて昔は住家は第二のものとし、服裝を第一に考へる樣な傾向があつた。きらびやかな服裝をした人の行くさきは汚しい長屋にはいつたり或はころびそうな家の中に消えたりといふ樣なわけで、その纏ふて居るものと住家とはあまりにかけ離れて居つた。しかし最近はその樣な極端な不釣合な樣をみるのも少なくなり住家と服裝とは均衡されたやうに見うけられる。

◇

「住のために多くの財貨を費ふ人間は文化人なり」「眞の文化生活はよく住むこと」等の言葉をきいても現代は「住宅時代」の黎明期であらう。住宅以外の公共建築は長足の進歩をきたし、我國にもビザンチイン建築あり、ゴシツク建築あり、メンデルスゾーン建築あり、ライト建築あり、且つその設備も科學の力に依つて最も愉快に能率的に發展されて居る今日、住宅にも世界の一大潮流におし流され、いつまでも坐式生活にのみ拘泥せず、能率衛生的なる椅子式に改め、文明の利器を應用し最も愉快な住み良い住家を完成する意氣道程にある現代の我國に於ては、特に一家の主婦たる立場よりして眞に能率的な住家に引上ぐべく力すべきである。故に家を新たに建てやうとするには、間取及設備の計劃を充分に氣をつけて氣のきいたものにしてゆきたい。實際上非常な多

室内裝飾に就いて

梶原緋佐子

額な建築費をかけ、見事な材木を使用して建てられた家であつても扨て出來上つてみて不便な所に階段がついたがために家中を廻つて二階に昇つたり、食事室と臺所とが餘りにかけ離れて能率があがらなかつたりする樣では、恐らく一生涯住はねばならぬその住家が、毎日の生活に不快と不便と不經濟とを味はせて、住む人に困難を感じさせるやうな事のないやうに氣をつけたい。それ等の失敗をなくするためには只主人の計劃や趣味のみでするのではなく、主婦と共に充分によく研究してプランを練り、大體プランの出來上つた時には家族中の老人も子供も共に家族の集會を開いて、それ〴〵意見をきくべきである。特に臺所とか洗濯場、子供室、押入等については日頃より實際使用上驚くべき發見をされて居る主婦の意見を愼重に傾聽し、それをとり入れてゆくべきである。そうすると間取に於ても、めつたに失敗する樣な事もなく、一生涯生活しやすい住家が出來るのである。

（完）

床の間には掛け物、挿花、等ときまりきつた裝飾、在るべき處に在る、といふことに自分達の眼は餘りに馴れ過ぎては居ないだらふか。ことに婦人室や居間は却つて無頓着に過ぎては居ないだらふか居間の明り、茶の間の火鉢の置き場所、座蒲團の色がもたらすやはらぎ迄にも細密な注意をはらひたいと思ひます。

○

各室にそれ〴〵の調度備品は定まつたものではありますが、どうしても日本間では各室の出入りが自由過ぎでつい客間の火鉢を二寸書齋へ持つて來てそのまゝであつたり、また茶の間の座蒲團を急ぎの場合に玄關へ持ち出して間に合せたりするものですから、裝飾といふ事に至る迄にも、各部屋に調和する樣に考へた、その部屋〳〵にキツチリあてはまつた備品調度を動かさない樣にしたいものだと思ひます。

○

そして各部屋には、どうしても一つとして動かす事が出來無い程にシツクリとあてはまつた形と、色調子とを持つたものをそなへつけたいと思ひます。

○

客間から玄關、客を送り出してホツと休息する茶の間のなごやかな氣分に入る、寢室のまどらかに靜かなたれこめた色につゝまれての感じ、そうしたいち〳〵各部屋毎に異つた感じと居心地を味はふため、一部屋毎に細心な心くばりを致したいものであります。

○

洋間でありますと壁紙の色がその部屋の大部の氣分をなして居りますから、その主色に合せてそれ〴〵調度備品を作つてゆけばよいと思はれますが、日本間は壁の色は比較的洋間の樣に壁それ自身を裝飾風に作るわけには參らぬ樣ですから、自然襖の色を考の中に入れたいと思ひます。襖の色は從來の場合簡單なゆはゆる襖紙でありまして、それも大抵は白地に雲母で單調な形をした樣なものでありまして、それが可成り無條件に客室にも居間にも強られて居たり致しますが、せめてその雲母摺の模樣になりとも各室の氣分に合はせて新らしく圖を作つて摺つてほしいものだと思ひます。

○

これは或る美術家のお住居で拜見したのですが、その婦人室ともいふべき處の襖が白地にしだれ櫻を雲母摺にしたものでありましたが、大そうよい調和を見せていた事でした。襖紙等は可成り自由なものでありますからまだ〳〵樂しんで考へを入れる事が出來る樣に思ひます。

臺所改善資料としての調査

鷲井清子
角靜子

Q　その他明りのこと等いろ〳〵氣づいて居る點もありますがまづ前申しました部屋毎の主調の色や感じをきめてあとは自づから合せてゆきたいと思ひます。自分の手で好み通りに最初から建築してかゝる自由さのゆるされた人ばかりでなく、假り住居の間にも日常の生活の根本である家の中の氣分を出來るだけ生かして生活する事は何よりの裝飾だと思ひます。

最近生活改善、生活改善と云ふ聲が喧しく世間で唱へられて來ておりますが、とりわけ我國民生活の狀況から考へますと、生活改善の先づ第一は食物及び食物調理の合理化であると思ひます。しかも主婦の一日中の仕事の食物調理に關するものが其大半を占めております。合理的な調理法をしやうとすれば科學的臺所施設をしなければなりません。臺所の能率增進を計つて行く上においては是非とも必要な事であります。如斯臺所は家庭生活上重要な位置を占めておりますが飜つて我國の今日の臺所を覗いて見ますと洵に寒心に堪へないものがその多數を占めております。母性再教育と云ふ事が盛んに唱へられてゐる今日、主婦の思想向上の爲の時間をも此臺所の能率化によつて生み出されるものではないかと思ひます

如斯するには先づ現代の住宅の臺所の實際狀態を調査し、その結果に立脚し種々細かい點をも改善して行かなければならないと考へ先づ大阪地方の實狀調査を始め

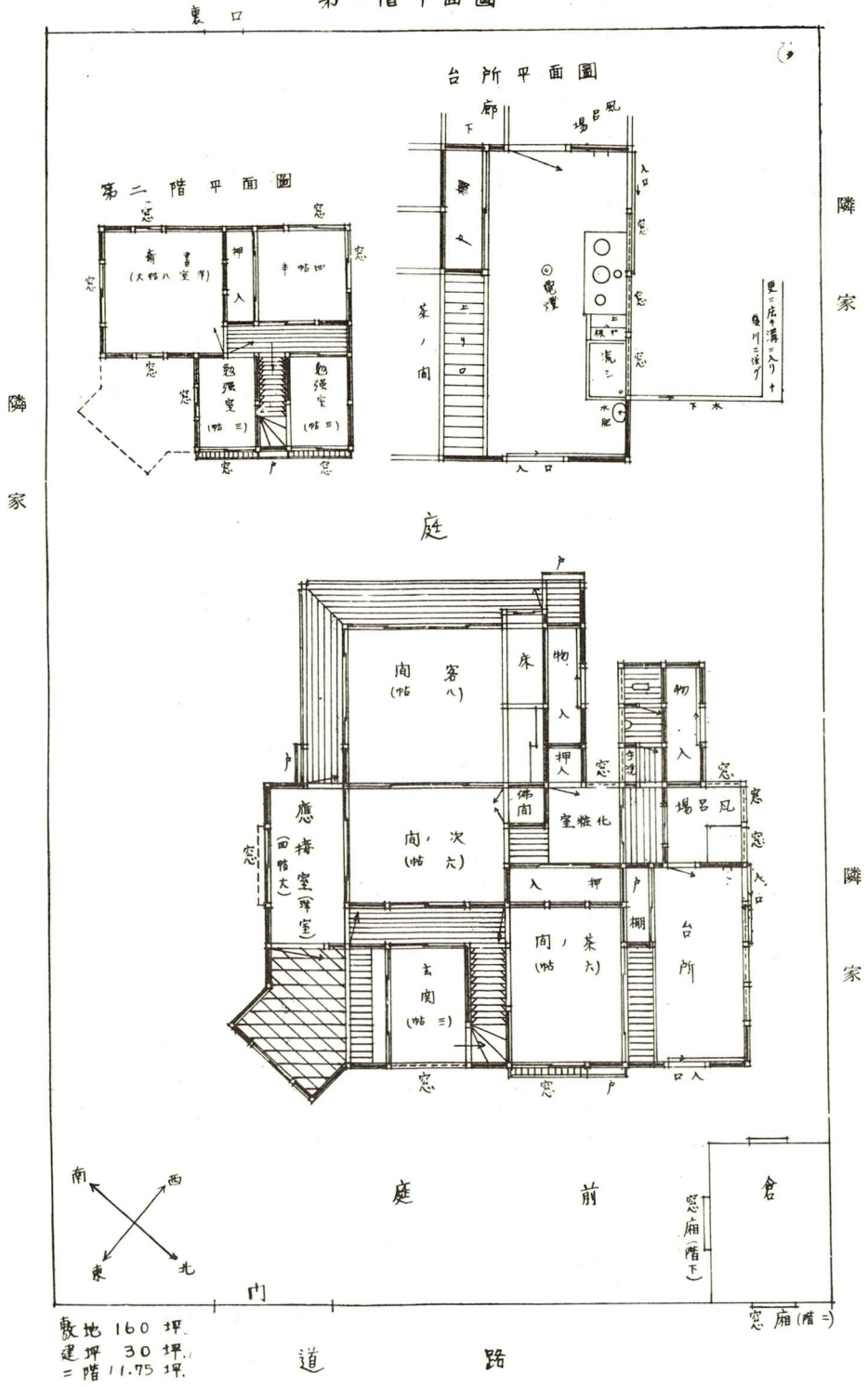
（注意　文字の下に線あるものは抹消を意味す）

表　第一

貴名	何某	住所	大阪府豐能郡萱野村字今宮			
家の職業	無職	家族人數	4人			
家全體	家全體の間取圖を書いて下さい　縮尺$\frac{1}{100}$					
	採光	否	備考	大阪の郊外住宅として日當り通風よし庭も子供本位である		
	通風	否				
臺所（空欄を滿しその他不用の個所は消して下さい）	臺所の設計圖を縮尺五十分の一で書いて戸棚、流し、電燈その他の配置も入れて下さい					
	廣さ	12尺×6尺	廣すぎる	狹すぎる	丁度よし	
	入口個數	2個	備考	なし		
	窓 大きさ	6尺×2尺	硝子戸障子	その他なし	天窓有無	
	窓 個數	2個	臭氣拔有無	備考	なし	
	床	土間	板敷	タヽキ	其他	床は揚板
	流し	石製	木製	其他		下は戸棚、上は棚
	戸棚 樣式	引違戸。食器戸棚は開き戸（間口3尺奥行1.2尺）				
	戸棚 大きさ	間口6尺	奥行1尺5寸	高さ6尺		
	戸棚 內容物	戸棚には不用品乾物。食器棚には食器類罐詰等				
	防鼠、防蠅	設備	窓に蠅よけの網を張る。蠅取器あり。鼠のためには心配なし			
	廢物處置 塵箱	所在	裏口の外、臺所の中にてはバケツの中に入れる			
	廢物處置 塵箱	設備	木箱にコールタールを塗る			
	廢物處置 流し	行方	外部の暗溝に入り流れる			
	廢物處置 流し	臭氣	有無	改善の必要	有無	
	物置	有無	備考	臺所の出口のすぐ右側。トタン屋根不用品薪炭漬物を入れる		
	給水	水道	井戸	ポンプ	その他なし	
	燃料	電氣	瓦斯	薪炭	同	
米の置場所	戸棚の中の木製米櫃の中					
野菜その他の食品の置場所	戸棚の中又は調理臺					
調理臺ガス臺その他の臺の高さ	一定　一定ならず					

A 圖 地 空

第一階平面圖


裏口
台所平面圖
廊下
風呂場
入口
窓
竈
茶ノ間
流シ
水肥
下水
第二階平面圖
書斎（六帖八室半）
押入
洋間（四帖半）
勉強室（六帖三）
勉強室（六帖三）
隣家
庭
寢室（次ノ間六帖）
床
物入
押入
佛間
化粧室
風呂場
物入
洗濯
應接室（四帖大）
玄関（三帖）
茶ノ間（六帖）
押入
戸棚
台所
南
西
東
北
門
庭前
倉
窓 扉（二階下）
窓 扉（二階）
敷地 160 坪
建坪 30 坪
二階 11.75 坪
道路

No.1 第二表 調査結果

調査戸數 35戸

一戸内家族人員		住居區域		職業別		敷地數		建坪數	
3人家族	9戸	舊市内	7戸	會社員銀行員	12戸	30坪以下	10戸	30坪以下	8戸
4〃〃	5〃	新市内	12〃	無職	7〃	50〃	4〃	40〃	10〃
5〃〃	4〃	郡部	6〃	教員	5〃	100〃	6〃	50〃	
6〃〃	5〃	地方	10〃	商業	4〃	150〃	4〃	60〃	2〃
7〃〃	2〃			醫師	4〃	200〃	7〃	70〃	1〃
8〃〃	5〃			官吏	2〃	300〃	2〃	100坪以上	2〃
9〃〃	2〃			實業家	1〃	300以上	2〃	200以下	2〃
10〃〃	2〃							200以上	1〃
32〃〃	1〃								
平均	6.2人					平均坪數	100坪	平均坪數	30.4坪
最大人員	32〃	最多數	新市内	最多數	會社員銀行員	最大坪數	344.5〃	最大〃	78.25〃
最小人員	3〃			最少數	實業家	最小坪數	16.5〃	最小〃	16.5〃

No 2

疊數		臺所の位置		臺所の廣さ					
				實數（坪）		疊數との比		人員との比	
30坪以下	13	東にある家	5戸	1坪以下	1戸	（臺所の廣さを1として）		（1人當りの臺所の廣さ）	
40〃	10	東南〃	5〃	1.5〃	7〃	3前後	4戸	0.3坪以下	8戸
50〃	5	南〃	2〃	2〃	5〃	5〃	7〃	0.5坪前後	14〃
60〃	1	南西〃	3〃	3〃	10〃	7〃	13〃	0.7〃	6〃
70〃	3	西〃	8〃	4〃	3〃	10〃	8〃	1〃	4〃
80〃	2	西北〃	1〃	5〃	4〃	15以上	3〃	1.5〃	1〃
90〃	—	北〃	6〃	6〃	2〃			2〃	2〃
100〃	1	東北〃	5〃	6坪以上	3〃	（但し疊數は坪になほして用ふ）			
平均疊數	39.9			平均坪數	2.8				
最大疊數	92.5	最多數	西	最大〃	11.0				
最少〃	19.0	最少數	西北	最少〃	0.94				

No.3

床		窓							
		窓の大きさ（坪）		床面との比		窓の建具		天窓	
板敷	11戸	2坪	1戸	（窓を1として）		硝子戸	28戸	有るもの	8戸
タタキ	20〃	1—0.5	10〃	1以下	1戸	障子	3〃	無きもの	27〃
土間	5〃	0.5—0.3	11〃	3前後	4〃	窓なきもの	4〃		
		0.1前後	8〃	5〃	3〃				
		窓なきもの	4〃	7〃	6〃				
				10〃	6〃				
最多數	タタキ	最大	2坪			最多數	硝子戸		
		最小	0.1坪						

No.4

臭氣拔		戸 建具		戸 奥行		棚 高さ		棚 内容物	
有るもの	6戸	引違戸	32戸	1尺のもの	5戸	3尺	2戸	食器	35戸
無きもの	29〃	開き戸	9〃	1.2尺〃	5〃	4〃	1〃	膳腕	21〃
				1.5〃	10〃	4.5〃	1〃	米	26〃
				2.0〃	12〃	5〃	12〃	調味品	12〃
				3.0〃	8〃	5.5〃	2〃	穀類	9〃
						6〃	11〃	食品	6〃
		作付なるもの	21〃			8〃	1〃	瓶詰	2〃
		作付ならざるもの	5〃			不明	6〃	櫃	2〃
		不明なるもの	9〃	間口				乾物	3〃
				3尺のもの	15戸			不用品	2〃
				4〃	2〃			食卓	1〃
				4.5〃	1〃			茶器	1〃
				6〃	18〃			漬物	1〃
				8〃	1〃			酒	2〃
				9〃	2〃			大工道具	1〃
								果物	1〃
								その他	1〃
				奥行最多數	2尺	最多數	5尺		
				間口〃	6尺				

No.5

米の入れ場所		流し		竈		給水		排水	
木製米櫃使用	25戸	石製	15戸	燃料		井戸	17戸	(流しの水の行方)	
ブリキ製米櫃使用	3〃	木製	12〃	薪炭	27戸	水道	29〃	下水	7戸
戸棚の中	7〃	木のトタン張	6〃	瓦斯	26〃	ポンプ汲上	13〃	溝	10〃
		木の銅張	3〃	石炭	12〃			暗渠	11〃
				炭	6〃			池	1〃
				石油	1〃			川	6〃
				コークス	1〃			不明	1〃
				揮發油	1〃				
				オガ屑	1〃				
				電氣	3〃				
		臭氣の有無							
		有	6〃						
		無	29〃						
		改善の必要							
		有	14〃						
		無	21〃						
				最多數使用	薪炭	最多數	水道		

No.6

廢物處置		防鼠		防蠅		物置		調理臺其他臺の高さ	
塵箱所在		設備なし	33 戸	設備なし	33 戸	有るもの	22 戸	（作業面の高低）	
裏口外	3）戸	ねずみとり	1 〃	窓に金網	3 〃	無きもの	13 〃	一定なるもの	19 戸
門外	5 〃	ねこ	2 〃	蠅取器	2 〃			不一定のもの	18 〃
表の軒下	2 〃	要所にトタン張り	1 〃	蠅取紙	1 〃	屋根トタン張	6 〃		
						屋根瓦張	5 〃	（但し一定なるも臺が低いものがある）	
						不明	11 〃		
臺所にては									
バケツに入れる	28 〃					内容物			
ちりとり	3 〃					不用品	2 〃		
籠	1 〃					薪炭	14 〃		
箱	3 〃					漬物	6 〃		
						皿鉢等	1 〃		
塵箱設備						調味品	1 〃		
コールタール塗	27 〃					傘	1 〃		
クレオソート	1 〃					園藝具	1 〃		
土製	1 〃					食品	1 〃		
不明	4 〃					商品	1 〃		
						その他	1 〃		
						内容物最多數	薪炭		

たわけであります。その第一歩と致しまして大阪所女子専門學校家政理學科一年の三十五名の人々に第一表及A圖の形式をもつて調査記入をして戴きました。

調査結果としましては大體第二表No.1—No.6の様になりますが、調査家屋三十五戸中家族人數は平均六・二最大家族人員三十二人、最小家族人數三人であります。

◇

調査住宅の分布狀態はやはり新市内が最多數で三十戸中十二戸であります。學校の位置の關係上住吉區のものが割合に多くありました。

家主の職業は銀行員會社員が最多數、次いで無職、教員の順であります

住宅敷地は大體二五坪—三〇坪の家が多く最大は三四四・五坪の郡部の住宅、最小は一六・五坪の新市内の住宅であります。平均は一〇〇坪となります。

之に對して建坪數は二〇坪前後の家が一番多く、最大建坪數七八・五、最小一六・五坪、平均三〇・四坪であります。この數字と前の敷地の數字とを比較して見ますと平均及び最大は約建坪一に對し敷地三で理想的の割合になりますが、最小は敷地の殆んど全部に家屋が建てられると云ふ事になり、市街地建築物法の最小度限よりも更に割合の惡いものであります。

疊數は大體二五—三〇疊が一番多く、最大は九二・五疊、最小一五疊であります。

◇

臺所の位置は西向が多いのですが、之は大いに改良さるべきであらうと思ひます。けれども市街地等で都合のうまく行かないものもありますから、その時はなるべく窓や入口等光線の入るところを他の方向へ向けなほしたいものであります。西に次いで北向が多いのでありますが、之は窓さへ大きく取つて採光を充分にすれば良いと思ひます。普通大ていは居間や客間、寢室等に南や東をとりますの

でどうしても臺所は割の悪い方向になりますが、それかと云つて臺所を南にとつて失敗した經驗のある方もある様です。夏は冷房として使用する臺所なのですからやはり北や東の方が良いと思ひます。

臺所の坪數は一番多いところが三坪でその次が一・五坪であります。一體臺所は狭い方が働きよく整理もしやすいものです。ですから三人くらゐまでは一坪でも充分です。其他一・五坪から、相當な家でも三坪あれば充分でせう。調査の結果其内に最大十一坪のものがありましたが普通の家としてはとても大きすぎますが、之は女專の寮で三十二名も住居してゐるところですからさもあるかも知れませんが、しかし此の場合之の半分くらゐでも設備さへ充分にすれば良いものが出來たであらうと思ひます。又田舍の家では割合に臺所が廣く、土間にして大へん働きにくいものですが、今日では段々改良せられて新住宅では理想的に行きつゝある様です。

◇

臺所の廣さと疊數の比について申しますと疊數は住居面積を意味しそれを坪數にて出したものと臺所の坪數とを比較したものでありますが、疊數七に對して臺所の廣さ一の家が一番多く、次いで十對一のもの、五對一の順になつてゐます。平均して約住居面積の八分の一が臺所の廣さとなつてゐるのが普通の様であります。

臺所の廣さと家族人員の比、即ち一人當り臺所の廣さは〇・三坪—〇・一坪で一坪以下が大部分を占めて居ります。

家族人員三名の家が最も多くありましたが一人當り〇・五坪として三名の家では一・五坪即ち三疊の臺所となります。普通五人以下の家庭としては丁度適當な廣さのものとなります。ですから廣さについては大體に於て理想的なものであります。

床はやはり關西式そのまゝのタイキが多く板敷の家はその半數であります。更に板敷かリノリウム敷に改良して食事室からでもどこからでも下りたり上つたりする必要のないくらいの高さにしたいものであります。

◇

臺所の窓については窓の無いところが四戸、内二戸は天窓もなく入口の所謂裏切戸を開け放つてそこより光線をとると云ふ家がありました。實際吹きすさぶ嚴寒に於て戸を開け放たなければ直接外光線を入れる事の出來ない様な不便な事では臺所作業の能率上よくないばかりでなく、非衛生此の上もないものであります。窓の大きさについては大體二分の一—三分の一の高窓が多く、戸は引違ひの硝子戸が大部分を占めてゐます。

◇

設備といたしましては第一に戸棚でございますが戸は引違戸が大部分を占めて居ります。臺所に開き戸をつけると兎角邪魔になり勝ちですから、之は別に改良すべき點では無からうと思ひます。しかし割合に金網を張つた戸棚等を使つてないのを遺憾に思ひます。大てい作り付けで、奥行き二尺が一番多いのでありますが戸棚はなるべく淺く一尺二寸位にしたいものです。間口は大てい一間の戸棚が多く、又戸棚全體にわたる大きな戸をつけたのが多い様ですが、なるべくなら戸棚の内部を細かく仕切つて一つ〳〵に戸を付けて、入用な品物を取るために不必要な所まで開閉せねばならない大きな戸は改めたいものと思ひます。

米の置場でありますが大てい在來の米櫃を用ひてゐる様です。近頃考案された船底式の米入れを用ひてゐるところは一戸もありません。

戸棚の内容については大てい食器類が大部分を占めてゐる様です

野菜その他の置場所としては流しの上や下等が一番多く、意外に感じましたのは冷藏庫を使用するところが大へん少く一戸しかない事でした。文明の利器もあまり高價なものはやはり用ひられにくいのであらうと感じられます。

◇

流しは石製が一番多く、次に木製のものが多い様です。一體に低すぎて困ると云ふ人が多くありました。これまでの書物等にも理想的な高さの寸法等は出ては居りますが實際改良されてゐる家は殆んど無い様です。昔からある流し等でもその當時に於ては適當な高さにつくられたものであつたのでせうが、近頃段々と女子の體格も良くなつて來、母の時代の道具その

まゝでは低すぎると解するもあへて過言ではないと思ひます。よし新しくつくらなくとも下に足つぎをするとかの方法で間に合ふと思ひます。

竈は燃料によつて定まるものですが燃料としては薪炭が一番多くその次に瓦斯であります。風呂用として石炭が大部分用ひられてゐる様です。電氣萬能の時代になりましたが電氣の利用は割合に少い様です。値段から云ひましてもやはり瓦斯が一番安價に便利である様です。

◇

給水の方法は水道が一番多く、井戸でもポンプ汲上の割合に多いのは井戸の大分改良せられつゝある事を示してゐると思ひます。

排水として流しの水は何處へ流れるかを見ますと單に下水と書いてあるのが七、溝が一〇、暗渠が一一であります。下水は暗渠か、開溝かの區別がはつきりしませんが大たい開溝、暗渠を比較しますと同數ぐらいです。もつと排水裝置の改良をしなければならないのではないかと思ひます。

流しの臭氣の有無は、無いのが多いのですが臭氣有、改良の必要なしとしてゐる人もありますから無頓着と云へば云へますが、それが非衛生であるか否かと云ふ事も氣づかずに只あり來りのまゝを毎日機械的になして、改良したいと云ふ慾望も持たない婦人が多いのではないかと疑はれます。改善の必要の有無も無しとしてゐる人がかなり多くありました。

◇

廢物處置といたしましては塵箱は裏口の外に置くのが一番多く、臺所の中ではバケツを使用するのが一番多い様です。塵箱は大ていコールタールを塗つたのを使用してゐられます。近頃考案された、流し又は調理臺からすぐ屋外に出せる裝置の塵箱を使用してゐられるところはありません。此改良器も使用した人の經驗では便利ではあるが臭氣が臺所に後捩りをしあまり感じのよいものでは無いと云ふてゐられる方もあります。これらの便利な器具も更に研究さるべきものと思ひます。

◇

物置を有してゐる家が澤山ありましたが、多くトタン屋根や瓦屋根になつておりました。その中には主に薪炭、漬物等を入れてゐられるのが普通の様です。

調理臺、配膳、その他の臺の高さが一定であるか一定でないかと云ふ事について見ますと大體同數でありました。之も改良の途上にある事を示してゐると思ひます。此調理臺その他の臺の高さが一定か否かを調べましたのは、臺所作業の能率を高めるにはどうしてもその作業面を一定にし、中腰になつたり、しやがんだりする事による體の疲勞、時間の勞費を避けたいからでした。家庭の婦人が早く老けると云ふのもこうした毎日の疲勞が度重つた結果からだと云ふ様な事を聞きましたが成程當然の事だと思ひました。ですから設備を完全にし、種々なる臺所器具の配置を順序よく、出來るだけ文化的設備をほどこし、作業能率を高めると云ふ事が目下の急務であります。

◇

これで調査内容については終りましたが此内、特に感じました事を二三のべますと、第一に衛生設備の輕少である事でございます。

窓の面積と床面積との比率が大へん惡く、是れでは到底光線を充分に導く事は出來にくいと思はれます。方向をも考へてなるべく西にしない様にしたいものです。之が最も改良を要するものと考へられるものでございます。

その他給水設備の改善と共に排水設備を考へる必要があるのでは無いでせうか。特に社會的に此方面について考へてほしいものだと思ひます。又防蠅防鼠等についても在來あまり考へられてゐませんでしたが、金網を張るにしても半間四方で二圓五〇錢位で出來るのだそうですから、もつと利用されたら良いと思ひます。

◇

又能率の方面から申しましても臺所の床面を揃へると云ふ事と、臺所に置く物の配置を仕事の順序に應じて置く様にすると云ふ事と仕事面を一定にすると云ふ事が大變重要な事と思ひます。調査に於て見ましても之に關しては今まであまり注意を向けられてゐない様に思はれます。今後は大いに考へて頂きたいものであります。

或識者は完全な臺所の必須條件

組み合せ式台所

岡田孝男

を次の様に擧げて居られます。
一、清潔　四、換氣
二、便利　五、防蠅
三、光線　六、防鼠
七、防蟻　八、文化的施設

本調査と此理想條件とを比較して見ましても以上の様に雲泥の差があります。これによりましても

いかに改善せられなければならないかゞわかると思ひます。（完）

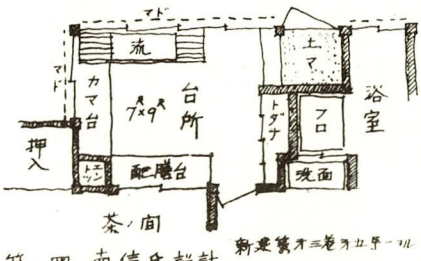
筆者附記

（尚之は調査の一部を報告したもので不完全でございます。尚調査は續けて行きたいと思つて居ります何かと欠點のある事でございますから御氣付きの點は御注意頂きたいと存じます。）

台所は一家の生命の糧を調理する所である。明るく、清潔にすることは勿論であるが、三度の食物を作る爲に四六時中使用される所であるから、働きよい様に、夏涼しく、冬暖く、換氣をよくし、器具は便利な配置におかなければならぬ。

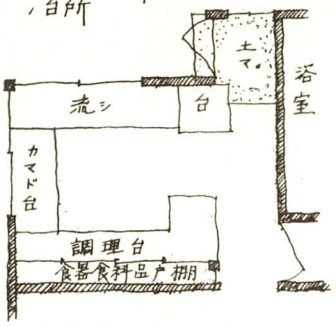
事實此頃新築される住宅では、みな便利な台所が造られて居る。建築家の台所に對する研究も進み一般の人々のこれに對する理解も出來ていやしくも自分の家を建てる位の人々は客間や居間と同じ程度に台所の利便と云ふことに意を用ひる様になつた。その結果いろ〳〵便利な台所が考案され、實施されて居るのは喜ばしいことである。

例へば南信氏の考案（第一圖）に

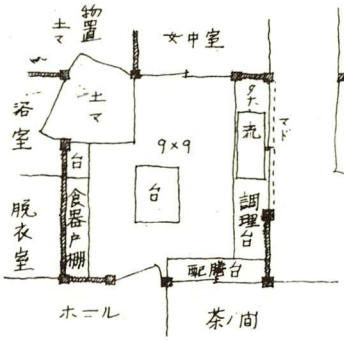


新建築オ三巻オ五号ニ掲

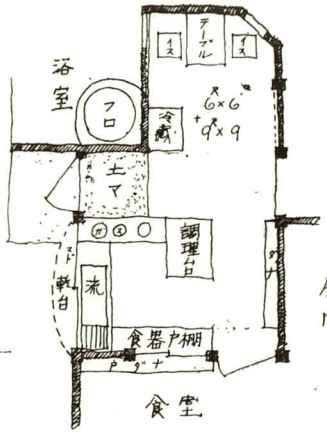
第一圖　南信氏設計ノ台所



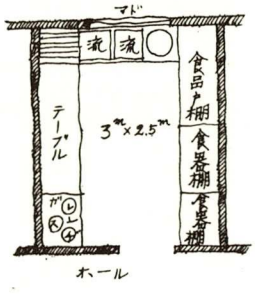
第二圖　遠藤新氏設計ノ台所



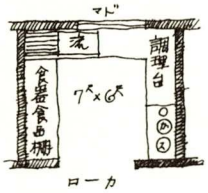
第三圖　藤井博士設計ノ台所
（新建築オ三巻オ十号ニ掲）



第四圖　武田博士設計ノ台所
（新建築オ六巻オ一号ニ掲）



Ladwig Hilbersimer, Berlin
設計ノ台所
(Das neue Frankfort. Nov. 1929ニ掲)



Hans Leuzinger, Swiss
設計ノ台所
(Das Werk Feb. 1931ニ掲)

しても、又遠藤新氏のそれ（第二圖）にしても、藤井博士のそれ（第三圖）武田博士の考案（第四圖）にしても、いづれも便利衛生を主とした巧な台所である。

◇

これ等はいづれも個人の住宅の台所として考案されたものであるからいいとして、一度目を借屋の台所にむけると、これは又その無頓着、無設備に一驚するであらう。二帖か三帖位の土間に、流しとガス台と棚の一枚位が申し譯につきそれに奥行三尺の押入がついて居る位がせいぜいの所である。引越して來て台所道具を配置しやうとして、その不便さにあきれ、仕方なしに水屋や蠅入らずを買つて來たり、棚を釣つたりして、その不備を補ふのであるが、どうも雜然として不便なことが多い。

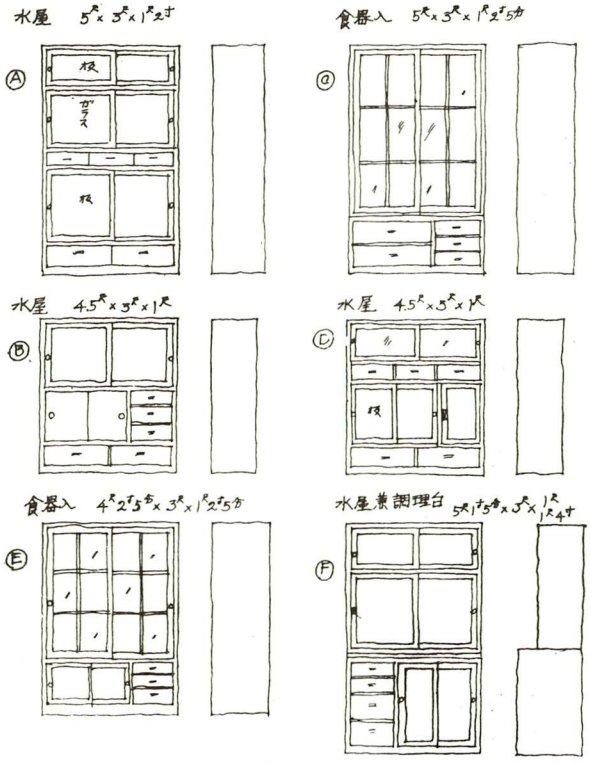
そうかと云つて費用をかけて改造するのも他人の家ではあるし、又何時引越すか分らぬのを考へると、一寸おつくうで手が出せない。仕方なく不便を忍んで使つて居ると云ふ現狀である。

改造すれば便利になることも知り、改造の方法も知り、場合によつてはその設計案位すぐ書くのであるが、借屋生活者は、上述のわけで改造に手を出しかねて居るのである。

即ち新築の場合とか、自分の家を改造する場合とかの、固定した台所は便利なものが考案されて居るが、借屋人の移動性を考へた、移動の出來る便利な台所は考案されて居ない。

◇

もつとも借家及借家人の要求に應じて、移動性のある水屋、蠅入らず、冷藏庫、調理台等の賣り出されて居るが、これ等の形狀寸法は互に相連絡したものでなく、個々別々に考案され、各々他を考へずにその形や寸法をきめたものである。例へば冷藏庫にはその寸法は左表の如きものがあるが、これは容れるものの寸法から出た大さに製造家の手心を加へた寸法であつて、流しや調理台との關係は考へられて居ない。又水屋には第五圖の如き形と寸法があり、蠅入らずには又大小種々あるが、これ等も內容物からは出たらしいが互に關係のない寸法であつて、假りにこれを並べ又は重ねて台所に配置する場合は雜然として不整頓となり、從つて不潔ともなりやすく、所謂借屋の台所となるのである。



第五圖　既製水屋及食器戸棚（市場品）

冷藏庫寸法表

	小	中	大	極大
シルバー冷藏庫				
高	二尺三寸	二尺五寸八	二尺八寸三	三尺三寸
間口	一尺三五	一尺四五	一尺七〇	一尺九〇
奥行	一尺〇五	一尺三〇	一尺四〇	一尺五〇
スノーランド冷藏庫	小	中	大	極大
高	二尺三〇	二尺五〇	二尺七〇	三尺〇〇
間口	一尺四〇	一尺四〇	一尺五〇	一尺七〇
奥行	一尺一〇	一尺三五	一尺三五	一尺四五
岩谷製	小	中	大	
高	二尺五〇	二尺六五	三尺〇〇	
間口	一尺四〇	一尺五五	一尺七〇	
奥行	一尺三五	一尺四〇	一尺五〇	
パーラー	小	中	大	
高	二尺一〇	二尺二〇	三尺二五	
間口	一尺三五	一尺五〇	二尺〇〇	
奥行	一尺三三	一尺三五	一尺五〇	
三越製	小	中	大	
高	二尺〇〇	二尺四〇	二尺九〇	
間口	一尺三〇	一尺四五	二尺〇〇	
奥行	一尺〇〇	一尺三〇	一尺四〇	

蠅入ラズ寸法表

高	一、二尺	一、五尺	一、五尺	一、五尺	一、六尺	一、七尺	一、九尺	一、九尺
間口	二、〇尺	一、二尺	一、三尺	二、三尺	一、三尺	一、五尺	一、五尺	二、九尺
奥行	〇、九五尺	〇、九五尺	〇、九五尺	〇、九五尺	一、一尺	一、〇尺	一、一尺	一、〇五尺

ここに於て、先づ台所器具即ち流し、食器棚、食料品戸棚、調理台、蠅入らず、米入等の全般を見渡して、これを調和的に、過重過輕のそしりなく並べ合せ、又は積ね合せの出來る樣互に連絡ある狀狀寸法に造り、引越しの際には容易に持ち運び得る手頃の大さとし引越先の台所でもまた廣さに應じて自在に組み合せの出來る樣な形とする必要が起つて來る。

◇

從來、こうした組み合せ台所器具に鉛木式台所流し及ガス台と云ふのと、TY式と云ふのと二種類あるが、何れも流し及ガス台を主としたもので、食器戸棚、食品戸棚其他台所全般の設備に眼をつけたものがない。否借屋に於ては流しとガス台は既に設備があるから寧ろ必要なのは食品戸棚、食器戸棚、蠅入らず、調理台の便利に組み合せ得るものである。

即ち借屋向の台所用としては

一、運搬に手頃の大さとすること。

二、如何なる台所にも適應する大さと形狀を有すること。即ち引越した先の台所にも適應する樣に、種々の組み合せが出來ること。

三、組み合せによつて完全な台所が出來るだけの性能を各自が有すること。

が必要である。

◇

(一)の運搬を容易にするには、此等の器具を組み立て式とするか又は組み合せ式とせねばならぬ。組み立て式は横桟、縦桟、側板などを楔やボールトや捻釘などの助を借りて大きな戸棚に組み立てるもので、運搬の際には再び分解しバラ〳〵として運ぶのである。組み合せ式は先づ運搬に適する程度の手頃の大さに戸棚などを造り、これを積み重ね又は隣り合せにつけて台所を構成するもので、運搬の際はタンスを運ぶ樣にするのである。ここでは、組み立て式をとらず、組み合せ式を採用した。その方がすべての點に有利である。運搬の便利な爲には組み合せ式の各個の大さは、せいぜい衣服タンス程度の大さでなくてはならぬ。タンスは日本の整衣道具として、實に理想的なものであるがこのタンスを台所へも適用することにして、從來の不完全な水屋のみにたよつた食器、食品の整理をこれに代へたと考へればよい。

(二)の如何なる台所にも適應する樣な形と大さとするには先づ大さの標準を定めねばならぬ。その關係する所を擧げると

(イ)間口及奥行　關東地方では柱の眞々を六尺に採るから、柱を三五角として柱の内法は、五尺六寸五分となる。五分は餘裕として殘し、五尺六寸が基本となり、その1/2の二尺八寸、1/4の一尺四寸、1/8の七寸が間口及奥行の寸法として考へられる。

關西地方では三尺一寸五分に六尺三寸の疊寸法を基本としてやる故に柱内法は六尺三寸であるが、他の室との關係で少しせばめられる場合が多い。假に六帖又は八帖に對し、三帖と二帖が並んである樣な時は六帖の長手又は八帖の一邊は十二尺九寸五分である。之を三帖と二帖で分けるから台所の柱眞は六尺四寸七分の場合が多い。これから柱一本分を引き去ると六尺一寸二分が内法となる。一寸二分を餘裕と見れば關西では六尺が基本となりその1/2の三尺、1/4の一尺五寸、1/8の七寸五分が間口及奥行の標準となる。ここでは關東の方の寸法を採用することにする。

(ロ)高さ　二室にまたがつて戸棚を積み重ねて置く場合が考へられるから、鴨居にかまはずに配置出來る樣に、大體建具の内法五尺七寸におさまる高さとしておくがよい。又流し、ガス台、調理台等は高さ二尺五寸が標準となつて居るから、高さは下段を二尺五寸とし、五尺七寸から二尺五寸を引いた三尺二寸を上に重ねることとする。更に鴨居より上に戸棚を取りつける場合があるから、これは高さを一尺六寸とする。之は二つ重ねて三尺二寸の代用となるからである、結局タンスの如く三つ重ねると、下が二尺五寸、中が三尺二寸、上が一尺六寸で總高が七尺三

寸となる。

即ち

巾　三尺八寸

奥行　一尺四寸　七寸

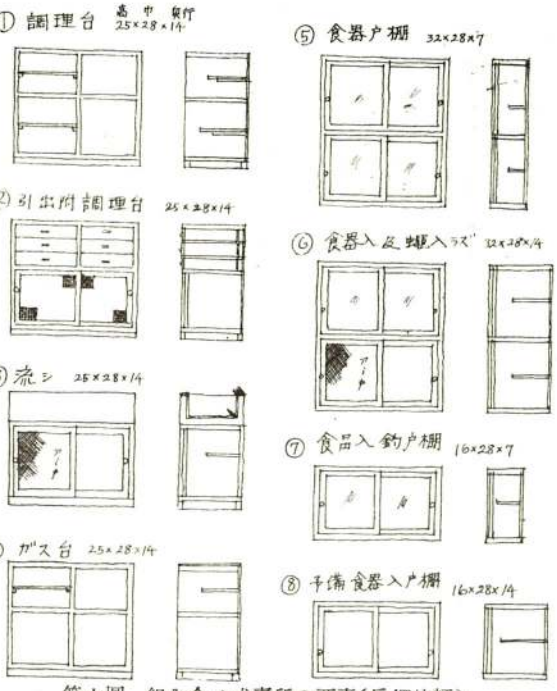
高サ　三尺五寸　三尺三寸　一尺六寸

これ等の寸法のコンビネーションによれば、巾、奥行、高さの違つた種々の形が出來るが、いずれも台所内法寸法と關係があり、且つ五の寸法には倍數の關係があるから組み合せる時は容易に簡單な整然としたものが出來上り、且つ何處の台所にも適應することになる。

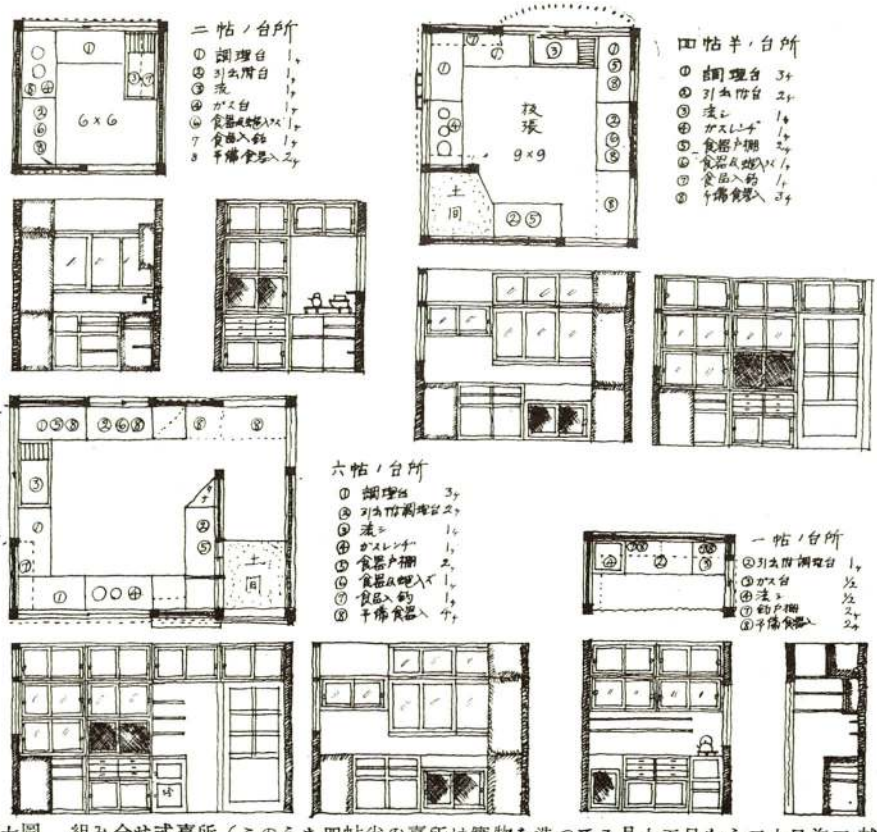
◇（三）の組み合せによつて完全な台所が出來るだけの性能を各自に持たせることは最も重要なことであるが外形としての寸法が上述の如くきまれば、これを使つて戸棚なり調理台なりの各個に工夫することにする。

勿論上述の寸法は主として室の大さから外部的にきめたのであるからこれのみで決定するわけにいかぬ。内へ容れる食器や洗桶や鍋釜等の大さをも研究して上述の寸法を訂正しなくてはならぬ。今假りに次の八種を造つて見た。

	巾	奥行	高さ
1 調理臺	二尺八寸	一尺四寸	二尺五寸
2 引出附調理臺	二尺八寸	一尺四寸	二尺五寸
3 流シ	二尺八寸	一尺四寸	二尺五寸
4 ガス臺	二尺八寸	一尺四寸	二尺五寸
5 食器戸棚	二尺八寸	七寸	三尺三寸
6 食器及蠅入らず	二尺八寸	一尺四寸	三尺三寸
7 食品入釣戸棚	二尺八寸	七寸	一尺六寸



第六圖　組み合せ式臺所の要素（戸棚流類）



第七圖　組み合せ式臺所（このうち四帖半の臺所は實物を造つて越三迄日十二から五日十八月で陳列した）

8　豫備食器入　二尺八寸　一尺四寸　一尺六寸

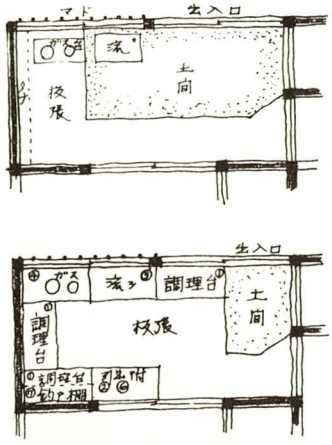
（第六圖參照）

	調理台	引出附調理台	流	ガス台	食器戸棚	食器及鍋入らず	食品入戸棚	豫備食器入
一帖臺所	×	一	一	一	×	×	一	二
二帖臺所	一	一	一	一	×	×	一	二
二帖臺所	×	一	一	一	×	×	一	二
三帖臺所	一	一	一	一	一	一	二	二
四帖臺所	二	一	一	一	一	一	二	二
四帖半臺所	二	一	ガスレンヂ二	一	一	一	二	三
六帖臺所	二	一	ガスレンヂ二	一	一	一	一	四

（第七圖參照）

以上の戸棚、流しを組み合せて一帖から六帖迄の台所を構成すれば次の如くなる。

叚借屋の台所を改造することになれば、上述の器具のうち適當なものを選定して組み合せるのであるが、その前に、土間を板張りにしなければならぬ。（板張の台所が土間式の洗ひ流し台所より優れて居る事は既に常識となつて居る）板張りした上へ器具を配處するのであるが、比較的狭い台所にあつては、今迄の例に示す如く、壁ぎはへ並べて、中央を空地に殘す方がよい。中央に調理台なりガス台を置くことは、台所を狭くするから餘程廣い台所でないと不利である。改造の一例は第八圖の如くである。



第八圖　改造所臺家借式舊の例

第八圖の上圖は改造前の借屋の台所で廣さは四帖あるが大部分が土間で流しとガス台と棚が一枚あるばかりであつた。第八圖の下は改造後のもので、先づ土間は半帖程殘して板張りとし、これに組み合せ式の器具を入れて、台所を構成したものである。改造後のものは便利なこと。整頓せることは勿論である。（をはり）

臺所數種

松本儀八

△台所は便利で、經濟で、能率的でなければならぬと云ふ標語は今日津々浦々から山村僻地に至るまで、しきりに高唱されてきた言葉であるが、誠に喜ばしい感じがする。

が其反面に台所があまりにも一足飛びに新しい設備に變つた爲めに、折角の古いお道具類が役に立たなくなつたり、新しい台所としたが爲めに、無駄が多くなつたりすることも段々とある。つまり改良、改善についても意を用ふべき所である。

△台所は勿論人に見せるための場所ではないが、其設備、整理、整頓の狀態をみて其家の實狀を窺ふことが出來ると云はれて居る。

△台所の實狀を見て其家の節約浪費の關係、衛生か不衛生か、規律、不規律關係までが知り得らる。

△今日まで色んな台所を試作してみたのであるが、實際上に使勝手のよいと云はるゝ二三種のものを選び出して見た。

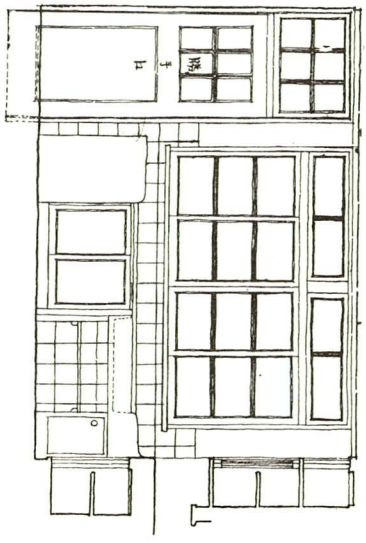
(1)はM氏邸台所のプランと其出來上りを撮影したものである、出窓を利用して、採光、通風を充分に取入れようと云ふことになつて居る、家族五人向板間と土間との面積の比も1:10見當。

(2)I氏邸台所のプランと其出來上り寫眞である、台所の位置を女中室、食堂、浴室と隣接せしめ、設備もプランで見る如き構へとな

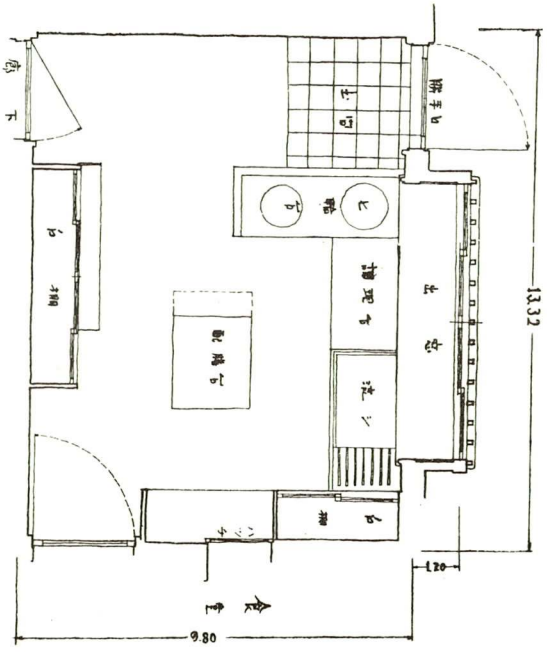


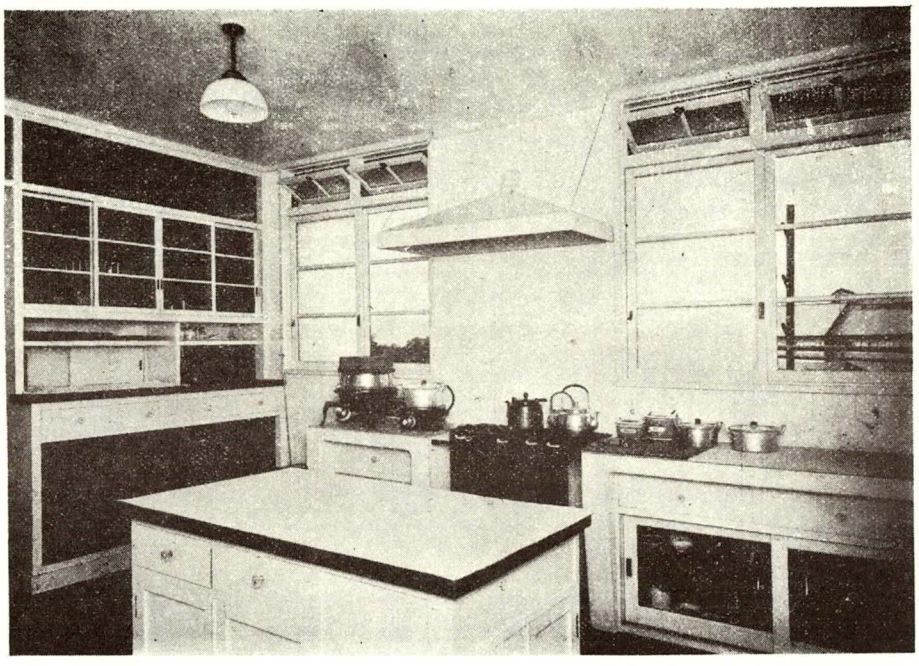
一、M氏邸臺所（六疊の間）　（本文參照）

出窓側の壁面



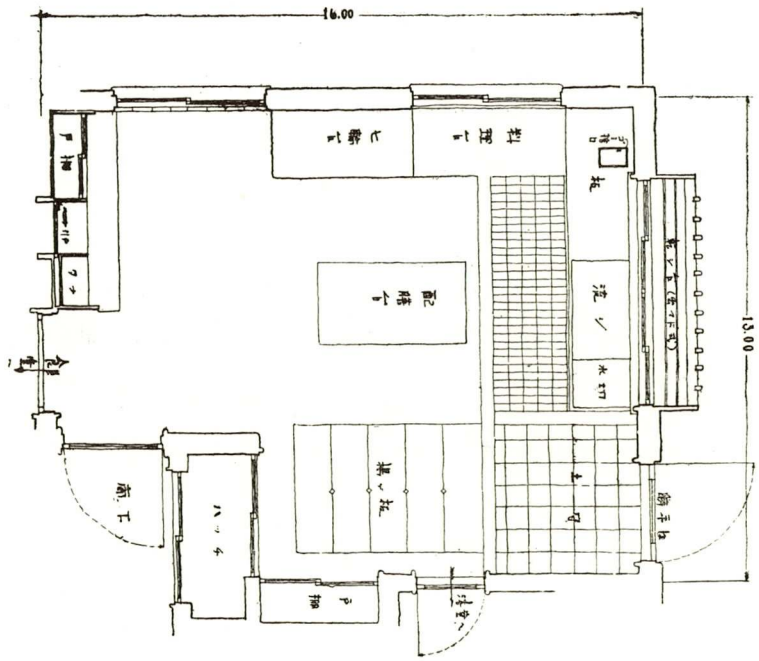
平面圖



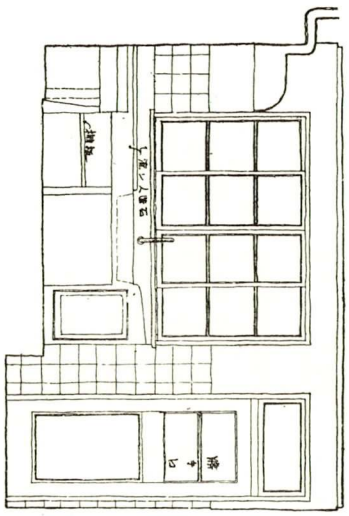


二、I氏邸臺所（本文參照）

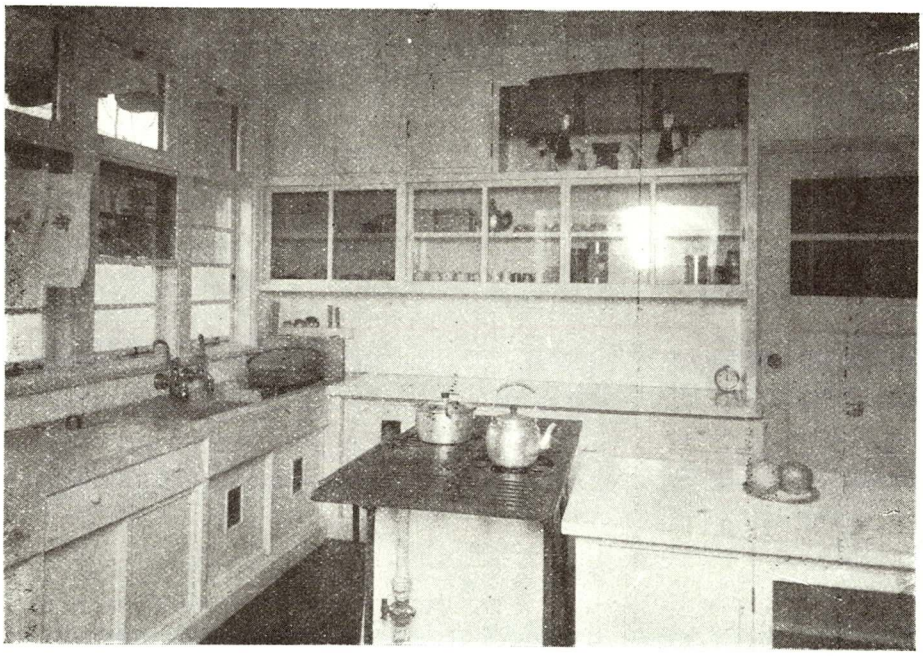
平面圖



東側立面圖

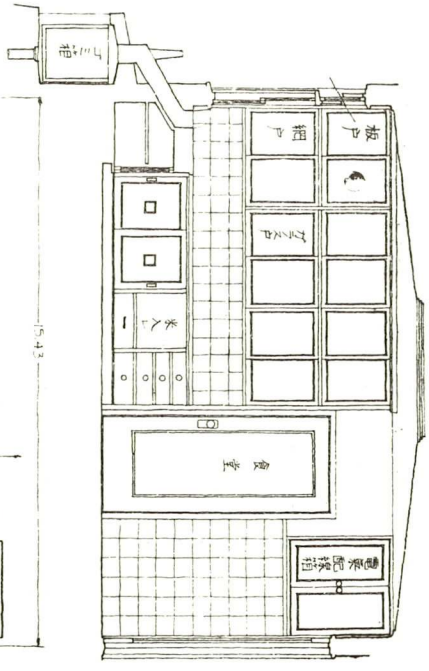


三、K氏邸臺所

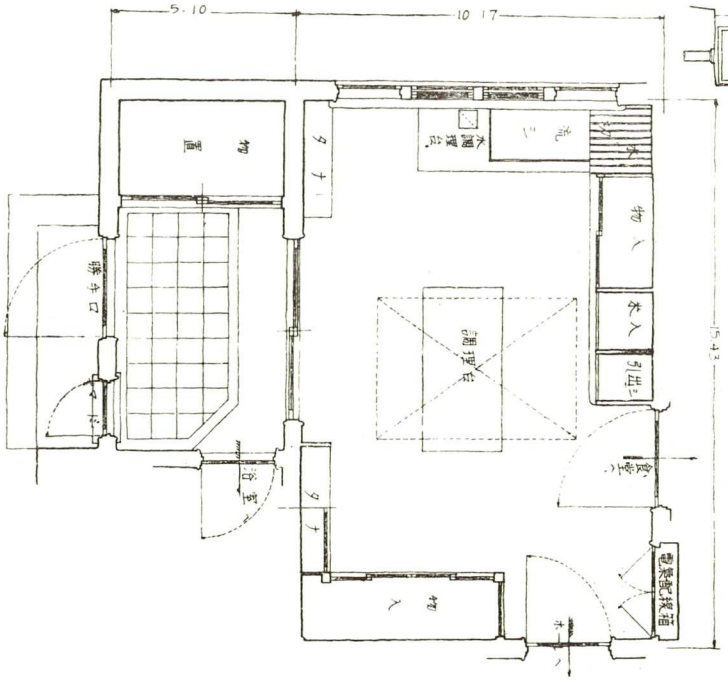


（本文參照）

物入側建具



平面圖



し、來客、其他十四五人位まで樂に調理出來る台所であり度いと云ふことを主なるコンヂションの一つとして出來上つたもの。

食堂へも直かにハツチをまたげないで廊下越しに之を利用しようと云ふ譯である。

(3) K氏邸台所のプランと其出來上り寫眞である。室の位置は食堂浴室、女中室、便所等に最も便利の場所を占めて居る、ふだんは家族五六人の目安であるが、矢張十七八人位までは、さほど無理なく利用さるゝ台所たらしめ度いと云ふ譯けである、室の中央に換氣裝置を施したとも餘ほど有效に働いて居る、夫れから土間を板ノ間からほり出して物置替りの押入をつけ出入御用商人への應接所とした事も一入便利に利用されて居る。

我が農耕的小住宅

堀田猷次郎

住宅は生活の容器であるとは古くより謂はれて居るがそれは即ち家族生活上に於て人間の着衣の役をなすものである。從つてどんな衣服を着用しやうと個人の好みによつて全く自由である如く、住居も其人の趣味嗜好に據つて如何なる住宅を營むも全く自由である。されば千差萬別新しきを求むるもの、古きを尙ぶもの、或は中庸を主張するもの等あれど歸するところは生活を快適にし、人樂を樂ましむるに足るものである事が終局の目的である。

こゝに我が住居を設計するに當り考へた事と、三年數ケ月間の居住によつて得たる經驗とを主題として一般的なる住宅觀とを述べて見たい。

◇

位置は大阪北郊南面傾斜の丘陵地にして、北に山を脊ひ樹木よく繁茂する所なり。建物と敷地との關係は圖の如く建坪は出來る限り縮少し最小限度のものとし必要欠ぐべからざるもののみとせり。各室は總て仲縮自在の融通性ある事を期し、從つて裝飾的または趣味的なるものを取り去り、全然實用本位として利用價値を高むるを主眼とし、都會より逃避して土に親しみ自然に還る農耕的田園生活を營むため、敷地は出來得るだけ廣くし餘裕を殘すに努めたり。されば建坪は敷地面積の一割程度に過ぎず。

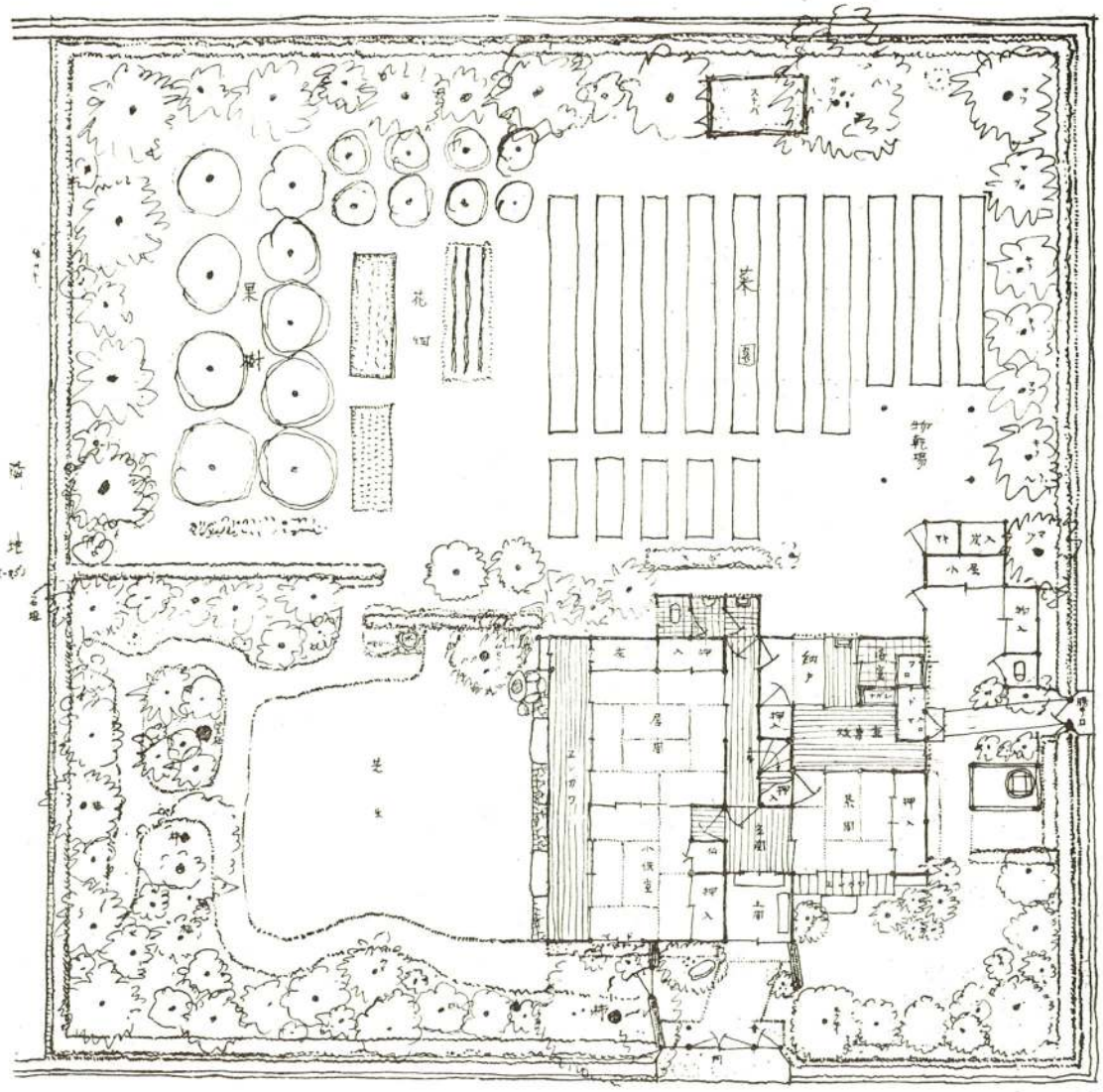
◇

近來の傾向として和洋併用式住宅は加速度的に增加しつゝありて或人の統計に據れば約五割が併用式にして約三割が純洋式、約二割が純日本式といふ事ですが、約二割の純日本式のもののみ獨り漸減の傾向をとり全體としては洋風化しつゝあるが、全般的に考へてモダーン日本の趨勢を語るものと言ふべく、すべてに亘る洋風化は必然的の根強きものなれば其間の融合調和を計るべきであるが相當難しい問題である。

◇

プランニングに於ては各居室を廣くとり玄關を二帖大となしたるも、少しく狹きに失し來客の時は多少不便あれど平常は十分である椽側の巾を四尺となしたるが三尺巾のものに比しては面積の增加少くして使用上便宜多く且つ又快適である。餘り廣くする時は座敷を陰鬱にする傾向がある。階下南面の椽側こそは全く必要欠ぐべからざるものにして冬は暖く、夏また凉しく、庭と座敷とのよき連絡點ともなり最も快いものである。また南面の八帖六帖の二室は冬暖く茶の間は東向にして夏凉しく豫期の效果を擧げて居る。納戸は女中室兼脫衣室となりこれも多少の不便がないでもない。今一室位欲しい樣に思ふ。間仕切は襖障子等なれば必要に應じ極めて簡單に取去る事を得て二室を一室にして使用し得る外、通風上にも效果あり。

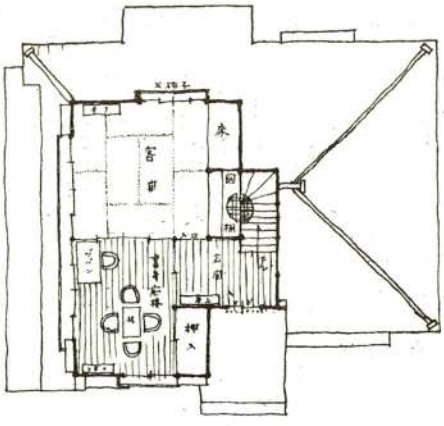
疊敷は非衞生的であるとの說も稱へられて居るが掃除が容易である故衞生的に保つ事も比較的容易



敷地及階下平面



半間二巾 踏道



階上平面 (一〇五坪)

なれど、ベツド、カーペツト等は掃除にも機械等を用ふるを要し且つまた多くのスペースを占むるものに比しては融通性に富み足の感觸も好ましく多くの美點を有すれども、椅子式もまた欠ぐべからざるものにして應接又は書齋などは椅子式となす方斷然よいと考へらるゝため書齋兼應接は椅子式となしたれど、隣室が日本式なるため全然洋式とはなさず單に板敷とし敷物を敷き裂張の籐椅子を用ふる事にして居るが、日本座敷と一つの室として使用しても不調和なくまた場合によつては疊敷ともなす事を得る樣考案せり。玄關、廣間、炊事室等座居の要なき室は板張となしたるが種々の點より考へてよいと思ふ。椅子式と座式の兩樣の室あれども其は二重生活とは考へられず、何れも異りたる特長を有し別種のものにして、何れも必要と言ふべきである。古い級友などに對しては疊敷の室で橫臥對談するなど誠に親しみを深くするものである。

◇

外觀上より言ふ時は四周の空氣と調和よく保つこと必要なれど、內部を日本式となし外裝を洋式となすも差支なきが、外觀上に和洋併用式を用ふるものには往々にして不調和を極むるものありて、內部を椅子式とせるため外觀を何等の考慮もなく孤立的に洋風となせるもの等に至りては全く頭の働きなきを示すが如く、此家に洋室ありとばかり人に誇らんがための如く不快を感ずるものすら見ゆ。賣らんが爲めに貸さんがための營業的住宅なりと雖も、今少し氣品あるものとし、內容充實せしめ、品格を保つ事が望ましく、在來の日本式には多くの美點特長を有するものなればその美點特長を生かして行く樣にすれば宜しく、單なる外國模倣より氣候風土に適合せざる樣式を採る事は餘りに無思慮といふべく、實用的には日本式の方が良く、また親しみを持つ事が出來る。鐵筋混凝土造は郊外の小住宅としては極めて不適當なりといふべく、保健上にも不便の點多く、木骨ラス張モルタル塗構造も防濕法不完全なるは腐蝕し易く且つ又白蟻等の被害を最も受け易く適當なる構造法と言ひ難し。在來の日本式構造法も屋根瓦は重量過重にして徒らに柱の負擔を重からしむる（新しく考案されたるものも多くは外觀貧弱なり）等の欠點は改良すべきものなれど補强鐵物筋違等の使用によりて相當耐震的たらしむるを得べく、我國土に最も適合せるものといふべく、夏季高溫度に對しても開放的となすを得て誠に凉しく、且つまた眞壁構造は混凝土及大壁に比し最も早く濕氣を放散す。また換氣法は科學的に計算し難きも自然的に天井板の重ね目、障子紙等によりて徐々に換氣され特殊の裝置を要せず、またランマの開放によりて自然療養法等にも適合する夜間外氣との交通自在となす事を得て、經濟的に保健上の目的を達す。また窓に庇なき洋風のものは降雨量多き地方には防濕上不便多し。

雨戸、硝子戸、紙障子、日除格子、網戸等を夫々其必要により適當に組合せ使用する事により充分所期の目的を達するを得。

建築費の點より考ふる時は日本式とせば程度低きものにありても相當の品格を保ち得れど洋風のものにて程度低きものは前者に比し遙に品格なきもの多し。即ち單價安きものにては日本式となしたる場合が最も有利なりと言ふべく、在來の日本式を基調とし之に新時代の必要を加味したる樣式が實際的に見て多くの美點を持ち、殊に一般的なる小住宅に於て其感殊に深く所謂文化住宅と稱するものには往々にして遊戲的氣分を包藏し新奇を好み、構成材料に適當せざる表現法をなし、餘りにもロマンチツクにして實用上不便多く、長き住居に耐へ難きものさへあり。

世相の變遷激しく急速度にすべてが進む時代なれば餘りに永き耐久力を要せず、普通の木造にても二十ケ年は十分使用に耐へ得べく人間一代として丁度適當の年限なりと言ふべし。鐵筋コンクリート造等となすときは必要以上に耐久的なりし爲め、却つて子孫をして不便なる住宅に永く居住せしむる事となる。

◇

最後に敷地と建物庭と座敷などの關係について言へば、現代人の都會集團生活は餘りにも物質的機械的に偏し、人間自然の本性に反する事甚だしく、日々不健康となり行き、危險思想を抱くもの增加

し、世相險惡に傾き、悠久なる天地自然の間に人生を樂しむ餘裕なきに至り全く憂慮すべきなり。

住宅は慰安休息のため、閑靜にして落着きたるものとし、强烈なる刺戟、騷音、繁雜より全く開放さるる事が望ましく、敷地は成るべく廣く裕あるを欲す。

庭園と建物との關係は在來別箇のものとして其間連絡に欠ぐるもの多く、全く無關心の結果にして兩々相俟ち、建物は庭によりて生き、融和して一つのものとなり觀るものの目を悅ばし、心を樂ましむる樣なす外實用的にして且つ衛生的に設計すべきである。多くの古き茶室建築等を見れば其間の關係は全く巧妙に計畫せられ能く其目的に添へるものあり。築山、泉池、巨大なる飛石或は必要もなき燈籠等を所狹く列べ、只徒らに樹木を植込みたるもの等は明快を欠ぎ、小供の遊ぶ事など思ひもよらず。

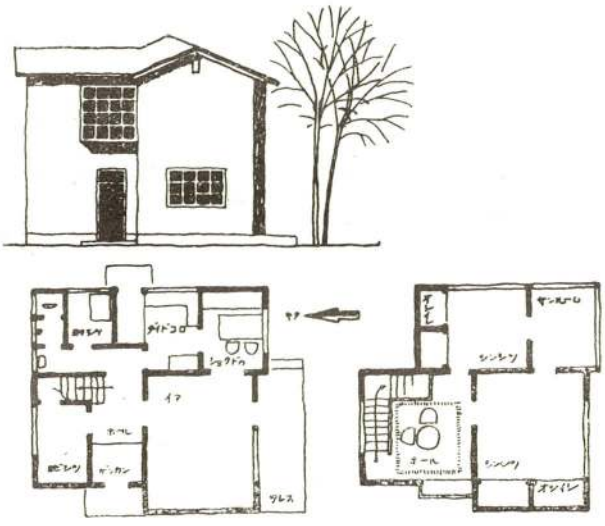
されば庭は成るべく廣さを生かし明快平坦を旨とせり。椽側前は一面の芝生とし小供等の遊び場となしたるため外氣の內に延び〳〵と朗かに全く危險なし、また芝生の周圍に落葉樹を主として常綠樹を交へ植へたれば夏は適當の日蔭を有し凉風渡り、冬も終日陽光を浴びて寒さを知らず座敷の延長とはなる。

また田園住宅にして菜園、花壇等を有せざるは不具に近く、新鮮なる野菜は營養價高く、また一方耕作のため適當なる勞働をなすを以て、心身を健かにして全く一擧兩得である。自然に親しめば凡ての憂鬱も忘れ、精神明朗その心境は全く何物にも比肩すべきものがない。

（終）

小住宅（案）五種

佃　十　俊



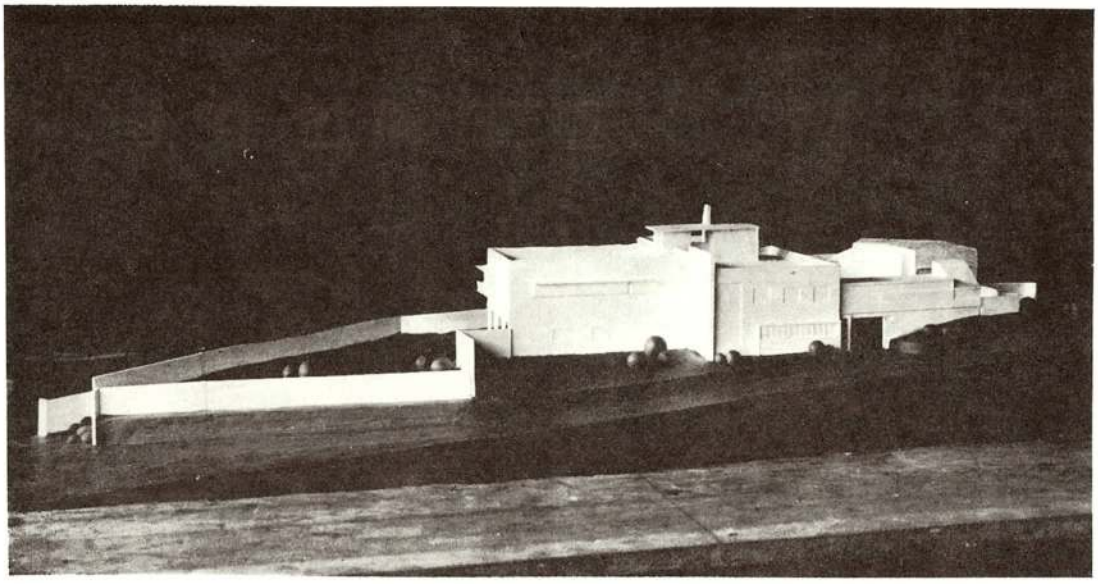
ツクダ・カズトシ
8ガツ3ニチ　1931

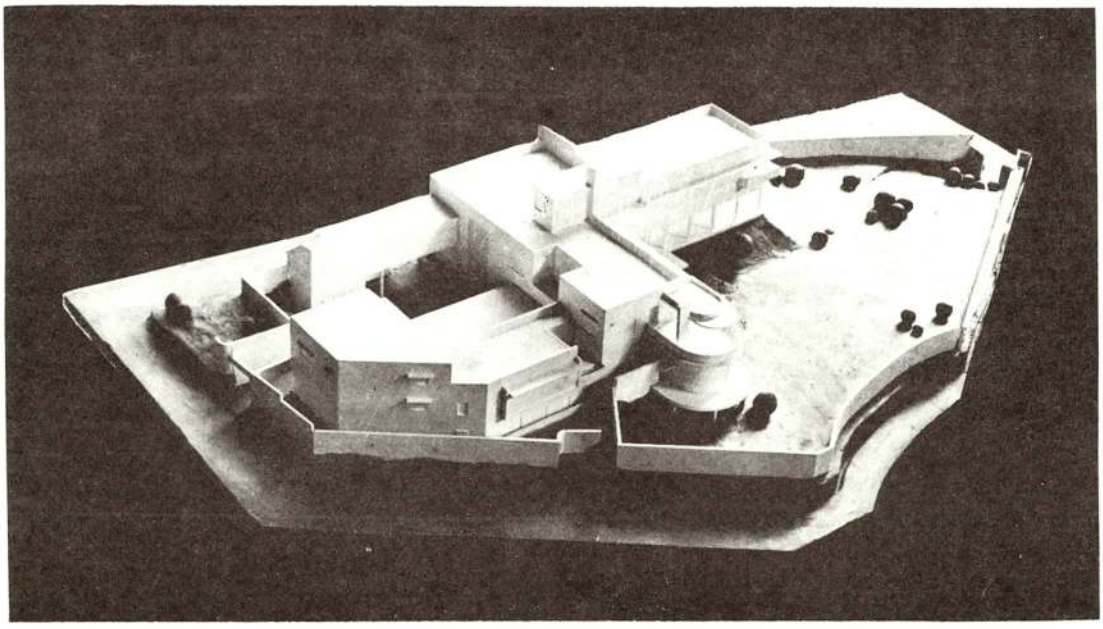
豫告

「小賣店・百貨店」

小賣店百貨店本誌十月號の特輯題目は小賣店及百貨店建築を輯むる豫定であります。

建築と社會編輯部





阪急沿線芦屋・中山悦治氏邸（模型）　　**設計　村野建築事務所**



外　觀

西南隅の庭園から見た所、和風居間の椽側と洋風食堂前藤棚書齋の西窓南窓が腰板倉羽目の上に開かれてある二階和風客間椽側と小供室にあてる洋風の勉强室が「ハーフチンバー」の壁に窓が開いて共に西風が涼しく入る様にしてある

洋風部分は鐵骨鐵筋混凝土構造

和風部分は木造純日本式構造である

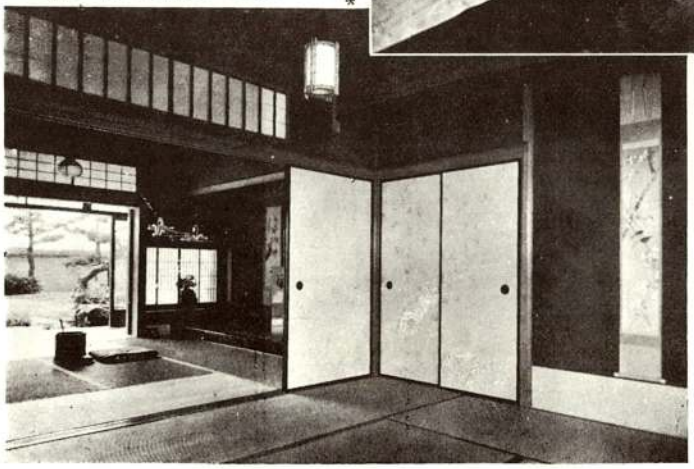
和洋兩部の調和に重きを置き京都郊外の住宅や大和地方の農民家の味を調和したから少しも從來の折衷式と言ふものの様に木に竹をついだ様な感じがない様に出來てるつもり

屋根瓦はS型黑色のものと大棟の瓦は黛色に「スクラツチ」した平瓦で草葺に見せた



書齋兼客間

十五疊程の廣さ、構造は鐵筋「コンクリート」天井は化粧名栗梁に付け床は板張絨毯敷、西側窓下に「ソファー」机の方に小さい書棚、南側窓ぎわに主人の机と安樂廻轉椅子其の机の右側に書架がもうけられてある。窓は「ロールスクリーン」虫除網付北側は食堂と連絡してある、「ホツトエヤー」煖房



居　間

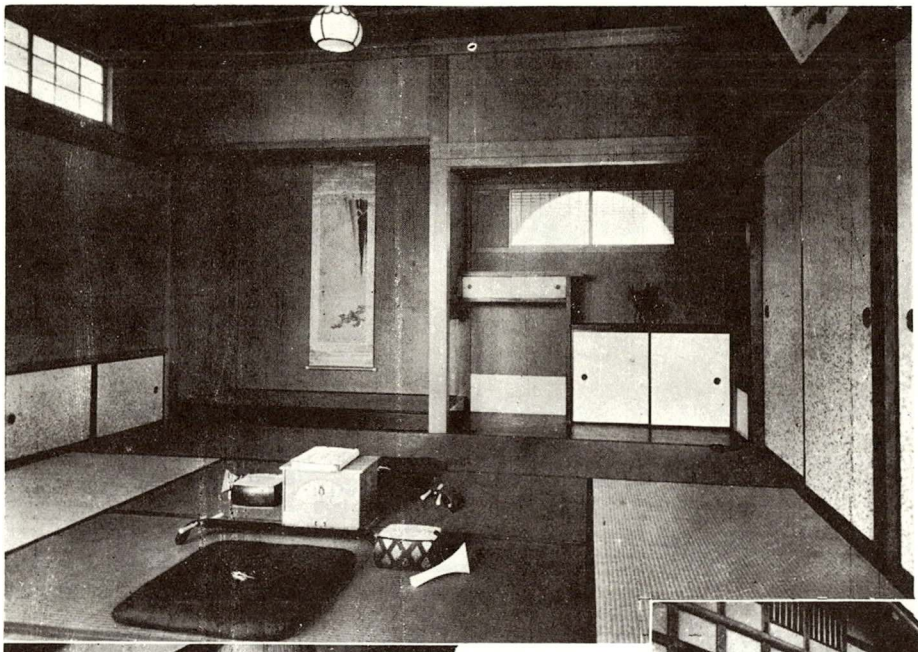
手前の六疊は夫人室、床は茶室風にして繼部茶盧を切り臺所の方から水勝手を廊下で通へる様にして平素は夫人が臺所の差圖をするに便なる様にし、兼ねて向ふに見へる主人居間本床付の八疊に連絡して襖をひらけば二室を一つにして佛事などの時に便利にしてある

主人居間床の脇に佛檀、廣椽側から床裏にもうけた家族便所に通へる様にした

＊

南海上町線北畠・山本隆三郎氏邸

設計　澁谷五郎氏　　施工　前田工務店



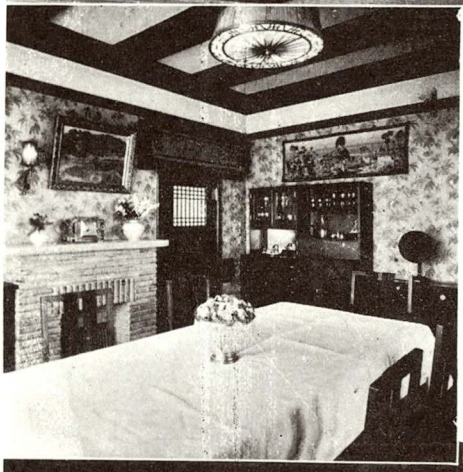
和風客間

廣さは八疊、客間と言ふても泊り込む様な客の寢室で北側に屋根の都合で棚の上に月形の窓を小さく取るより外に仕方がないが南側に椽側を設けて充分光線の入る様にしておいた

入口玄關

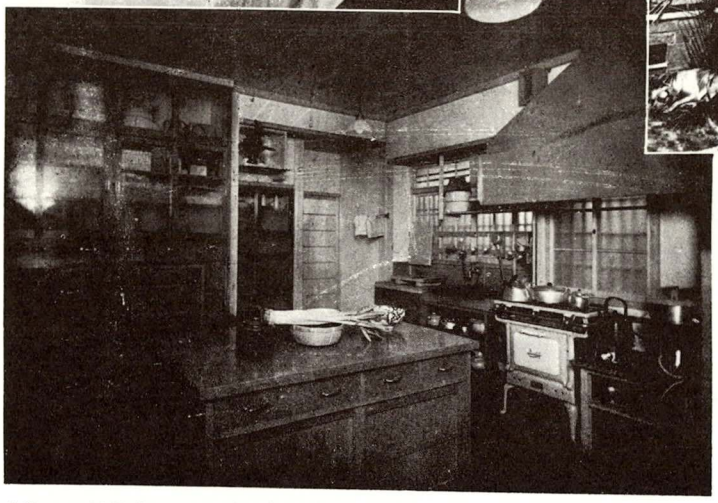
ギヨーギヨー敷玄關めいた様にせず片庇を深く出し自動車が其の下に入つて雨雪にぬれぬ様にし和式の味を充分にした





食堂

廣さ約十疊壁も天井も床も皆「鐵筋コンクリート」其を寫眞の様に化粧をした。「ドア」も日本趣味に格子に紙張にした。煖爐は裝飾で燃き口の所から「ホツトエヤー」を出す様にした



臺所

北側に窓を開いて流し、瓦斯臺等を置き中央に配膳臺、西側に器具戸棚、東側は内玄關、浴室等に通ひ口をひらき、勝手出入口は北東の隅に風呂の燃き口を其の土間から取扱ひ兼ねて出入商人や下婢の出入口にした

設計監督　澁谷五郎
工事請負　前田德松
現場主任　水尻靜雄

南海上可線北畠・山本隆三郎氏邸

設計　澁谷五郎氏　　施工　前田工務店

外觀



武居氏新邸

總てを地味にしたいと言ふ主人公の意見は池村氏に依り巧に表現されて居る。無裝飾の平艦に陷る缺點は出入の多いプランから來る壁面と屋根の變化に依つて充分に補はれて更に一層強い變化を現はし、それはやがて又採光通風に充分なるエツフフエンシーを與えて居る。安い材料を活して使ふ其れが＊此工事のモツトーであつた。腰積の煉瓦は燒過や、烏や、くつ付の普通品それの配列と色の調和とは設計者の意を體して施工者自ら其の衝に當ると言ふ程度である。

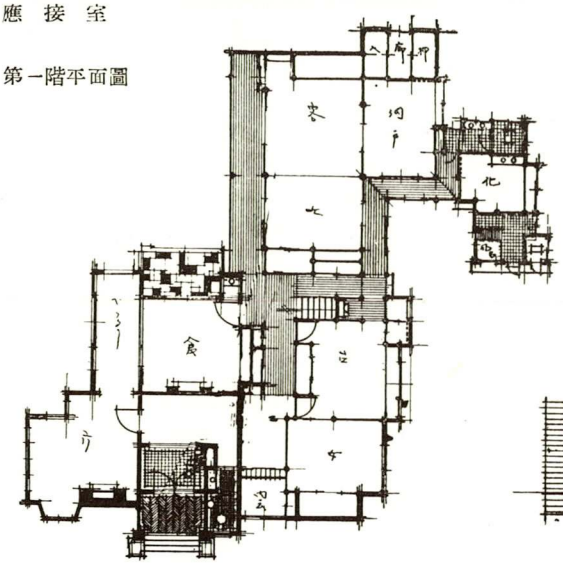
內部の造作は總て米松で、波の荒い板目の杢は鼈甲の様にアンチツク塗で見遣へる様に應接や食堂を形造つて居る。濃いタイルのフアープレースは薄茶色のクラフトン仕上の壁からシックに浮出して居る。氣のきいた電燈と落付いた家具は一層此部屋の感じをして人を引付けて居る。

門前の感じ、それは大手を擴げてウエルカムを表示する様でよくあるブルジョア階級の固△

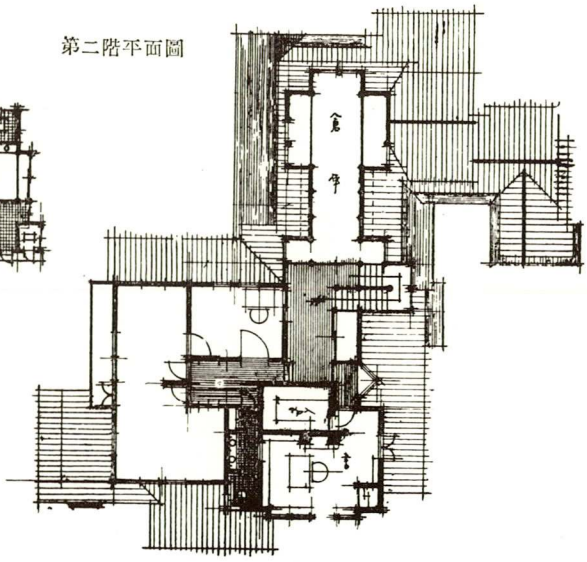


應接室

第一階平面圖

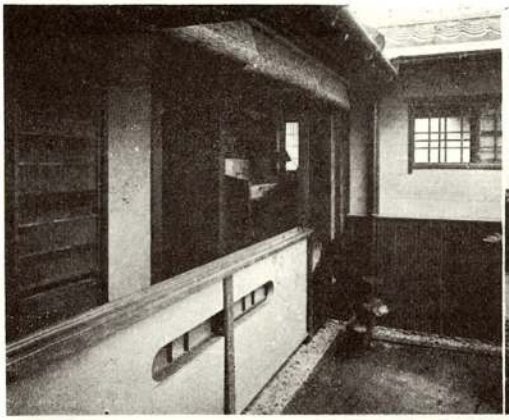


第二階平面圖



阪急沿線夙川・武居氏邸

設計　池村元之助氏　　施工　德政工務店





外觀

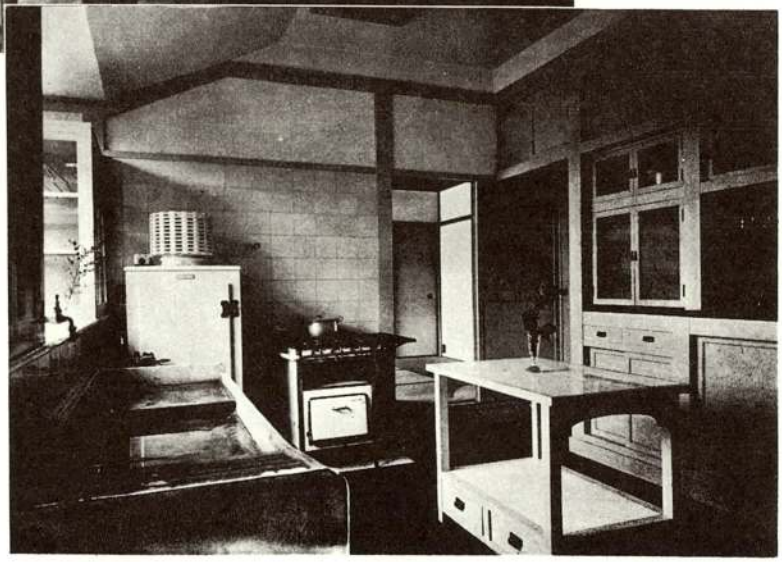
△く鎖した重苦しい感じは少しもない。外觀は彼の夙川の大松原を西にして谷地を隔てゝ南鄕山の翠色に對し、南は戎神社の森から遠く紀山が紫に霞む。此窓からは甲山の正面が綠濃く北嶺の連山に續



食堂

*いて居る土手の下を流るゝ小川のさゝやきは松風の音に唱和する。前の青田は黄金の波を此秋には見せて呉れるであらう。黒い色の瓦土色の壁、緩い勾配の屋根、總ては平原に建つ明るい家の感じである。

一階坪	六四、一六五
二階坪	三五、七四三
テラス	三、三二五
計	一〇三、二三三



所臺

阪急沿線夙川・武居氏邸　　設計　池村元之助氏　　施工　德改工務店

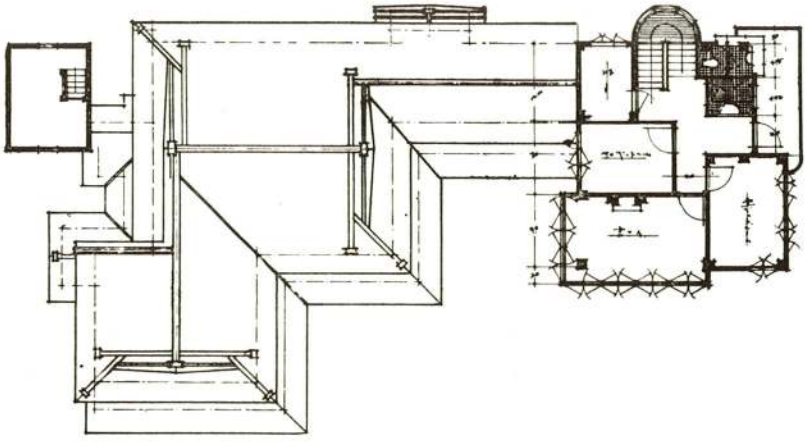
渡邊氏住宅

阪急夙川の驛を西北に越へた小高き丘の上南側はアメリカンセットルメント風の純洋風、北はスパニッシュの重い洋風の家、前は道路を距てゝ或懸賞住宅に當選せるとか言ふ切妻を深くした和洋折衷の家に圍まれた、此新築の家の客間の窓からは赤松の林を透して苦樂園の赤い屋根、白い壁の家々が綠の山頂との間に點々して見える。屋上のフラットからは周圍の松の梢を越へて、旭日に輝く大阪灣。紫より黑に變り行く六甲、摩耶の山線は金光を放つ入日の美觀其れはビールの滿を引くに充分である。淡紅色のソリジットの壁は其單純化されたる直線の諧調を、綠の背景からクツキリと表現して居る。玄關から廣間小じんまりした應接、書齋、手洗、階上への便

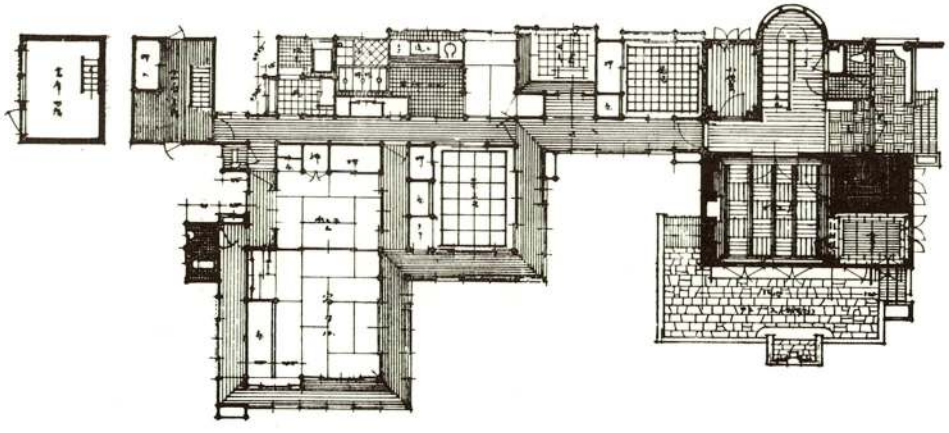


外觀（和風の方）

第二階平面圖



第一階平面圖



阪急沿線夙川・渡邊氏邸

設計　松保忠次郎氏　　施工　德政工務店

*

利な交通はコルクの壁やアンチック塗の入口と共に落着いた内にフレッシュの感じを與へる。

東南を受けた主人、夫人の階上の部屋其に續くサンルーム等は光線と眺望とを充分に滿して居る。小供室は落着いて勉强の出來る位置、次の豫備室は階段を上つて直ぐに便利の位置にあつて控室に當てる。

尙ほ本建物は其構造が鐵筋コンクリートなる爲め之れが反撥の點に留意し内壁の仕上は階上下共主として「コルクペイント」の粗面と、瑞西製サルブラ紙、又天井の一部はコルク板張りを使用し、色は總て鈍色を使用して落付を見せて居る。又家具や電燈も建物との調和を考慮し簡明な意匠となつて居る此設計は杉村倉庫の技師松保忠次郎氏で施工は德政工務店である。

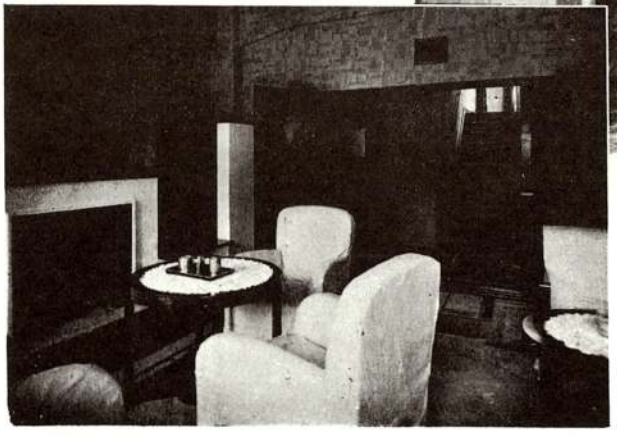


外　觀（洋風の方）



外　觀（洋風の方）

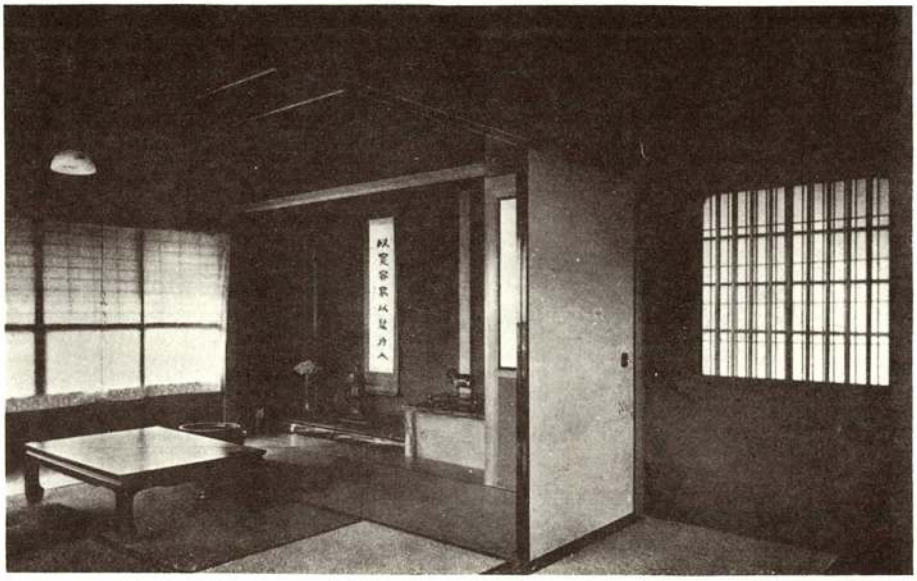
應接室



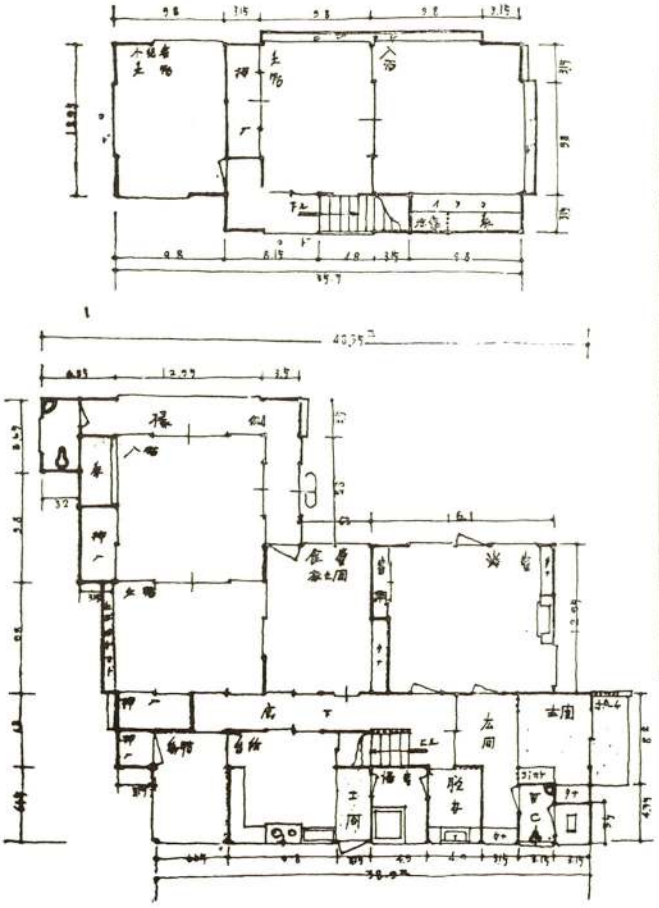
阪急沿線夙川・渡邊氏邸

設計　松保忠次郎氏　　施工　德政工務店

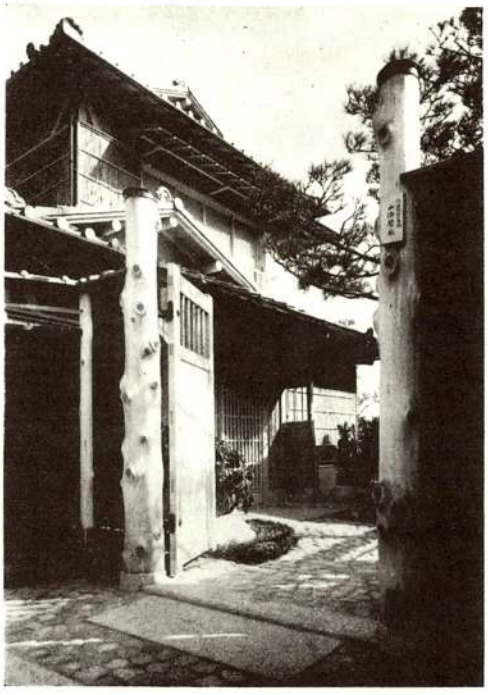
客間



平面圖



外觀



1 階坪數　37坪60
2 階坪數　15,27
延　坪　52,87

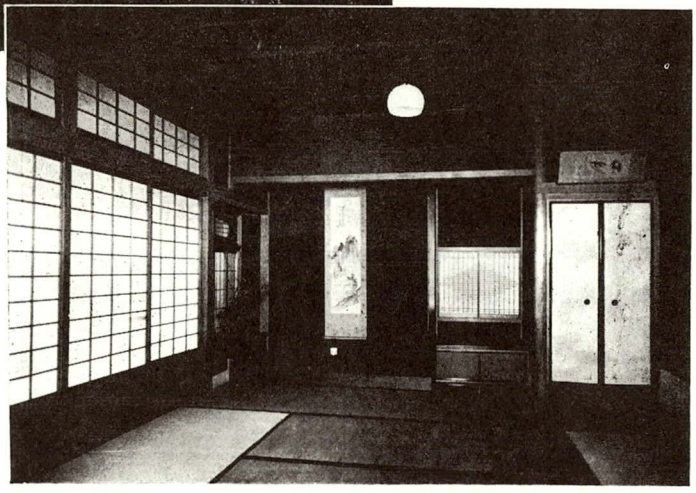
阪神沿線・香櫨園・Y 氏邸

設計　小笠原建築事務所

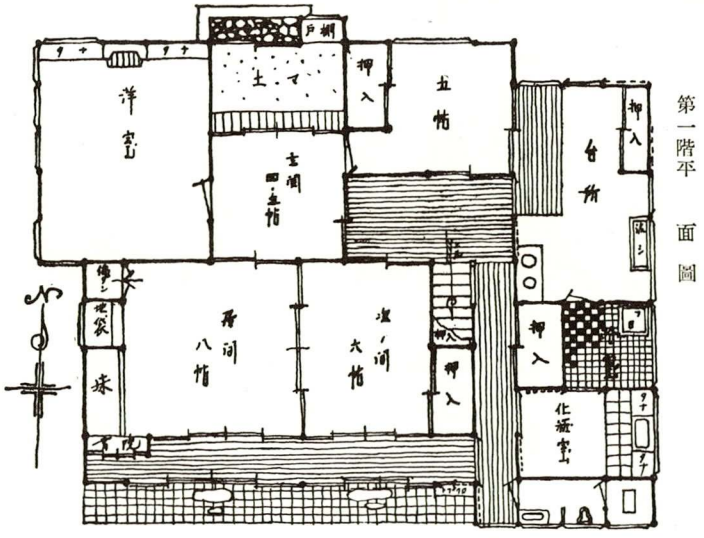


外觀

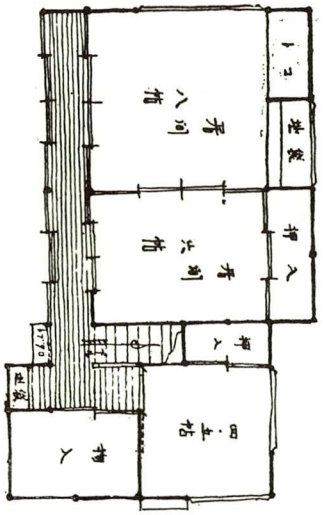
客間



1 階坪數　41 坪 418
2 階坪數　19. 130
延　坪　60. 548



第一階平面圖



第二階平面圖

南海沿線・東天下茶屋・K 氏邸

設計　小笠原建築事務所

外觀

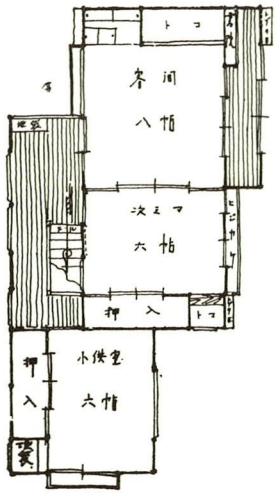


客間

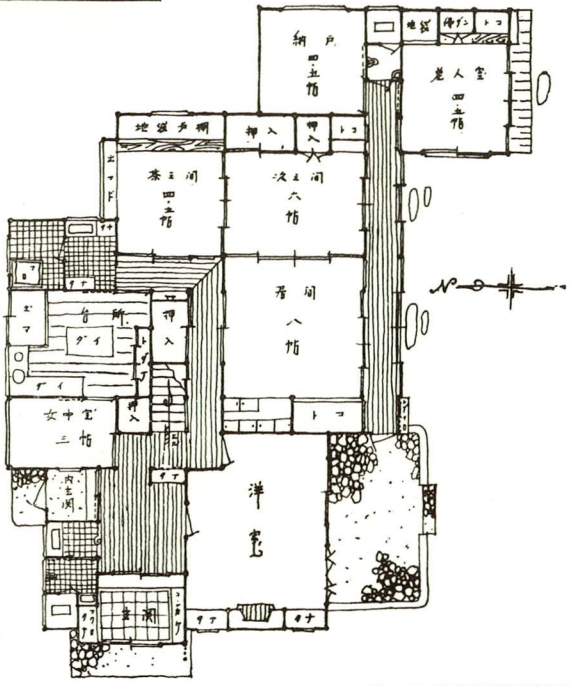


1 階坪數　41 坪 25
2 階坪數　17. 25
延　　坪　58. 50

第二階平面圖

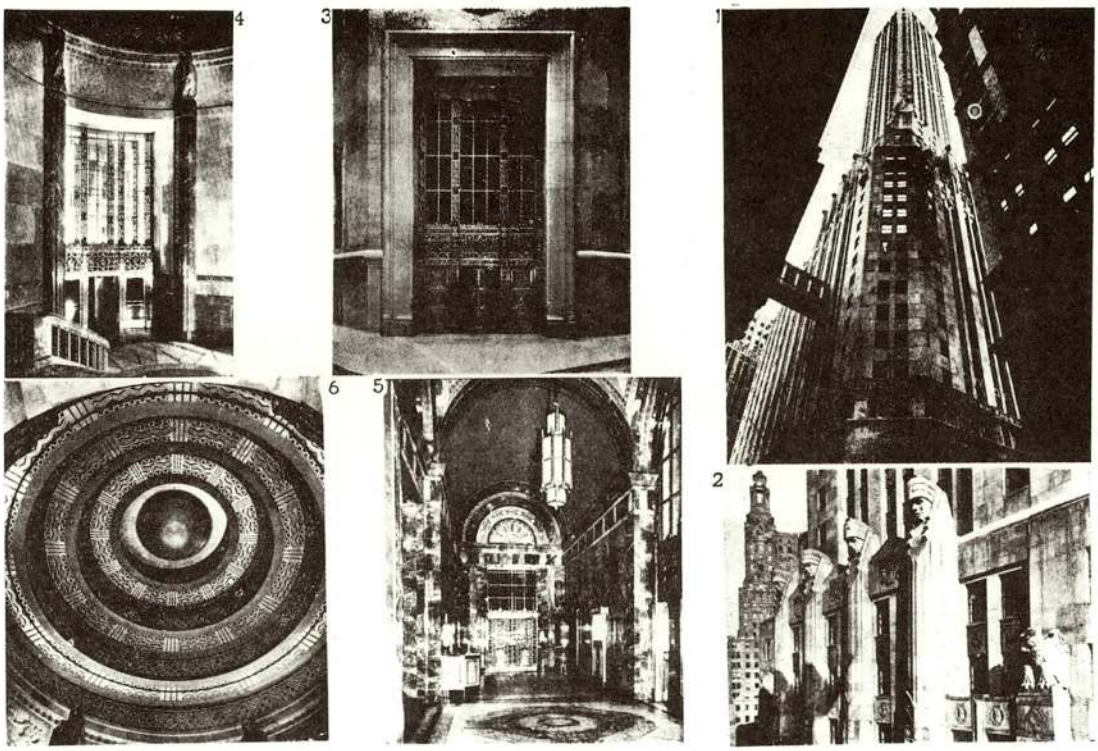


第一階平面圖



阪神沿線・打出・N 氏邸

設計　小笠原建築事務所



1 外觀　2 裝飾詳細　3 角入口　4 入口廣間　5 ロッビー　6 廣間天井

米國・紐育　シチー・バンク・フアーマアス・トラス・カンパニー　　**設計　クロツツ・アンド・クロツス氏**

切　取　線



コーギコーセメント

品質均一優良　輸送至便

コーギコー高級セメント

早期高強度　脱枠迅速

登録商標



LION BRAND

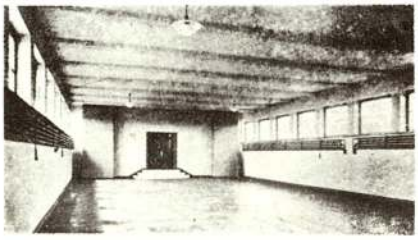
資本金　五百万円　年産　貳百廿万樽

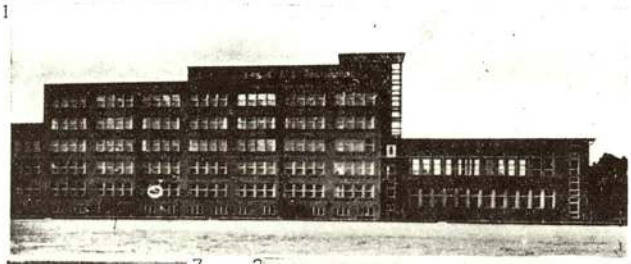
大阪窯業セメント株式會社

大阪市北区堂島濱通二丁目
電話北四一一〇至一一三番

工場　大阪市港区南恩加島町
電話　桜川一一七七・二六〇九・二八四三

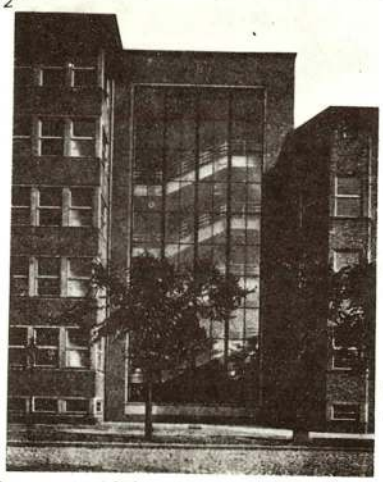
東京出張所　東京市神田区表猿楽町
京都出張所　京都市二条駅前

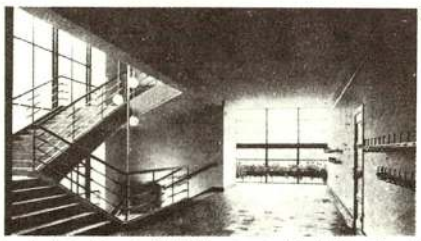

3


1


4


7


2


5


6

1 東南外觀　2 階段塔　3—4 體育場　5—6 階段　7 鑄鐵製水(ハンス・ガイスマン氏作)

獨逸・漢堡・ベンデン街小學校　　設計　フリツツ・シユーマツヘル教授

切　取　線

新刊　日本趣味を基調とせる　最近建築懸賞圖集　定價 70錢 稅 10錢

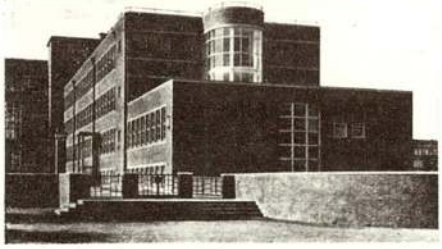
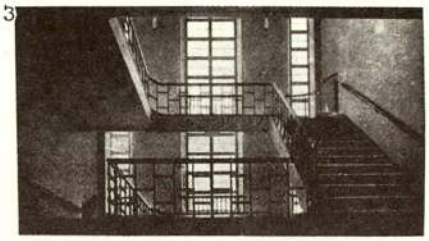
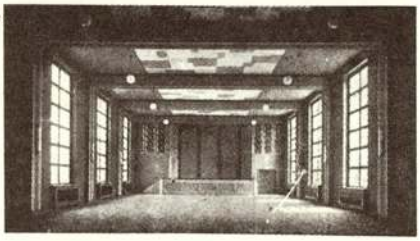
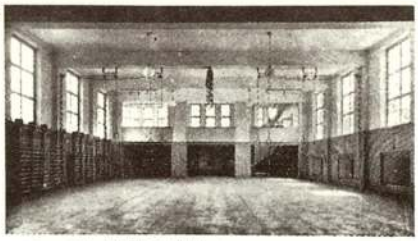
新刊　世界最新建築圖集　定價 50錢 稅 8錢

增補三版　學校建築圖集　定價 100錢 稅 18錢

婦人と住宅　定價 100錢 稅 12錢

社團法人 日本建築協會發行　大阪西區大同ビル720　振替口座大阪39975

賣捌　丸善本支店　柳々堂書店

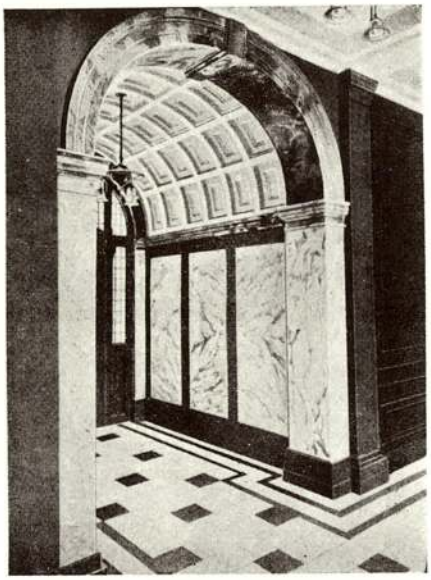



1—2 外觀　3 主要階段室　4 講堂　5 體育場　6—8同氏作漢堡學校噴水

獨逸・漢堡・アルスタータール・高等實業學校　　**設計　フリツツ・シユーマツヘル教授**

切　取　線

DUNLOP RUBBER FLOORING





弊社製ゴム床敷は既に數多の官衙、會社、汽船並に諸家庭に敷込まれ、快適なる其の感じは御使用家各位の御滿足御賞讃を得つゝあります。御必要に應じ何時にても社員を派し詳細に亘り御要求事項を御說明申上げます。

神戸市脇之濱
ダンロツプ護謨(極東)株式會社
各地出張所

ダンロツプ護謨床敷













1 ニユー・カレドニア・パリ島・ニユー・ヘブリド館　2 ニユーヘブリド館　3 ニユー・カレドニア館前・タブー　チバリー島館正面入口扇　5 パリー島館　6 トーテム麥酒店

佛國・巴里・殖民地博覽會建物　　設計　サーツケ＋バイリー＋モントノー氏

切　取　線

純國産日金印シリンダー錠

シリンダー錠の種類及寸法

種類	寸法	五〇一號	五〇二號	五〇三號	特殊安全裝置付五〇四號	一〇〇二號
ケース		長一四五粍 巾九二粍 深二八粍	長一四五粍 巾九四粍 深一九粍	長一〇六粍 巾七〇粍 深一六粍	長一四五粍 巾九四粍 深一九粍	長一〇八粍 巾八六粍 深一九粍
バックセット		六三粍（二吋半）	六七粍（二吋八分ノ五）	五〇、五粍（二吋）	六七粍（二吋八分ノ五）	六三粍（二吋半）
フロント		長二〇三粍 巾三二粍（一吋四分ノ一）	長二〇三粍 巾二五粍（一吋）	長一四八粍 巾二二粍（八分ノ七吋）	長二〇三粍 巾二五粍（一吋）	長一五二粍 巾二五粍（一吋）



◆商工省奬勵金受領
◆優良國産品擇奬
◆價格低廉機能優良
◆至便至利安全無比

特徴及用途

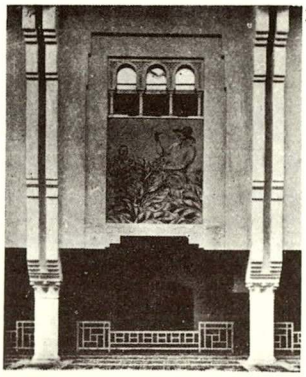
◆合鍵絶無、盗難除完全　生命財産の安全無類
◆ボタン一つの作用にて外部よりは鍵無くしては開扉不能なるも内部よりは鍵を用ひずして開扉自由なる故地震火事等の非常時に安全且便利至極
◆貸事務室、アパートメント、ホテル、住宅玄關、應接室用として絶好必須
◆不體裁なる棒鍵に代ふるに優美高雅なるニツケル製鍵となる
◆五〇四號は特殊裝置を施し安全の上にも更に安全の構造となつて居りますから重要室、玄關用として天鵞の福音
◆マスター鍵は御希望に應じます

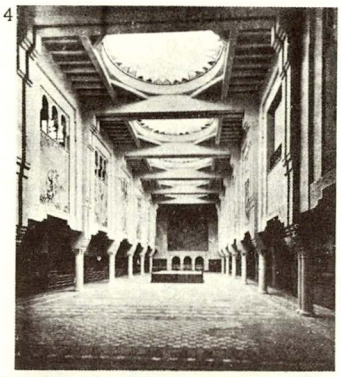


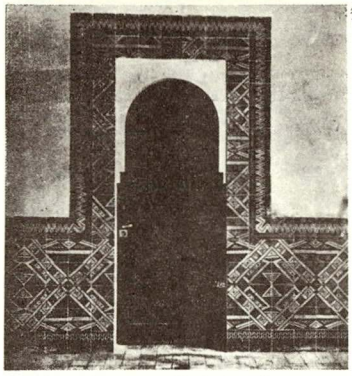
本社　大阪市西淀川區大仁東二丁目
電話土佐堀(44)五八五番二八五〇番
出張所　東京市丸ノ内有樂町報知ビル
電話丸ノ内(23)四九七二番
三六〇四番

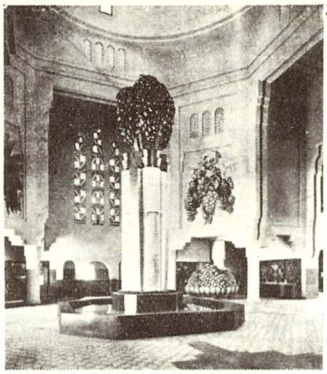
日本金具株式會社

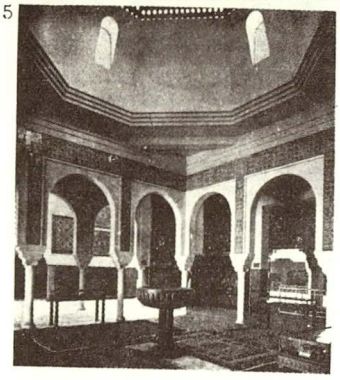

1


2


4


6


3


5

1 正面外觀及塔　2 大廊　3 中央廣間　4 大廊　5 寶石及敷物陳列のパチオ　6 正面入口扇

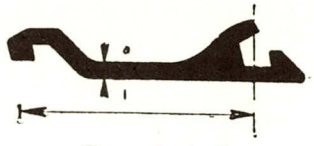
佛國・巴里・殖民地博覽會建物アルゼリー館

切　取　線

獨逸"ヘッシユ"鋼矢鈑

"HOESCH"



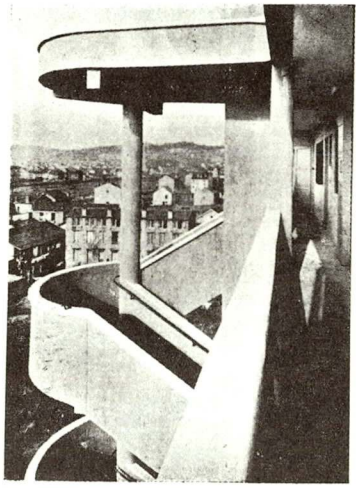


Profil X

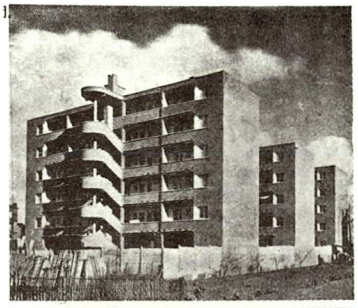
番號	寸法(粍) l	h	a	b	Ca. 重量 Kg./m²	斷面剛率 cm³	能力比 W:G
I	400	150	7	6	89	600	6.74
Ia	400	150	7.5	6	97.5	670	6.88
II	400	185	8.5	7	118	1000	8.50
III	400	223	10	8	142	1400	9.85
IV	400	265	12	9	175	2100	12.00
V	425	290	18	10/13	237	3020	12.75
VI*	425	330	22	11/14	288	4190	14.52
VII*	300	400	14	10	271	4520	16.7
X	200	—	14	—	150	—	—

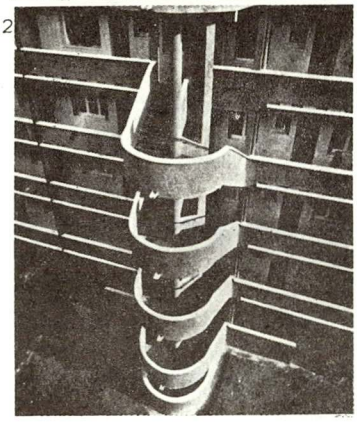
輕　量 ◇ 有効率最高 ◇ 經　濟

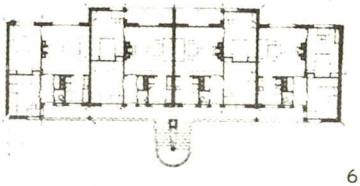
イリス商會　東京・大阪・小倉

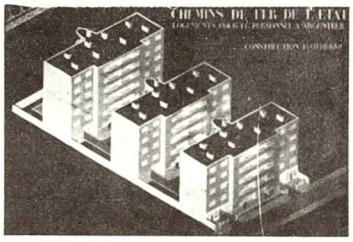












1 外觀　2—4 外部階段　5 平面圖　6 一般配置圖

佛國・アーヂカントオイユの鐵道アパート　　設計　ドラージュ氏

切　取　線

最新發明　防水工事界之革命

專賣特許

セメファルトプライマーに就て

發明者　阪口芳三郎

防水工事の施工に際し從來**アスファルト**を**コンクリート**に完全に密着せしむるには**アスファルトプライマー**（**アスファルト**を輕油等にて稀釋したるもの）を**コンクリート**面に塗布しこれに依りて**コンクリート**と**アスファルト**との密着を容易ならしむる方法を採り來りたるも該方法は某國人の有する特許權（特許第四八六三號）に抵觸するものにして讒者の等しく患ひつゝある處なりしが發明者は此**コンクリート**面に**アスファルトプライマー**を塗布する事の前述の如く既特權に抵觸する事は吾が國防水工事界に取りて由々しき問題なる事に留意し何等該特許權に觸れずして猶一層有効且つ施工簡易なる**プライマー**を發見する事に努力し遂に今回優秀なる理想的**プライマー**の本邦獨自最初の特許權を穫得するに至れり。

次に從來の**アスファルトプライマー**は次の如き缺陷あり。

1、コンクリートが完全に乾燥せざる場合はこれに塗布する事を得ず即ち水氣の爲浮上りてその用を爲さざればなり。（施工能率低下）

2、アスファルトプライマーは塗布後猶相當時間の經過を待たざれば防水工事を施工することを得ず。（施工能率低下）

3、アスファルトプライマー塗布後防水工事前に於て降雨等ありたる時は洗ひ流さるゝ虞あり。（膠着性不足、防水能力不備）

4、コンクリートとアスファルトとの密着度弱し。（膠着性小）

セメファルトプライマーは**アスファルト**と最も完全に融合する特性を有し且つ以上の缺陷を補ふべく案出せられたるものにして次の特徴を有す

1、特**コンクリート**に水氣あるも**アスファルト**を完全に密着せしむ。

2、**施工能率の增進**　塗布後一時間内外にて防水工事を施工することを得。

3、防水性　**セメファルトプライマー**はそのもの自身にて大なる防水能力を有するを以て塗布後降雨等の爲絶對に洗ひ流さるゝことなし。

4、膠着性　**セメファルトプライマー**は**コンクリート**内部へ迅速に浸透し、且其上に塗布したる**アスファルト**と强く結合する故に**コンクリート**と防水層とを完全に膠着するものなり。

5、施工簡易　**セメファルトプライマー**は淡精なる液體にして乾燥早きが故に刷毛引きにて施工最も簡易なり。

別途使用

1、本劑は防濕防蟲の特性を有するが故に建築物床下等に塗布すれば衛生上最もよし。

2、右の外（糊が非常によくつく）の特性をも有する爲リノリウム下塗布用として最も推賞さるべきものなり。

發賣元

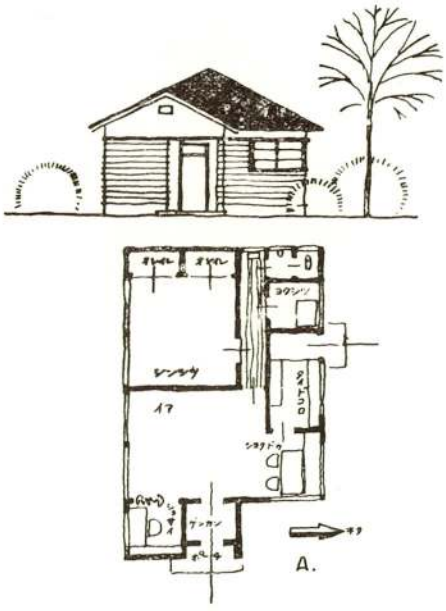
工材社

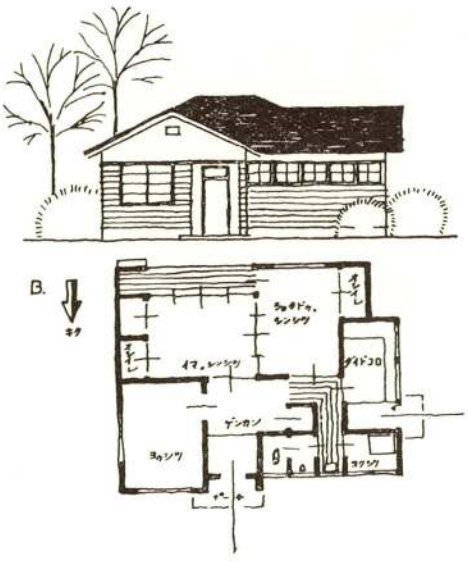
本社　大阪市西區京町堀通一丁目四〇番地（電話　土佐堀五八〇九番）

出張所　東京市芝區南佐久間町二丁目三番地（電話　芝二五〇六番）

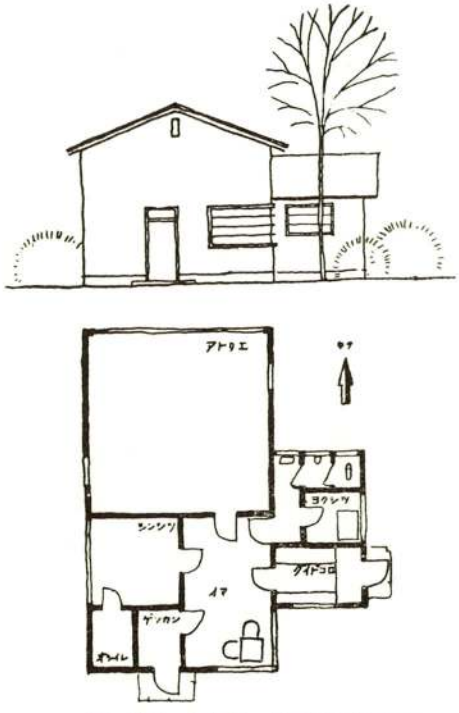
小住宅(案)五種

佃　十　俊

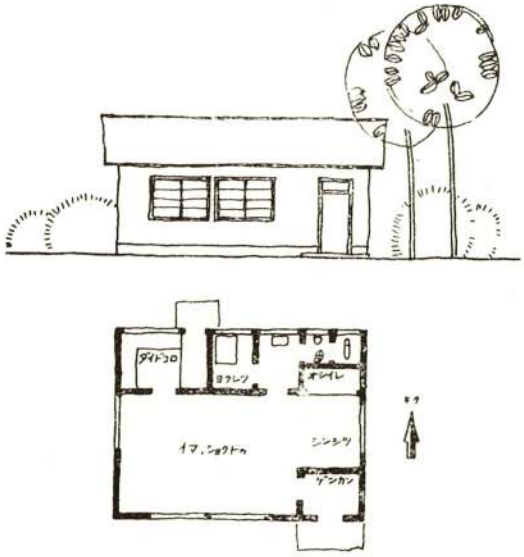




コウガイジユウタク A 17.75ツボ　B 18.75ツボ
ツクダ・カズトシ　8ガツ9ニチ　1931



アトリエ ノ アル イエ 20.25ツボ
ツクダ・カズトシ　8ガツ9ニチ　1931



ココロ ノ ネグラ 12ツボ
ツクダ・カズトシ　8ガツ9ニチ　1931

吉祥山正傳寺（上）

工學博士　天沼俊一

緒言

今年内にもう一度、先日のやうなものをかくやうに、といふ話があつたから、古宮や古寺のことでも、多少役にたつなら書いてもいゝと引受けた。そこで今度は正傳寺といふ名の、少しばかりあれてゐて、其上に少しばかり雨洩りのしてゐる寺の記事にしておくことにした。荒れてゐても雨が洩つてゐても、建築としては一等品である。

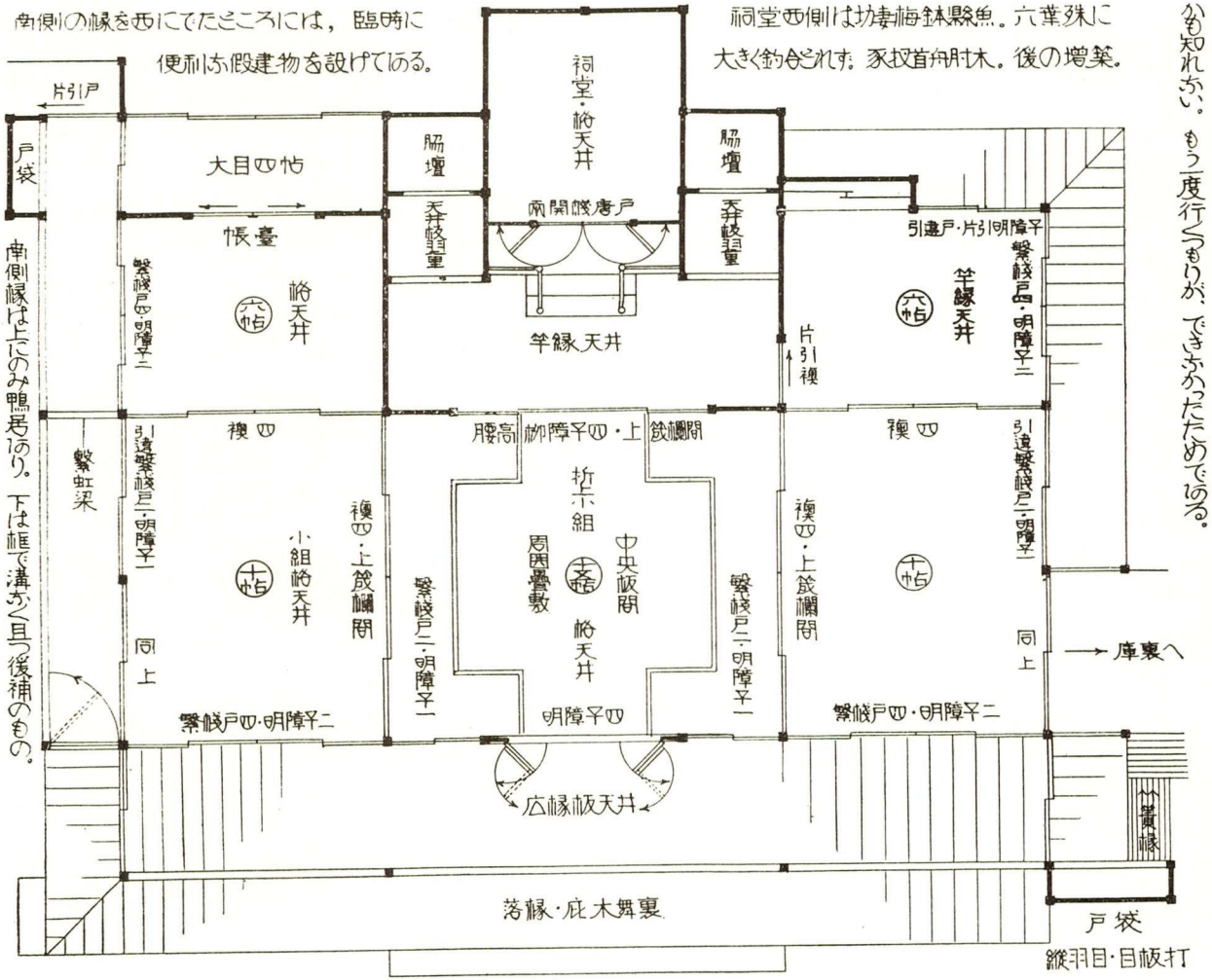
つい近頃まで、所在地は京都府愛宕郡大宮村大字西賀茂といつたが、今年の四月一日から京都市上京區となつた。別段寺が移轉したのではなく、市がひろがつたのである。思ひ切つて大きくなり、何でも世界で何番目とかいふことになつたとかで、大層な祝賀をしたやうであつたが、一層のこと山城一國を編入してしまつたら、それこそ世界第一で、大分威張れたらうに、惜しい事をしたものだと思つた。併しその様なことはどうでもいいが、其正傳寺本堂――といつてゐるが實は方丈である――は國寶建築であり、伏見城の遺構といふので、いくらか人に知られてゐるやうである。併し本會會員の殆んど全部は、こんな名の寺の存在は知らぬであらう。

尤も所在地が邊鄙といふ程でもないが、何だか行くのに億劫なやうに思はれるせいか、行く人もあまりないらしく、甚だ淋しい寺である。けれども其本堂は既に明治三十七年八月に國寶に指定された位だからとうの昔に識者に認められただけで、他に庫裏と鐘樓が一棟と門が二棟、何れも桃山時代の建築があるにも係らず、此等は絶えて無識者は勿論有識者の注意もまるで惹かぬまゝ放置せられ、鐘樓の如きは椽は落ちかけ、屋根全體生子板をあてがつて、漸く雨露の侵潤を防いでゐる有様であるが、夫れは中中大した傑作で、珍らしい建物である。當局はよろしく速に此等の建築物を調査し、崩壊せぬ間に國寶に編入し、完全なる修理を施し、永久に保存の途を講ずべきである。若し然らずして現狀のまゝ何等の手段をもとらず、荏苒日を費すときは、或は萬一村社十六所神社拜殿――奈良縣生駒郡雄村大字中（Naka）、靈山寺（Ryōzen Zi）本堂西側に、明治四十年頃まで建つてゐた鎌倉末期の形式をもつてゐた割拜殿で、曾て櫻井神社拜殿に就て本誌に記したとき一度紹介したことはあつたが、もう一度こゝに記しておく――と同じやうな悲運に遭遇せぬとも限らない。さうなつてからいくら騒ぎたてても致し方はない。

併しながら、いゝとかよくないとかいふのは、勿論主觀的のものである。私は非常に珍らしいものと思つても、他の人人はそれ程迄に考へてゐないのかも知れぬ。此場合また然りであつて、國寶保存會の諸君子が觀察されたら、洵に平凡なものだといつて、暗から暗へ葬られて了はぬとも限らない。ただ私だけが獨りで惜んでゐるのみかも知れぬ。けれども私は、桃山建築の模範と確信してゐるから、以下二回に亘り、例の如く多くの寫眞を入れて紹介を試みる。若し識者に共價値を認められ、此等の寫眞が國寶編入の動機ともならば、筆者洵に望外

京都市上京區西賀茂…正傳寺本堂平面見取圖・昭和六年六月吾製圖…（附）

昭和六年三月三十一日迄、京都府愛宕郡大宮村大字西賀茂であつたが、四月一日から市にふくまれた。大德寺方面からだと、自動車が門前迄行くが、上賀茂の方からは、十四五町徒歩せねばならぬ。此平面はほんの見取圖であるから、大體の見當をつけ得るくらいのことで、後面中央のたたりは、少し違つてゐるかも知れない。もう一度行くつもりが、できなかつたためである。



の幸である。

由緒

【大日本寺院總覽】……初め弘長年中、兀庵禪師の歸化するや、東嚴禪師其遺鉢を嗣ぎ、一條今出川に一寺を開創す。此時蒙古襲來の事あり、東嚴之を憂ひ、石清水に祈る、龜山天皇深く之を賞し、吉祥山正傳護國禪寺の勅號を賜ふ。此より大に伽藍を造營し、洛北の名藍となれり、後醍醐天皇勅願所の綸旨を賜ひ、莊園を附せらる。豐臣氏以來朱印の地を給せられ、境內十四町二反餘歩なりしが、明治に至り一町九反餘歩となれり。

とあるので大體の沿革は判る。其方丈に關しては同書に

桃山城舊殿の遺物なり、梁行四間半桁行七間、檜造にて其襖繪は狩野山樂精密山水金泥雲取の名畫五十餘枚を存す、特別保護建造物たり。

とあるのみ。【日本古美術案內】には

本堂……は寛永年中（一六二四—一六四三）伏見城の御成殿を賜つたもので、襖畫（山水樓圖）は狩野山樂の筆と傳ふ、畫風は山樂よりもその義子山雪に近い。

とただこれだけで、建築に就いて何等の解說もないのは遺憾である。【日本古建築菁華】のは最初に引いた【總覽】のと大同小異である。

本堂（平面圖及第一圖より第二十九圖まで）

本堂は桁行三間梁間四間單層入母屋造柿葺で、大體どこの方丈にも共通の造りかたである。先づ正面から觀察して行かう。

正面には廣椽と落椽とあり、其境に柱が三本たつてゐる。其柱の大さと面との關係は、五寸九分（又は五寸九分五厘）に面見付三分五厘、即ち約1/17で、これは桃山といふよりは、寧ろ江戸時代の割合である。然るに正面中央兩折兩開棧唐戸の兩脇の柱は、一邊五寸三分面見付三分五厘で、割合約1/15である。これは謂はゆる江戸時代に普通の「十面」（面幅一邊の1/10、故に見付約1/14）より少し小さい位で、これまた桃山としても、ずつと末の方である。さうしてみると、或は寛永移轉の際、柱等はかへてしまつたのかも知れない。

椽柱の外側に沿ひて一筋があり、雨戸が走るやうにしてある（第十六・七圖）。側面の方も椽の端に同樣の裝置がある。さうして勿論戸をあければ、正面の椽は全部開放されるが、側面は雨戸の直ぐ內方、即ち椽先の柱の間に鴨居が入れてあるところをみると、以前には何か建具が嵌まつてゐたらしいが、實は鴨居ばかりで敷居がないから、現在の有樣では仕方がない。以前はどうなつてゐたのか、其邊が判然せぬ（第十四・第十五圖）。

正側面共欄間のせいは隨分高く、引違紙貼障子が入れてある。今は紙がやぶれて隨分ひどくなつてゐるが、【古建築菁華】にでてゐる圖を見ると、少しも破れてゐないから、あれは欄間の障子に紙をはりたてにとつたものか、或は種板を修正したか、とにかくきれいである（第一二圖其他）。さうして正側面の出會つた所、即ち曲り角は、一方は引違杉戸、他は外開妻戸を吊込み（第四・第十四及第十五圖）、杉戸の外を正面の落椽が廻り、側面の椽とは切目長押だけの差で段がつけてある（第四圖）。つまり隅が凹んでゐるやうになつてゐるが、實は側面の椽がはみだしてゐるので、ここが落椽にさへなつてゐれば、丁度正面のがここへ廻つてきたことになり、さう變つては見えぬのである（第一圖・第四圖）。

正面の廣椽の上は板天井で、椽幅の廣いにも係らず、側柱と椽柱とのつなぎはないが（第十二圖）、側面は狹いのに繫虹梁を以て連絡をとつてゐる（第十五圖）。此繫虹梁は眉も袖切もなく面がとつてあり、古い形式をもつてゐる。普通なら袖切のところに眉迄とつてあり、場合によつては拙な形の若葉を、甚だ無遠慮にほりつけたのもあるが、さういふ事を一切してゐないところが、さつぱりしてゐて大分工合がよろしい（第十五圖）。此部分は化粧屋根裏になつてゐるが、前述の通り正面だと落椽の上に當るのだから、これでいゝ筈である。

正面廣椽の北方は、南方と同じく引違杉戸がたつてゐる（第十二・第十三圖）。上部は同じ樣に竹の節があつて、其下部と中央と上部と、三筋平たい木を水平に置き、下と中央との水平材の間に、二本の平行せる斜材を入れたもので（第十二・第十三・第十六圖）、側面椽の妻戸上亦然り（第十四圖第十五圖）。かゝる手法は南禪寺方丈椽の欄間に於いても亦見る所で、當代相當に流行した取扱方であつたのであらう。

廣椽の戸袋は北端にある。此戸袋は同じく桃山時代で、當初のものと思はれる。どこで判るかといふと、上の破風板であつて、其木尻のところに繪樣がほつてあるが、その形からみて左樣判斷ができるのである（第十二圖第十三圖）。かうなると戸袋位といつて中中馬鹿にはできない。但し古いのは南方即ち寫眞に見えてゐる方ので、北方のは後補である。

次に軒裏は全部「疎垂木舞裏」であるが、これは此種の建築にありては當然左樣あるべきで、特別でも何でもない。反て繁垂などの方が珍らしい位である。上醍醐にある清瀧堂拜殿の如きは、軒二重で地は繁垂だが、飛の方は疎にして木舞裏にしてある。總じて住宅風を多分に取入れた社寺建築では、軒先を輕快ならしむるため、當然とるべき方法をとつてゐるのである。

夫れから屋根に行く。屋根では側面の妻飾を調べてみると、狐格子で中央に三花懸魚が下つてゐる。此種の妻飾はいくらでもそこいらにあるから、此も亦珍らしいどころではないが、之れ等は何れも新らしいもののみで、古いのはさう澤山はない。

元來狐格子は鎌倉以降のものらしく、其最古と思はるるは、宇治上神社拜殿（京都府久世郡宇治町）にある。あれはあの樣に至極きやしやな住宅風の建物で、兩方に「縋破風」がつけてあり、いろいろの點からみて面白い建物である。尤もこの兩妻のは全部先年修理の際の補加で、古いのは一つも殘つてはゐないが、破風板の裏に縱橫の子の「かた」がついてゐたので、修理の節此明白な證據により、蔀戸の格子を斟酌して全部推定復原をしたものださうである。次は清瀧堂拜殿（上醍醐）や慈照寺東求堂（京都市）の破風である。桃山時代まで降ると、手近にあつて確かなものは西本願寺飛雲閣位のところであるが、此等は何れも格子は細く目は大きく、縱子は「前包」の前に沿ひて延び、屋根の上までいつてとまつてゐる。鎌倉以降桃山迄の狐格子は殆んど總てかうであるといつてよろしい。吉野水分神社本殿背面の破風についてゐたやうな45°に組まれた格子は、後補かも知れぬが、桃山とすれば除外例である。

西本願寺鴻の間の妻は、江戸時代のの如く前包の上に「須覆」があり、縱子は其上までで止まつてゐる。須覆は前の方に飛びだしてゐるのだから、いやでもここで止まらざるを得ないのである。さうして先のと反對に、縱橫の子は割合に太く目は小さい。若しこれが當初のものであつたとしたらば、桃山には、

子細く目大きく、須覆なきもの

子太く目小さく、須覆あるもの

の二種あつたので、丁度古式から新式へ移り變りの時代といへるのである。

以上記した豫備智識を以て、此兩妻をみるときは、縱子は正に前包の上を通つてゐるし、格子は細く目は大きいから、今の木割法に凝り固まつた人や、壺金の專門家からみたら、隨分變つてゐて法式に當嵌つてゐぬやうに思ふかも知れぬが、事實はかういふのが古いので、雨おさへのためには、勿論須覆のあつた方がいいが、それは新式である（第三圖第五圖）。

三花懸魚も形が中中よろしい。懸魚は下の方にさへ下つてゐればそれで事は足るので、左右はなくともよろしい。而も下の方にだけ下つてゐるのが古式で、この樣に同じやうなのが三方にでだしたのは、室町以降のことと心得てゐていいやうである。金峰山寺本堂（奈良縣吉野通稱藏王堂）厨子の妻や、談山神社權殿向拜（同多武峰）についてゐる——これは桁隱であるが——のなどは古い方で、桃山以後可なり賞用されたのであつた。大津市園城寺（三井寺）勸學院の妻についてゐるのと、此とは殆んど同じものといつてもいい位に似てゐるのは、時代が同じ位だからで、當然のことといへる。

其中央に奏の紋がつけてあるのは、寛永年中に伏見城の一部を賜つたのだから、德川の意を迎へてであらう。懸魚等の取はづしは、現今古社寺修理になれてゐる大工が、腫物に觸れるやうに、可なり戰戰兢兢如としてやつても、どうかすると失敗する。此場合などは、できてから間のない時だから、さう古いことはなし、割合に取扱ひ易かつたかも知れぬが、若し以前のが桃山式蓮花紋——八葉の蓮花紋を重ねた單純なもので、此時代の疏瓦瓦當の文樣に賞用されたもの——か何かであつたならば、例へうまく取はづしても、之れを廢物にしてしまつたらうと思はれる。之れで假にさうしたとして、寛永ならいふ迄もなく桃山のつづきと見られ、この樣なものでは殆んど慶長位との區別はつかぬ。だから例へ寛永の際のとしても、これを桃山懸魚とみておいて、少しも差支はないと思ふ。

六葉は普通に見出さるる形と異なり、牡丹の花の變形であるらしいが、或はさうまで考へないでいいかも知れない。下からでは風雨に曝された結果、隨分ひどく磨滅してゐるやうに見えてゐるが、そばでよく觀るとさうではなく、初めて各瓣が複雜で且つ小さくできてゐるのである。之れにもつてきて「菊座」と「樽の口」とがついてゐる。今では形がすつかり變つてしまつてゐるから、かかる六葉が蓮瓣から變化したといつても、直に肯定しにくいかも知れぬが、確かに蓮花である。其理由は本誌にまだ記したことがないから、次に述べておくことにした。

蓮花紋は昔しから大概八葉であつたが、中には六瓣のもあつた。後者の古いのでは、法隆寺金堂本尊兩脇侍（藥王藥上）寶冠の中央に、水仙の花の樣に見える六葉、同金堂及び天蓋組入天井の格間の花亦然り。東大寺大佛殿修理中に發掘した革製小箱の文樣中にも、極く小さいのが見出される。斯樣に飛鳥奈良時代からあつたのである。

かかる六瓣花は、各花瓣の交叉點、即ち隣接せる花瓣の形つくる茨のところに「猪目」を生ずるのは自然の勢ひである。謂はゆる「猪目懸魚」のできる順序と同じである。猪目は六葉にも四葉にもできるが、八葉——飾金具等には、法隆寺金堂懸魚のを除けば先づない——の場合は、大きな伏鉢上の請花の如きものを除くと、隣接せる花瓣の幅が狹いため、猪目をつくれば隣同士孔が共通となるか、或はさうなりがちなので、つくらないといふよりは寧ろつくれないのである。八葉のは、薄い金屬のでは法隆寺金堂懸魚のもの、燒きものでは山田寺出土の中央に孔のあいてゐる釘隱（長押に用ひたのであらうと思はれるが或は破風や懸魚であつたかも知れぬ）位のもので、何れも猪目はない。とにかく六葉が最多で、間間四葉もあつた（例へば談山神社摩殿桁隱、妙心寺勅使門兩妻懸魚等）。

其上に「菊座」といふのがある。此は雄蕊の變化したもので、それが頭が圓くなつて、菊科植物の花瓣のやうな形をとり、遂に其名ができたとすべきである。その中心から前方にでてゐる「樽の口」なるものは退化せる子房に他ならぬのである　それが證據には、初めのうちは直徑よりせいの方が低く、さうして先の徑が元の夫れよりいくらか細かつたのである。子房の寫生なら其反對でなければならぬが、これは便宜上ただかうしたのかも知れぬ。とにかく徑の方がせいより大きかつたといふことに注意すべきである。だから到底このやうな名をつけることはできなかつた。六葉も奈良時代のは現存してゐるかどうか知らぬが、平安のならあると思ふ。それで想像であるが、平安鎌倉までは背の低い元の太いものであつて、室町に入り徑は元も先も同じとなり、背も同じか又は少しばかり高い位になり、それが漸く變化して細く長く、遂に江戸時代になつて、元より先が太くなつてきたと同時に、帽子や外套が掛けられる樣になり、事實酒樽や醬油樽の「呑口」（注 嘴）の栓のやうになつて了つた。かうなると「樽の口」なる名稱が如何にも相應しいと同時に、到底其據て來たところを考察し得ぬやうになり、近頃になつて益々甚だしくなつたのである。木割の書物をみれば其割合はかいてあるが、夫れでもさすがにさうひどくはない。けれどもそこいらあたりの神社佛閣に用ひてあるのは、はなはだ極端であり、ひどいのになると、直徑の五六倍位でてゐるのがあるが、木が餘つてゐるから、餘計にだしておけ位の考へでやつたのかも知れない。とにかく此

六葉は變つてゐる。

今度は「鰭」を考へてみる。鰭が初めてつきだしたのは鎌倉末らしい。尤も「栗毛通」には鎌倉初からついてゐるが、これには當然つくべきで、なくては形がとれぬから、別扱にすべきである。ところが照破風の懸魚や桁隠となると、なくてもいいのである。いいどころではない、ないのが當然で、其忽冬唐草から發達したところを考へてみても、初めは鰭などといふものは、無用の附屬物だから、考案される筈がないのである。

鎌倉末になつて、漸く鰭ができたとして、次の室町でも、さう發達はしなかつたと思はれる、といふのは遺物から考察して、さういふ結論になるのである。ところが桃山になつてから、各種の彫刻が發達すると同時に、鰭も亦隨分美事なものになりだした。正傳寺のは牡丹の花と葉とから成つてゐるので、當代に最も多く用ひられた種類のものである。其長さは江戸時代の木割法からの割だし方と同じやうであるが、懸魚の幅及六葉の割は、型に嵌まつてゐぬ事が、この寫眞からでも充分看取できるであらう（第五圖）。

正面中央の間には兩折兩開棧唐戸を吊込んである。普通型であるが、上の方の花狹間の格子が、吹寄せになつてゐるところに注目を要する（第八圖第九圖）。吊元の戸の幅が手先のより幾分廣いのは當然であるが、其差があるにも係らず一本隔きの吹寄せがうまく當嵌まつてゐる。初めからかうしやうと思つてした事か、或はさうでなしに、いゝ加減にやりだしたがうまく行かぬので考へついたのか、何れにしても現在のは、まことに都合よくなつてゐる。

兩方の扉をしめたとき、其召合せのところにつけてある「猿」は、つまみが蟬にしてある（第九・第十及第十一圖）。第九圖のは小さくて判るまいが、第十及第十一圖では明瞭であらう。蟬はよくできてゐる。

落し猿のつまみに蟬をつけたのは、室生寺灌頂堂あたりにあるのが最も古いものゝやうである。果してさうなら鎌倉時代からあゝいふのが流行しだしたのであらう。同時代のものは園城寺金堂（慶長四年）のにある。昆蟲類で古來最も多く裝飾に用ひられたのは蝶（蛾）で、其次は蟬である。蜻蛉・蟷螂・蜂等に至つては、數へる程ほかない。蟬の最古のは、前に記した東大寺大佛殿内から、革箱其他と一所にでた小型の錠前で、銀製の頗る上等品である。新しいのでは吊燈の環のところにとまらせたもので、蟬の燈籠として珍重され、幾多の模造品ができてゐる。

他の出入口の建具は繁棧戸と明障子とである（第十二・第十五圖）。

* * * *

内部（見取平面圖參照）

中央の大室——普通「室中」と呼ぶやうであるが、こゝでは何といつてゐるかきゝ洩した——は板間で、周圍に疊が敷いてあり、折上小組格天井。其後方に細長い板間があつて、そこから二段の木階で祠堂へ登るやうになつてゐる（第十九圖第二十圖）。此木階の上には「大宗特賜宗覺禪師」（第十八圖）と二字づゝ四行にかいた額が掲げてあり、そこに其像が祀つてあるが、新しいものゝやうである。或は塗りかへたために、さう見えたのかも知れぬが、よく判らぬ。但し禪師の椅子は古いもので、後方によりかゝる所の上の方の、花模様の巻き上つてゐるところなどは中中よろしい。椅子の各部分の四角なところは何れも大面取で、其一つを試みに測つてみたら、一寸二分五重角で面見付二分あつた、してみると面と邊との割合約1/6だから、立派に鎌倉時代の比例で、巻き上つた花模様などからみても、それ位のところへもつて行つてもよさゝうである。

其祠堂への入口の扉は甚だ美事なもので、鏑付の框をもつた、下の間に格狹間、上の間に花狹間を入れたもの（第十八・第十九・第二十・第二十四圖）。花狹間だけは生地のまゝで、且つ其框の大さも、それ全體が入つてゐる部分より少しく小さい、どうもこれは後補か、或はどこか他所から似た大さのものをもつてきて、あてはめたのではないかと思はれる。其他の部分は全部古いらしい。

而して此扉は、建物と時代が一致せぬところから、全體をどこから持つてきて、祠堂を建てたとき其入口の扉として用ひ、正面の木階に昇勾欄を設け、之れと共に漆塗にしたのではあるまいか、と考へてみたのである。此扉はどう安くふんでも、室町位は大丈夫と思はれるのである。

何故かといふに、鎹付の棧唐戸は東大寺良辨堂内陣の失れに見出されるのが最古の遺物らしく、帶で長弓寺本堂（大和・生駒、弘安二年）・永保寺開山堂祠堂（岐阜縣加茂郡豐岡村・文和元年）・鶴林寺本堂（播磨・加古川、應永四年）等の扉が、斯様になつてゐて、此等は何れも鎌倉室町のものであること、さうして桃山江戸時代の實例が、日光東照宮境内經藏内部の輪藏の扉以外に見出しにくい事と、それからもう一つは、一番下の間に入れてある格狹間の形とから、室町位と推定したのである。此格狹間をなぜ室町としたかといふことは、餘り長くなるからやめる。實は判るやうにかくには、それだけでも可なり長い論文になるからである。

勾欄の實珠柱は、左右二本づつ、合計四本あるが、四本共皆異なつた——といつても極僅かな部分だけであるが——意匠より成つてゐる。併し氣の毒なことに、つまらぬできである。これは寛永より後れるのであらうと思はれる。

此建物を正傳寺へ貰つたときは、取あへず其まゝで「室中」の後室へ宗覺禪師を祀つておいたが、後になつて中央の部分を後方へ少しばかり張りだし、其時に此勾欄も祠堂も新しくつくり、どこからか適當な棧唐戸をみつけてきたりして、つくり上げたと考へられぬこともあるまい。祠堂の向て右は宏量禪師をまつり、左は位牌棚に用ひてある。

中央の間の左右、即ち南と北とは十疊六疊の二間があるが、北の方の奥の六疊には棚があり（第二十六圖）、上に袋戸棚がつくつてある。夫れ等の板に打つてある飾金具は寛永のものとみていゝやうである（第二十圖・第二十五圖・第二十六）。其小襖には北から南へ琵琶・葡萄・楊梅・眞桑瓜が描いてあるが、中々いゝできである（第二十五圖）。引手の金具もいゝし、この邊はすべて移轉後つけたのではないかと思はれる。此六疊は竿椽天井にしてある。此室と祠堂前の細長い間とだけが竿椽である。

南の奥の六疊間は後方に帳臺飾があり（第二十九圖）、其内には大目の疊が四枚並べて敷いてある。次の間即ち十疊間との間に、別に框があるのではなく、從て高くはなつてゐないが、上段の間に相當する室であること勿論である。帳臺や壁の貼紙にも、一面に墨畫があり、飾金具等は大して感心できぬが、とにかく立派に裝飾がしてある。然るに其帳臺の裏は板戸のまゝ殘してあるのは、少しくひどいやうな氣がする。或は以前はほんの飾りであつて、中央二枚の兩引戸はあく事はあるが、外は椽になつてゐたのかも知れぬ。現在其一番外（西側）に四枚の雨戸がたてゝあるのも、後の仕事ではないかと思はれる。

室中の間兩隣の十疊間は何れも小組格天井、上段の間は格天井、北側の六疊の間（即ち棚のある室）は竿椽天井であることは既にかいたが、此等の天井は室中の間の失れ等と共に、隨時に變改したのであらうと思はれる。

* * *

見取平面圖から考へると、最初は椽が四方を廻つてゐたのかも知れぬと思ふ。東側北方の杉戸をあけると椽にでるが、其椽は今は庫裏との交通の必要上、室を以て中斷されてゐるが、其椽が北側に沿ひ角を曲つて西側にでられ、更に南側の方まで行けたのかも知れない。さうして前記の様に帳臺飾はほんの飾に過ぎなかつたのであらう。ところが宗覺禪師を祀るため、裏を少しばかり西方につくりだしたとき、或は現在のやうに模様替をしたのではあるまいか。

祠堂は材料も大概新しいやうであるし、裏側へ行つてみると、背の高い切妻造りになつてゐて、梅鉢懸魚が下がつてゐる。妻飾豕扠首、枓栱は舟肘木で、すべての細部が大して感心のできぬ形である。柱等も新しく面も小さい。之れ等の點から、どうも此部分は後につくつたもの、としておき度いのである。

* * *

本堂の建具は内側から締りのできるやうになつてゐることと、引手

の金具は桃山のものとみていいといふことをよく判らせるのが目的で、第二十七圖と第二十八圖とを掲げておいた。前者は南側十疊の間、椽との境にたててある繁棧戸を室内からみたところで、圖の右方に見えてゐる黒い太いのは柱で、其左に上下の圓くなつた細長い金具と、其内に肱壺とを打つた、幅の狹い白いところは其柱の面である。其左の少し幅の廣いのは戸の框、框に沿ひたる極く細いのは四分一である。其左の引手との間に圓い座を打ち、そこに先の直角に曲つた肱金物を取つけ、さきの柱の面に打つた肱壺に其先を引かけて、外から勝手にあかぬやうにしてある。今日の様に面幅が狹くては、そこに金具を打つこと等はできかねるが、少なくともこれ位あれば都合がよろしい。

第二十八圖は引手の金具を大きくしたので、其中央は大概どの場合にも先づ楕圓形で、周圍は花菱のやうにしてあるのが、これも亦此種のでは普通である。中心に菊、周圍は上下に少しく大型の菊、左右は桐、其他の部分には適當に唐草を埋めてある。菊桐は桃山時代に最も賞用された紋章で、破風板に何れか一方又は雙方を一つおきに、又は千鳥に打つたり、棚板或は帳臺の飾金具に用ひたり、長押の六葉につけたり、隨時隨所に應用されたので、この場合、ここに見えてゐる文様は、桃山時代飾金具の夫れを代表するといつてもいい位のもので、これ一つ記憶してゐても、隨分便利であらう。

* * * *

此建物の各所の襖・繁棧戸の裏・帳臺及び壁の貼付等、すべて墨畵の山水がある。狩野山樂筆と傳へるが、義子山雪に近いといふ説が、【古美術案内】にかいてあることは、最初に紹介した通りである。ところが私には繪のことが判らないので、何もかくことができぬ。それで洵に遺憾千萬であるが見合はせ、有志の諸君に實地視察を勸める。

庫裏（第三十圖より第三十三圖迄）

本堂の北に並んで建つ。物門を入つて暫く行くと、ほんとうは次回に記す鐘樓が左手の畑中に見えるが、小さくてきたないから、そんなものには氣がつかず、緩い石段にかかると大きな二階建ちの土藏と、其右に先づ第一に庫裏の正面が見える。此土藏は本堂も門も皆かくして了ふので、甚だ邪魔になる。庫裏も亦、其ためどの位美觀を防げられてゐるかも知れぬ。第三十圖は、土藏が寫らない様にして正面から庫裏をみたところ、如何にも山寺らしくてまことに心地がよろしい。

併しながら庫裏建築としては極めて平凡、型に嵌つてゐて何等の奇がない、けれども其細部、例へば海老虹梁・木鼻・懸魚の形等頗るよろしく、又花頭窓を向て左に一つ用ひてゐるのは、面白いやり方である。其額椽には飾金具が打つてあり、全體の形も左程悪くはない（第三十一及第三十三圖）。

* * * *

花頭窓といふものは、禪宗建築と共に鎌倉時代に支那から入つてきたものであらうが、其一番のもとは何から何所で出來たのであらうか、といふことを實は以前から考へてゐたところ、支那が本家ではなくて「サラセン」の多葉栱に發したのであらう、といふことにまでもつて行つてみたが、實はそこで行詰まつて了つたきりになつてゐた。此頃少しばかり牽強附會かも知れぬが、忍冬模様にまで漕ぎつけてみたのである。此も本誌には未だ記さぬから、左に少しかいておく。

花頭窓の頭の部分と、格狹間の上の方とは、曲線の性質が全く同じである事は、誰れでも氣がついてゐるであらう。格狹間の曲線の兩方の部分が、下に曲らうとするところの邊から、曲らせずに眞直に延すか、又は反對に外方に反らせ、少し長くすれば、そつくり其まま立派な花頭窓ができるのである。

併し日本ではまだそこ迄は考へず、四角な連子窓一點張りで、さすがに平安時代に善美を盡した大伽藍の計劃施工をした大建築家も、此種の窓を按出する迄には至らなかつたうちに、世は鎌倉となり、支那から移入され、遂にあらゆる種類の建築に用ひられ、よく調和するやうになつた。寺院・神社・城堡・邸宅・茶室・廻廊・塀・ホテル等、行く所として可ならざるなきのみならず、時には必要缺くべからざるものにな

つて了つたのである。

夫れは夫れとしておき、此窓が格狹間からきたとして、然らば其格狹間の元はなんであるかといふに、どうも一種の忍冬模様よりほかにもつて行き所がないやうである。即ち亞述・波斯・希臘あたりの、先の尖らない猪目型の忍冬、朝鮮なら平壤郊外の古墳に現はれてゐる文様、内地なら玉蟲厨子宮殿の一部乃至飛鳥時代瓩瓦のあるものについてゐる夫れ等のもの等に就いてみると、大部分は廻りの細い輪廓がされて各辨の頭が連續すればいいし、平壤古墳のなら其まゝそつくり、花頭型をなしてゐるのである。

併し其輪廓はどこ迄も外擺線（Epicycloid）の如くで、中央の部分は葱花拱（Ogee Arch）になつてゐないが、ゐなくとも少しも差支はない。東大寺三月堂本尊豪座の上重側面についてゐるのなどは、上が平たいからただの擺線（Cycloid）の連續したやうな形である。其中心を現はすため、中央の部分を上の方に向つて茨をつくらせると、正に普通にみる花頭型ができるのである。

又懸魚の原型が、想像の如く忍冬ならば、夫れを逆にした形、或は法隆寺夢殿本尊光背についてゐる塔の相輪の先きについてゐる忍冬等からも、花頭型は比較的容易にできる筈である。

左樣に考へてくると、元は忍冬で、忍冬から格狹間ができ、それから花頭に變化したと考へてよささうである。さうすると亞述・波斯（薩珊朝に於いても好例がある）・希臘等に元があり、「サラセン」建築の窓・拱等に盛に用ひられ、支那に入りても石材の場合には隨分銳いのが見出されるが、木材を使用したときには、茨の尖り方が少しく鈍くなり、日本に傳へられ、遂に今日見るやうな形のものとなり、種種雜多の變形まで生じたとしても敢て不都合なことはないのである。

其花頭窓の框へは、室町迄は確かに飾金具は打たなかつた。桃山になると、本派本願寺鴻の間（京都市）・瑞巖寺本堂上段間（宮城縣松島）のやうに、飾金具を打ちだした。此場合は寛永のものと認められ、さうして飾金具は甚だ形も文様もよろしい。日光東照宮や大猷院等にも、飾金具を打つたのが多く見出されるが、此等は何れも框を木造にしたからできたので、石造では駄目な事勿論である。

* * *

花頭窓の隣りには高窓があり、其隣りが出入口で、つまり上の方の左右相稱が、下の方で破られてゐる。内部は住あらして隨分ひどくなつてゐるやうだが、外部からみたところでは、細部に面白いところがいくらもある。

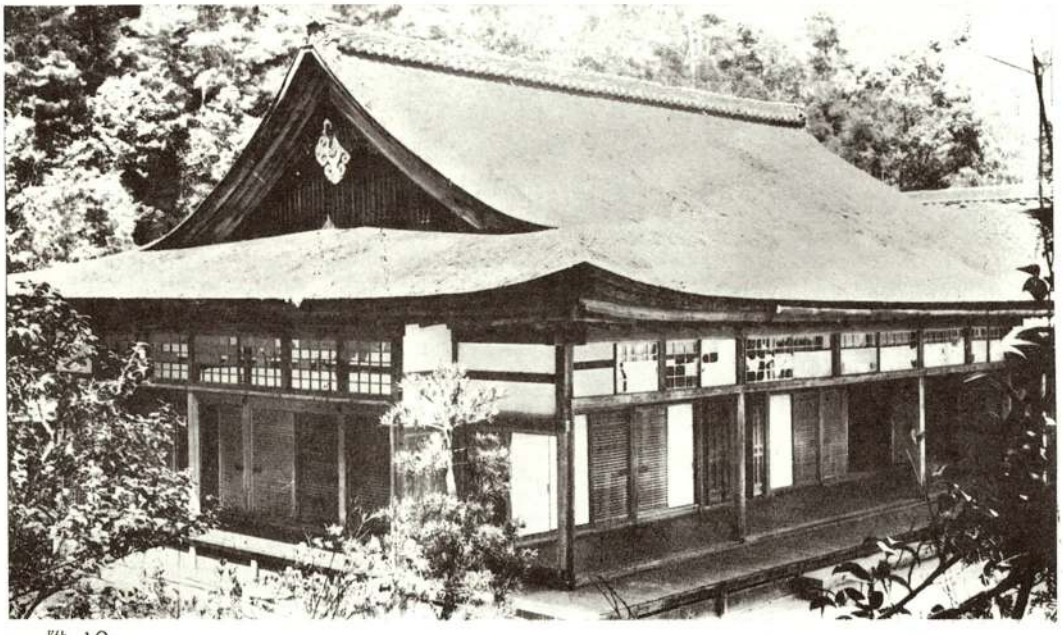
（昭和六年七月二十四日日光町の旅宿に於て稿了）

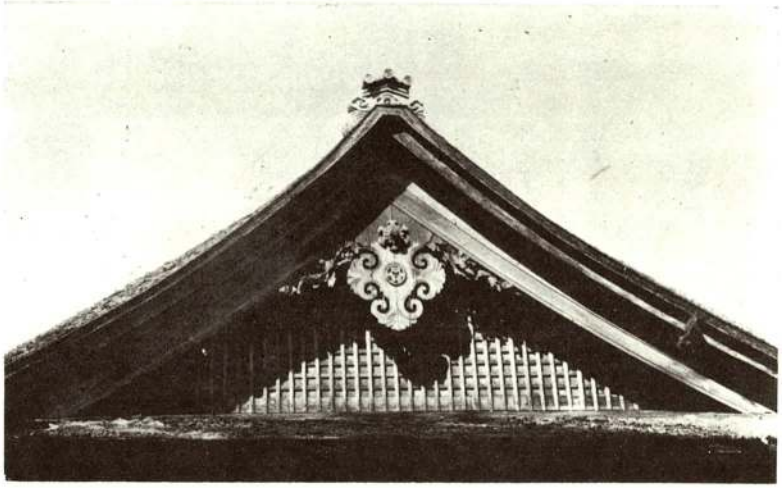


上。第一圖　正傳寺本堂の一部を東南隅よりみる　（昭和六年三月二十二日）

下。第二圖　正傳寺本堂全景　（昭和六年四月二十三日）

第一圖の上の方に見えてゐるのは東門の一部で、後に圖示するが特殊の形式である。此を入りて西に進み右に曲ると、今の本堂即ち元の方丈の東南端、即ち寫眞の角をきり取つたやうな所にでる。こゝが以前昇降口であつたのであらう。さうすると南側東端の妻戸が、この方からみて左開きにしてある理由も自然に判るであらう。下圖は全形。妻の三花懸魚と狐格子とに注意せよ。





上。第三圖　正傳寺本堂南妻飾

下。第四圖　正傳寺本堂東南隅

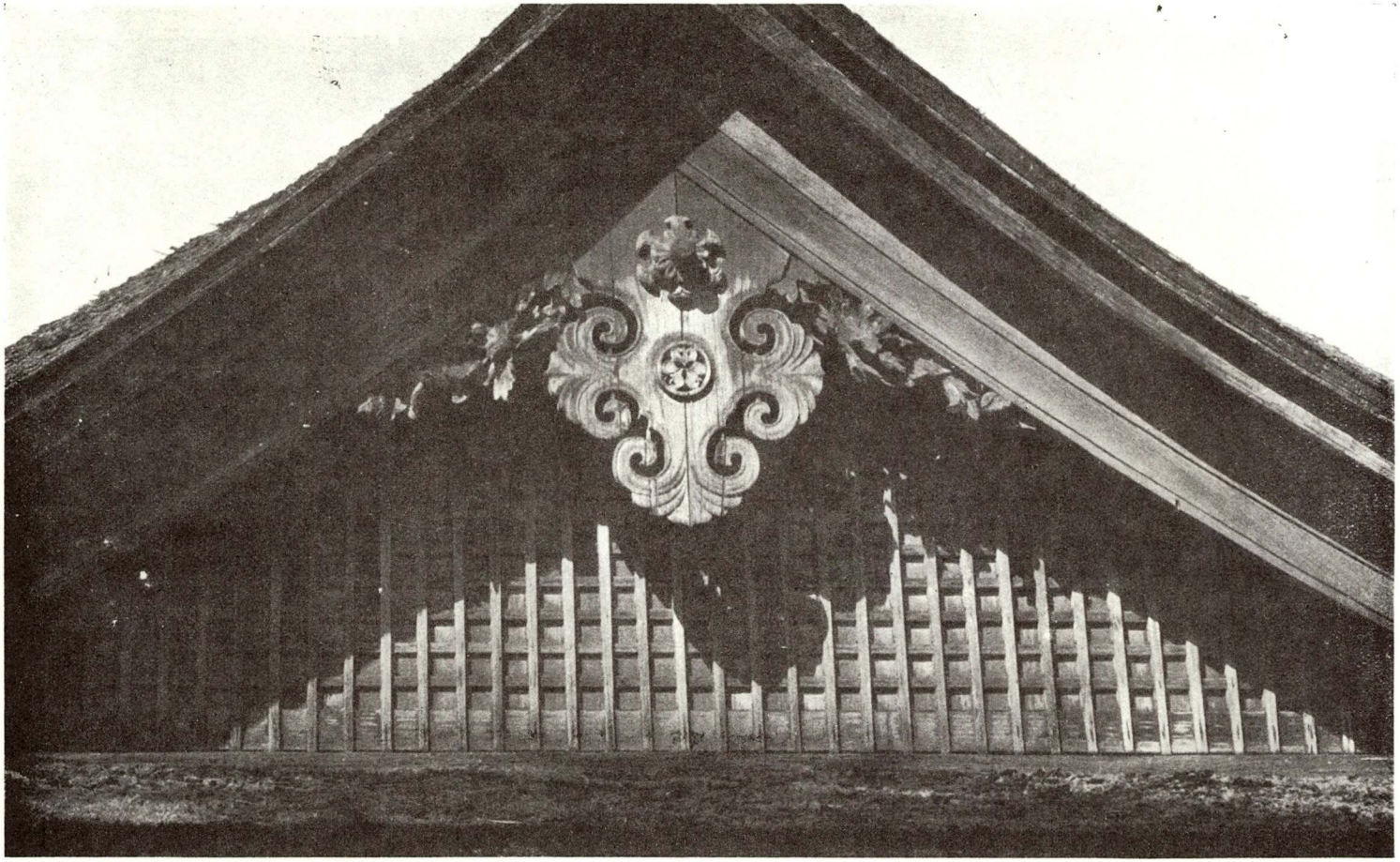
（昭和六年三月十五日）

（昭和六年四月二十三日）

第三圖は南妻で三花懸魚及其六葉や鰭が、木割法と少し異なつてゐるが、之れは即ちこれが古いことを示してゐるといへやう（第五圖參照）。

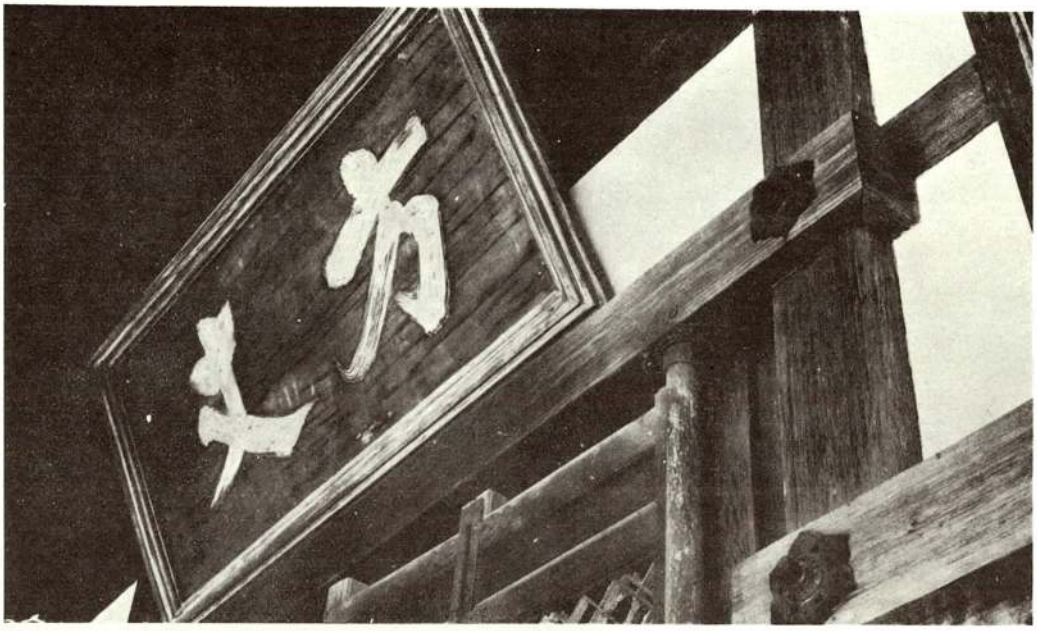
第四圖は東南隅のところで、以前の昇降口であつたらしく、踏段がおいてある。昇つて前進すれば、廣椽前の落椽へでるし、左へ進めば妻戸をあけて南椽に行けるし、斜左に杉戸を引けば廣椽にでることができる。杉戸に一ぱいに蘇鐵が描いてある。





第五圖　正傳寺本堂南妻の一部・（昭和六年三月十五日）

三花懸魚及其鰭，妻の狐格子の縦子が前包の前面に沿ひて妻の流れの上にまで達せる點とに注意せよ。

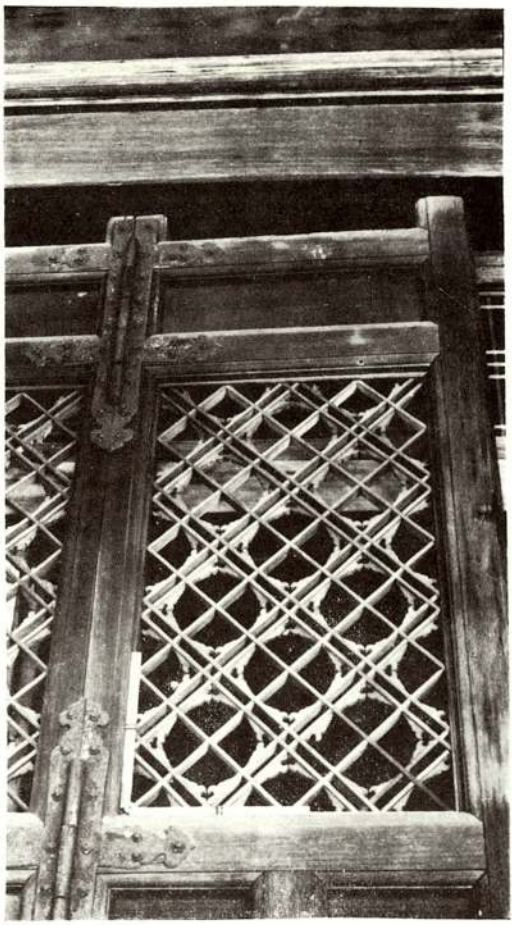




上。第六圖　正傳寺本堂正面中央の間上部
下。第七圖　正傳寺本堂正面中央出入口扉

今本堂といつてゐるが、勿論「方丈」といふべきで、またさうであつたのである。花狹間入の桟唐戸こそ唐様であるが、上下に藁座を用ひず、上長押及び切目長押に軸摺の孔をあけ、そこで軸が回轉するやうにしてある。第六圖は上部をよく見せるため、第七圖は扉全體の調子を判らせるためにだしたものである。

（昭和六年四月十二日）
（昭和六年三月二十二日）

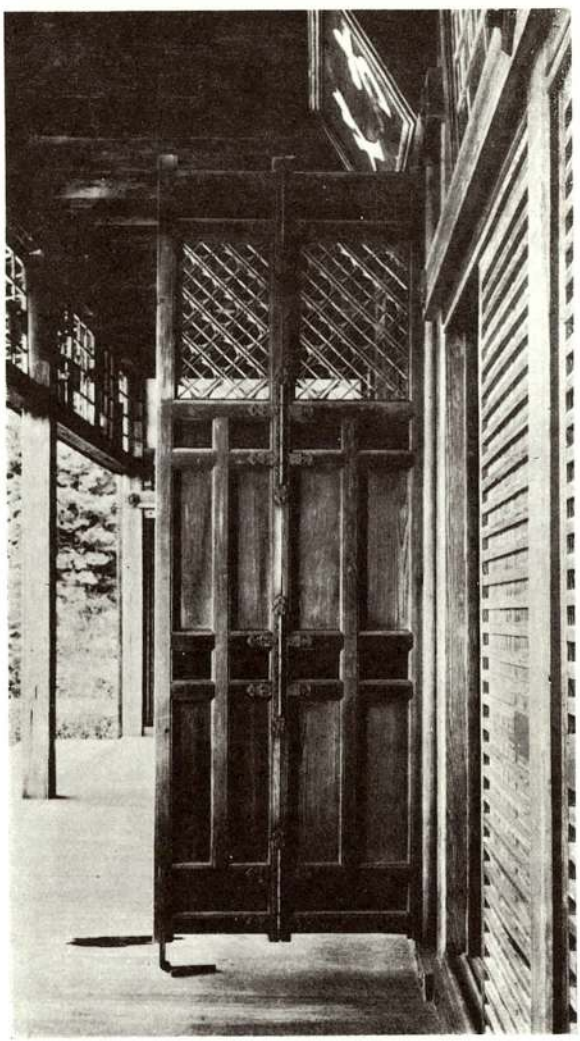


上。第八圖　同正面中央扉上部花狹間

花狹間は鎌倉時代以降見出さるゝが、吹寄せになつてゐるのは、桃山以前に見出されぬやうである。吹寄菱欄間が鎌倉にあるのだから、かういふのもあつて然るべきだのに、見つからない。

日光東照宮の扉に此種の水平垂直のが用ひてあるがあれも亦、桃山系統であつたことを知ることができる。

（左下にある曲尺の約五寸（六吋））



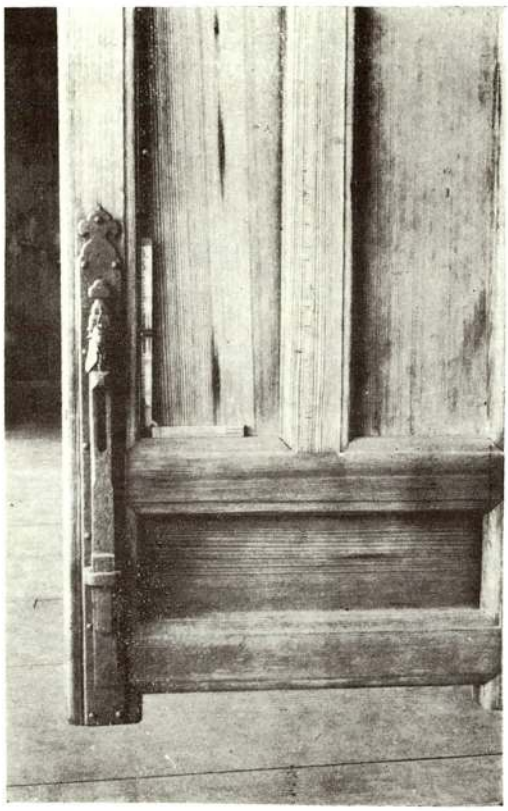
下。第九圖　正傳寺本堂正面北側扉（兩折兩開桟唐戶）

（昭和六年四月十二日）

吊元より手先の方が幅が狹いのは、此種のものでは當然であるが、上部の廣間に入れてある花狹間の、吹寄せと單獨の分の配置が、まことにうまくできてゐるところを見ると、此扉の計劃に當り、周到の注意を拂つたことが判るのである。

吊元と手先との間の蝶番の座がのびて、辻錢物のやうになつてゐるが、とにかく桟の辻に飾金具を用ひたのは桃山時代からである。

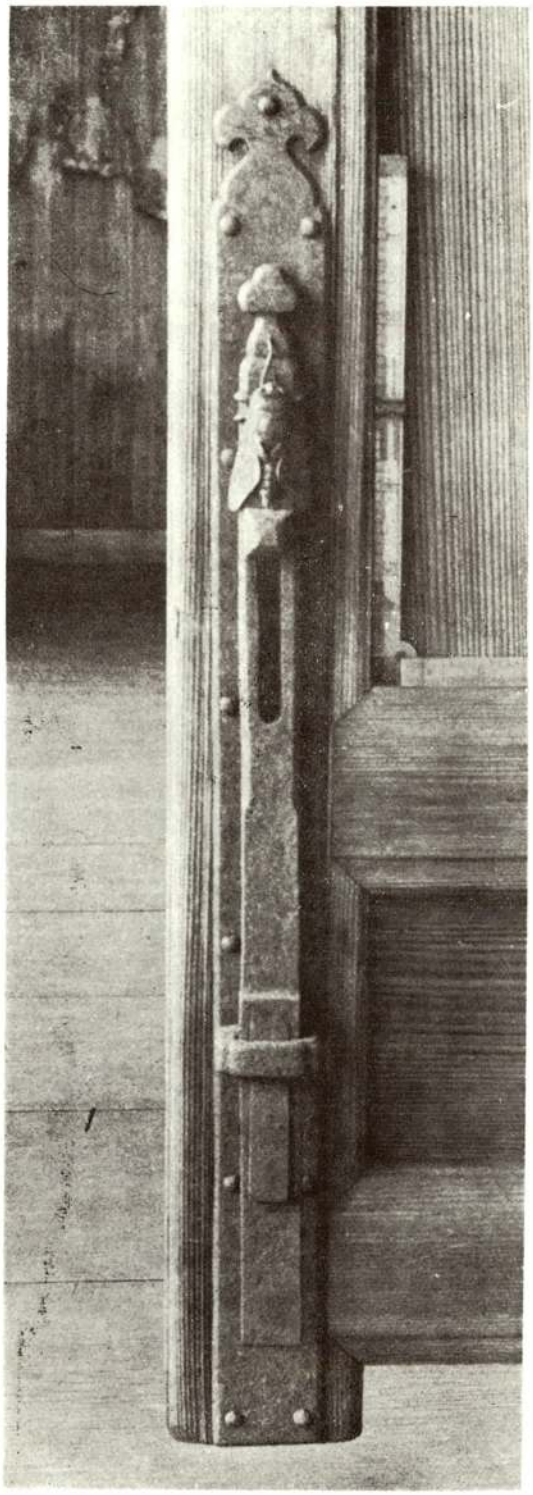
（左下に立てるは曲尺の一尺）

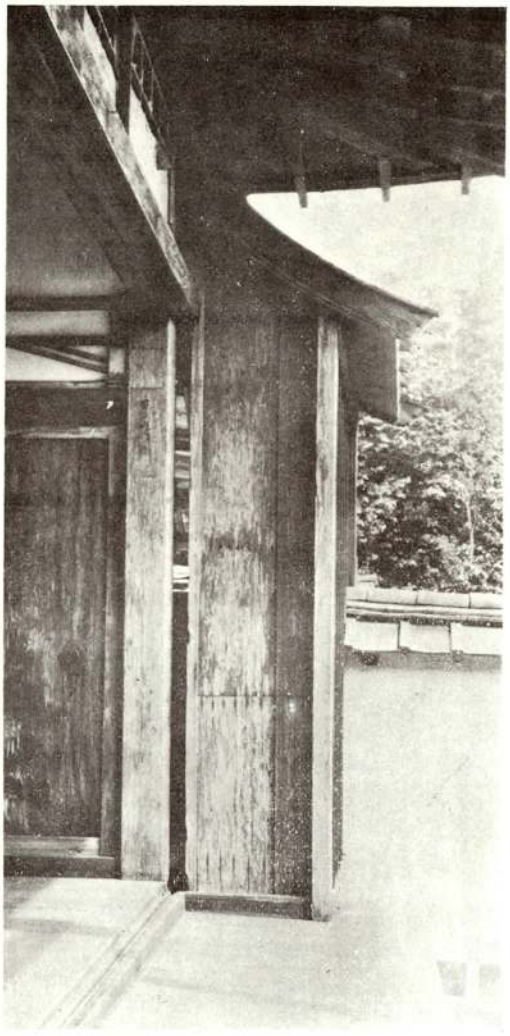


上。第十圖　正傳寺本堂正面棧唐戸一部（昭和六年三月二十二日）
下。第十一圖　同　上げ猿詳細

扉の上げ下げの猿に蟬の金具を用ひてある最古の例は、今私の知つてゐるのでは、室生寺灌頂堂のだから、鎌倉時代からである。其前にあつたかないかは知らない。桃山のでは慶長四年の園城寺金堂のである。此「猿」はよく桃山時代の形式を現はしてゐる。

（手先框に沿ひ棧上に立てるは曲尺の約五寸（六吋））





上。第十二圖　同東面北端戸袋

（昭和六年四月二十三日）

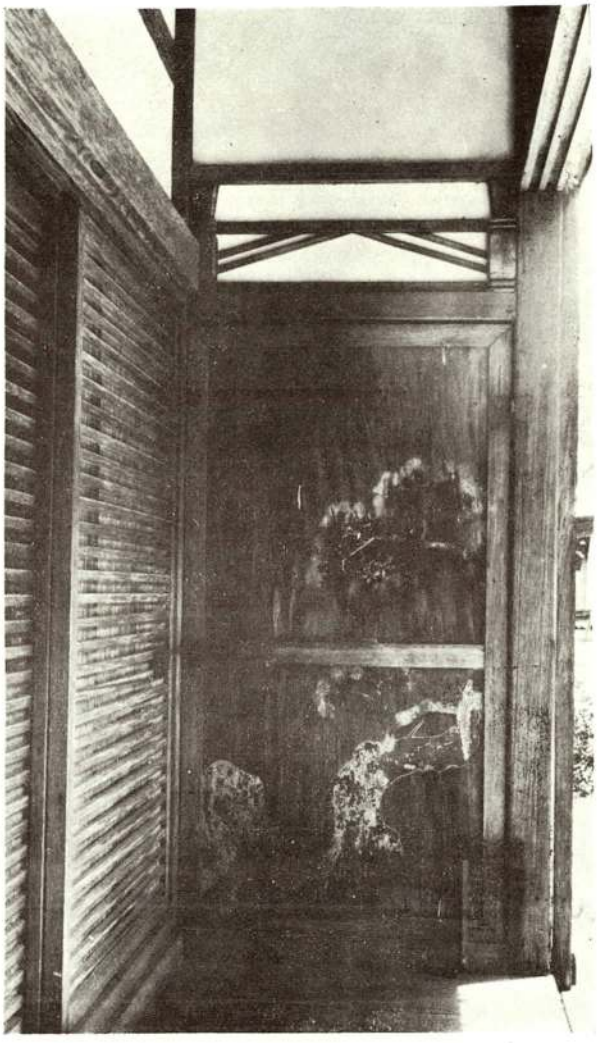
大概の戸袋の上は平たくおさめてあるのに、これは勾配の急な片流れの破風に終つてゐる屋根をもつてゐる。北側のは後補であるが、こゝに見えてゐるもの、即ち南側のは古いもので、下端に二本の眉があり、端は最も普通に見出さるゝ木鼻のやうな繰形からできてゐる。



下。第十三圖　同東面北方をみたところ

（昭和六年三月二十二日）

落椽にたちて北方をみたもので、第七圖の扉と同じものが左端に寫つてゐる。正面右は上圖の戸袋、突當りは引違杉戸で、それをあけると落椽と同じ位の椽があり、右をむけば雨戸を出し入れすることが自由である。上部欄間に注意。



下。第十五圖　南椽より東方をみる

（昭和六年四月二十三日）

正面の落椽が南に廻つてきて、この妻戸のところで一段高くなり、これが南椽になつてゐる。妻戸は何故に右開になつてゐるのかといふに、第一圖の解說に記したやうに、元の昇降口の關係からであらうと思はれるが、果してさうかどうかよく判らぬ

椽柱と側柱との間に繫虹梁が用ひてあるが、下端に面がある丈けで、眉も袖切もたく、古い形式のもので、此建物に用ひてある唯一の虹梁である。



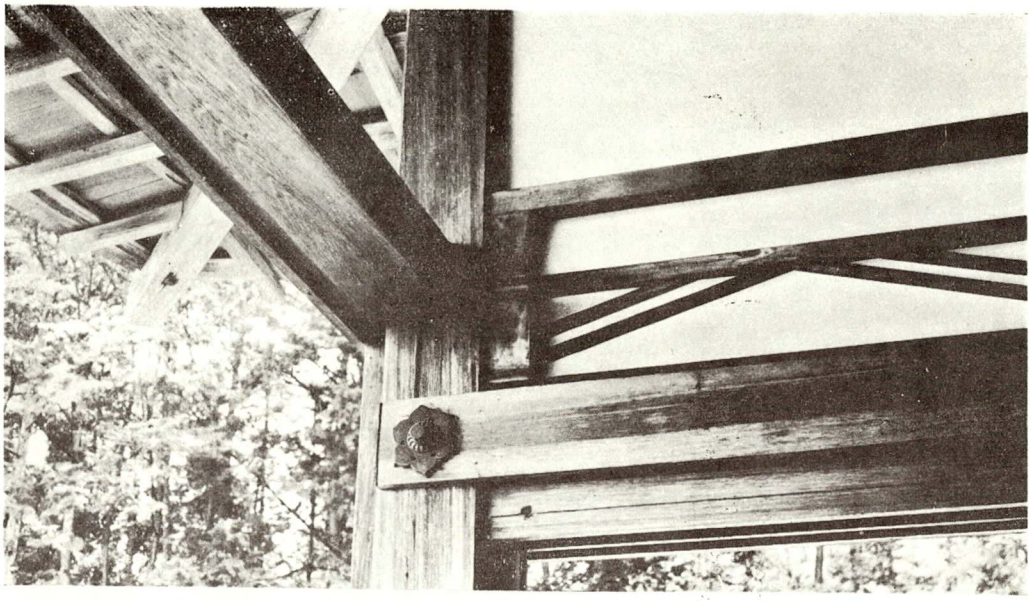
上。第十四圖　南椽東端妻戸を西方よりみる

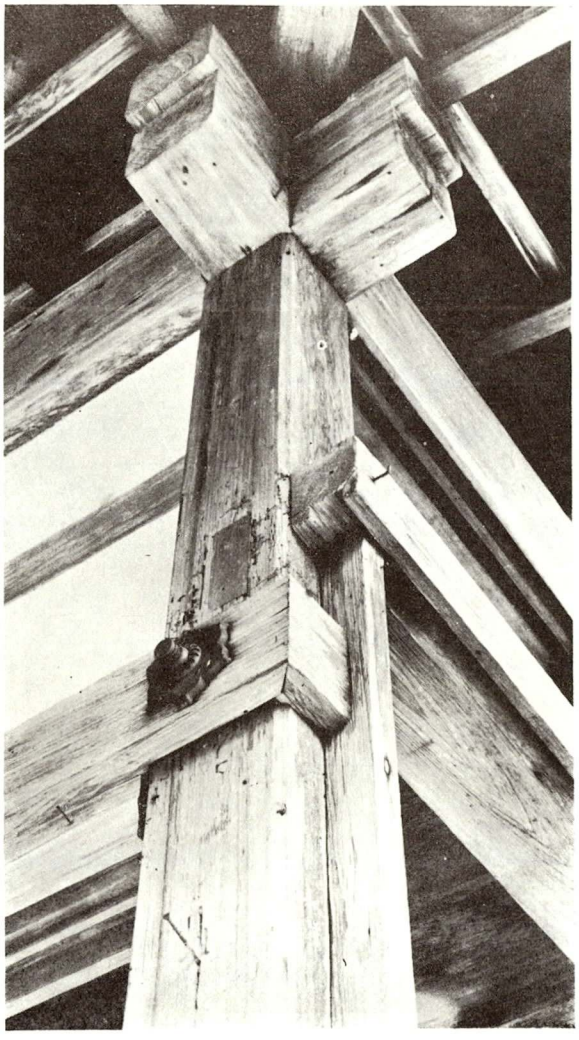
（昭和六年四月二十三日）

妻戸をしめたところであるが、之れを開くと下圖の如くになる。椽柱の上に鴨居が見えてゐる（下圖にはずつと餘計寫つてゐる）が、下に敷居はない。これは下の方は後補で、たゞの框になつてしまつてゐるからであるが、元とは勿論下に敷居がありそこに建具があつたのであらう。

上の欄間は廣椽上のと同じもので、この方は幅が狹いから竹の節は中央にない。

（杉戸の前右下に立てるは曲尺の一尺）





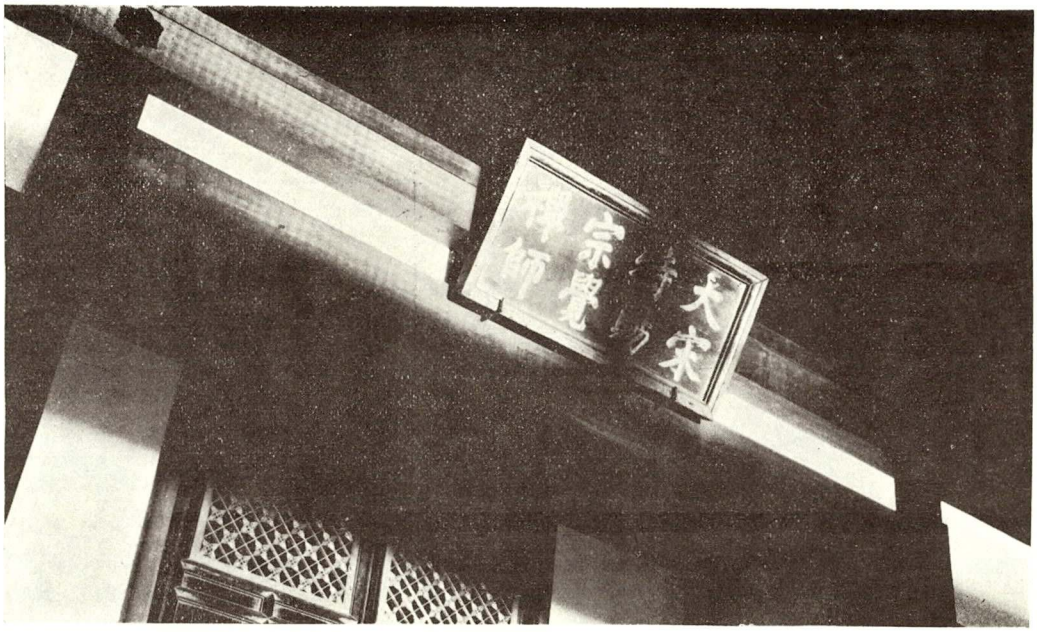
上。**第十六圖　正面廣椽南端を北側よりみる**

下。**第十七圖　正面廣椽東南隅を外側よりみる**

（昭和六年四月二十三日）

（同　年　同　月　同　日）

第十六圖は正面の南隅の椽柱上部を中央とし、右の方は南端杉戸をあけて、鴨居と長押と欄間とを、左は一筋（其上端は欄間の敷居がほつてある）と見せたところで、第十七圖は同じところを東南隅からみたゝめ、左右が反對になり、前圖で見えなかつた欄間の鴨居と、從て軒桁等が見え、尚ほ其上に軒裏の一部、化粧地隅木・棰・木舞等も寫つてゐるから、これを前圖と比べると一層よく判るであらう。欄間の形式に就ては第十一・三・四・五圖等を參照の事。

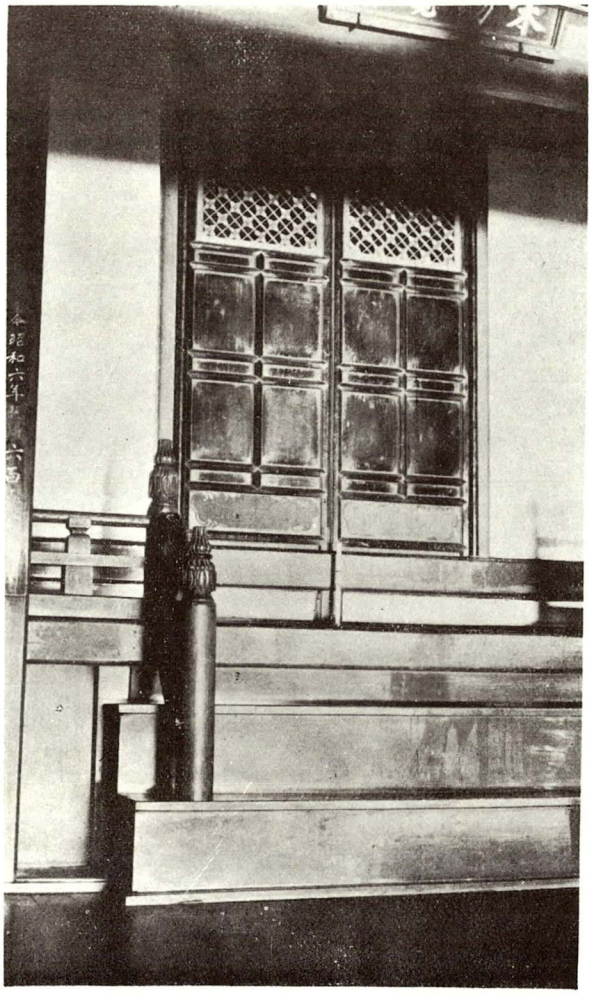


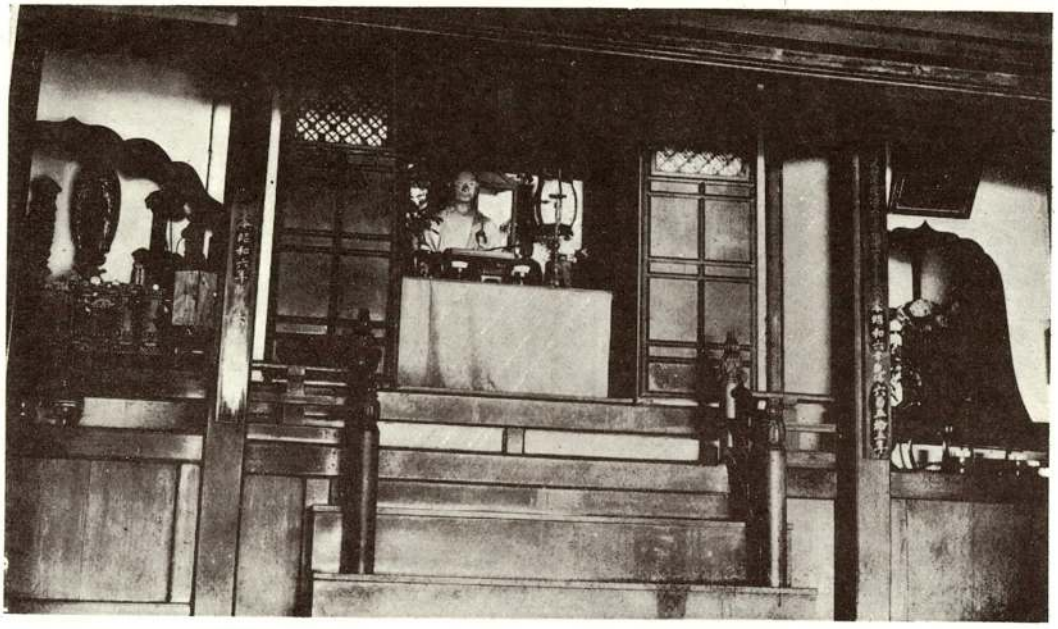
上。第十八圖　正傳寺祠堂正面上部（昭和六年五月十四日）

下。第十九圖　同　下部階段及棧唐戶（同年同月同日）

（正面に立てるは曲尺の一尺）

本堂の中央の間、即ち室中といつてゐる寺があるが、其間に當る板敷の間の後方に、更に奥行は六尺許り、幅は三間位の同じく板敷の室がある。上圖は其室から祠堂へ入らんとする昇段の上の額で、「大宋特賜宗覺禪師」の文字がほつてある。下圖は正面の勾欄と、出入口へ吊込んである棧唐戶とを見せたもので、此扉は本堂より古いやうに思はれる。





第二十圖　同調堂及臍壇（昭和六年五月十四日）

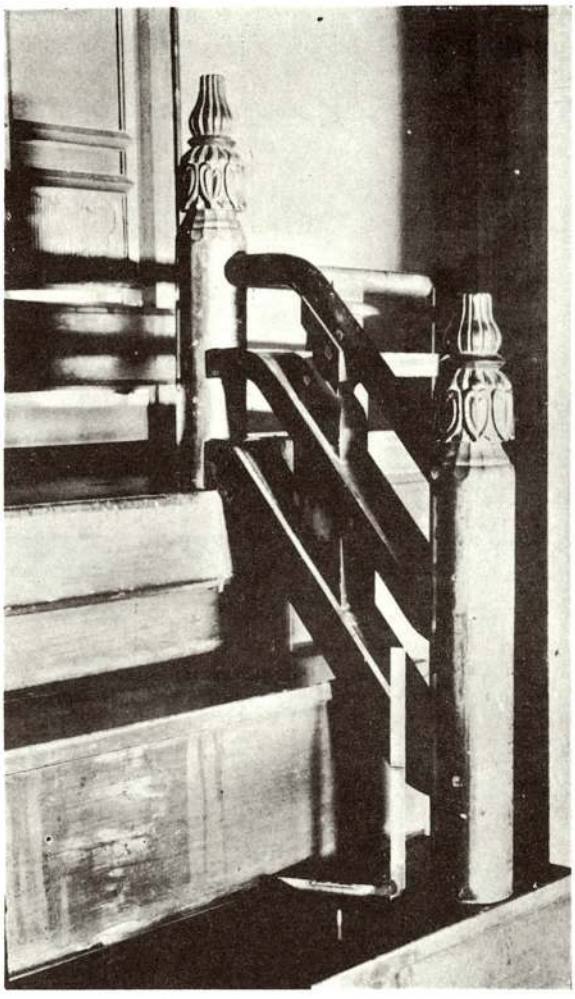
前頁の圖から推して，大概此圖の見當はつくであらう。此は正面の扉を開いた上に，兩脇寶の一部分も見えてゐる。祠堂正面の階段を上ると狹い椽のやうなところがあり，更に一尺ばかり高く祠堂の床があつて，中央に宗覺禪師の像が安置してある。新に塗料を施したのか，夫とも像が新しいのか，禪師の彫刻は私にとつては大して問題ではなかつた。高僧の像に對して，ただ敬意を表した迄であつたが，椅子は大分に古い。

椅子の柱（假にかく呼ぶ）其他に用ひられてゐる材料は大面取の角材で，其大さと面見付との割合は約 1/6，即ち一寸二分五厘に二分であつた。彼方の障屏の上部及び左右に卷き上つて，花模樣か若葉かの形になつてゐる所等，洵に形がよろしい。これ等の點から，先づ鎌倉時代のものとしてもよささうに思はれた。正面の棧唐戸と此椅子とは貴重品とすべきである。

祠堂の右は位牌堂，左は宏量禪師の像を安置す。此等は總て後の增築らしく，祠堂だけは後方に突き出して建つてゐるが，切妻造家扠首，舟肘木の新しいものである。

第二十一・二十三の三圖は、祠堂前の二級の木階につけてある昇勾欄と椽勾欄――上のは椽ではないのかも知れぬが、丁度さういふところに當るから、さう呼んでおいてもよからう――とを大きく見せたもので、第十九圖及び第二十圖にも見えてゐるものである。

祠堂及び其兩側にある脇壇と同じく、木階も勾欄も新しいので、すべて此等は同時にできたのであらう。和唐混淆勾欄で、形も極めて平凡であるが、どういふつもりか四本の親柱が四本共少しく異なつてゐるので、これは態々少しづつ意匠をかへたものと思はれる。さうして謂はゆる「逆蓮柱頭」かと思ふと、さうではなく、蓮から變化したものかも知れぬが、幅の廣い葉のやうな形をしてゐる。



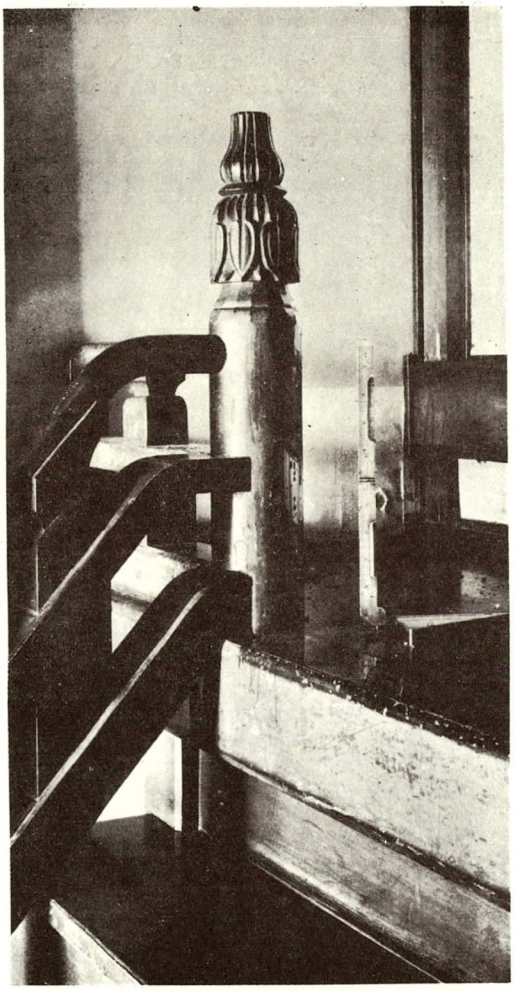
第二十一圖　正導寺祠堂正面北側昇勾欄

（親柱左に立てる曲尺の約五寸（六吋）・昭和六年五月十四日）

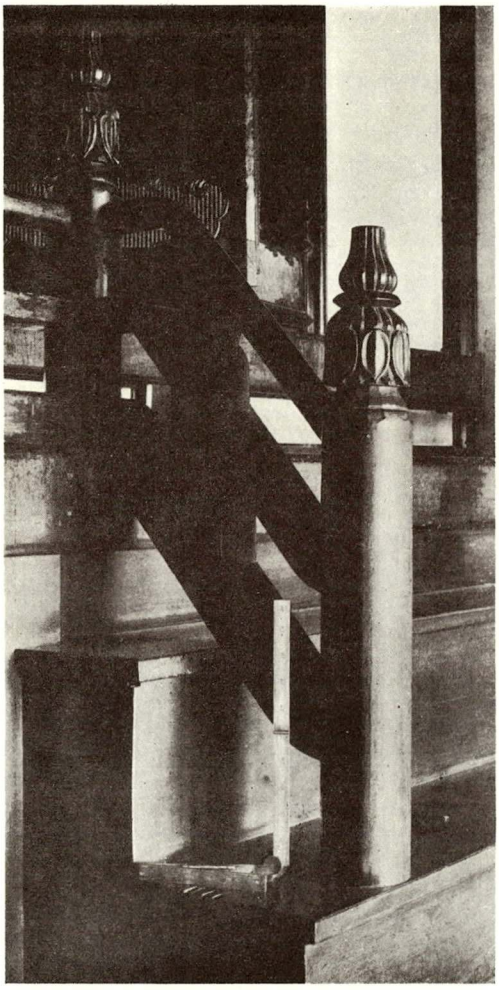
先づ北側のもの、即ち第二十一圖のは、二本共垂れてゐる瓣は心臟型で、下の方は中央の線が出て居り、上の方は藥研なりに引込んでゐる。南側の方は、第二十二・三圖でみる如く、兩方共先の尖つた長橢圓形で同じく下のは中央の縱線が稜をなし、上のは其部分のみ溝をなしてゐる。

＊　＊　＊　＊

謂はゆる逆蓮柱なるものは、別段蓮花をさ（次頁へ）



第二十二・第二十三圖　同南側昇勾欄・上部親柱



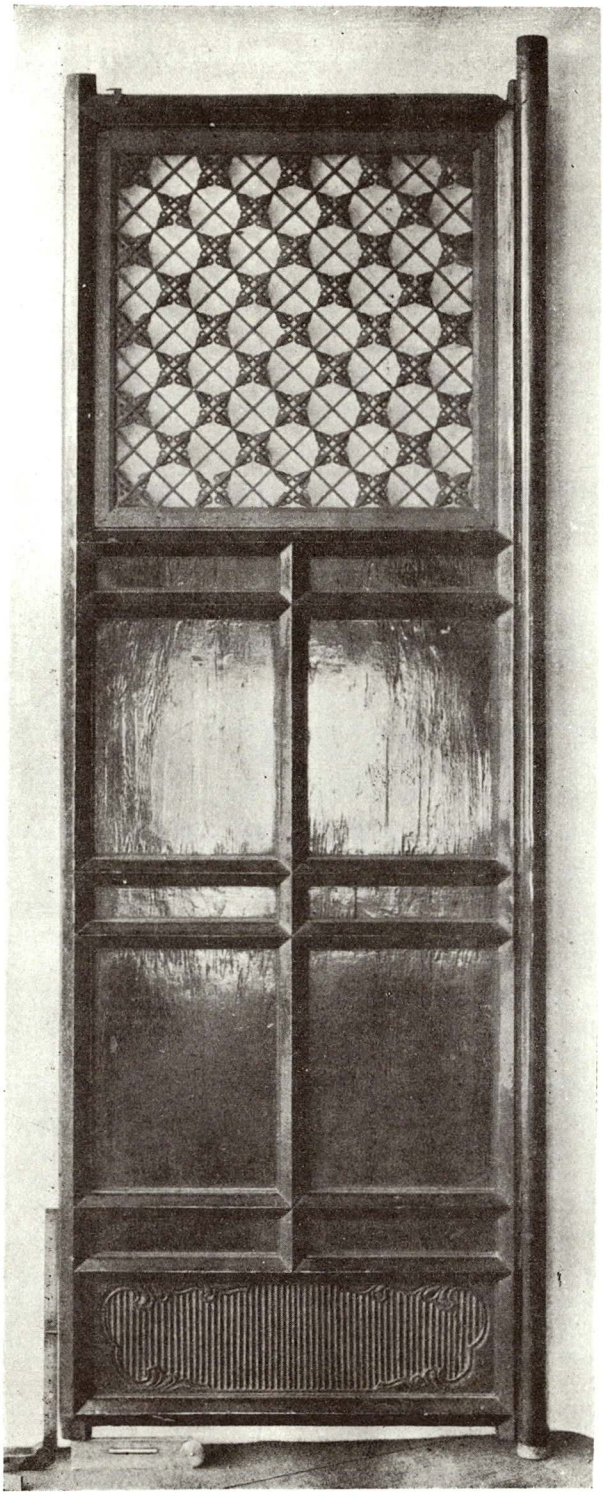
（親柱の傍に立てる曲尺の約五寸（六吋）・昭和六年三月二十二日）

（前頁より）かさまにしたのではなく、開花した蓮の花瓣の一部分が外方に下り、子房周圍の一かわだけは、未だ開かずにゐるところを象つたものであらう、といふことは既に本誌にも記した通りである。併しこのやうなものは、いくらでも意匠を凝し得るので、既に鎌倉時代に於ては天恩寺佛殿須彌壇（愛知縣）、室町時代では向上寺三重塔須彌壇（廣島縣）勾欄親柱のやうな異形なのがあつたのだから、江戸時代へ入つてからこれ位の事は寧ろ當然過るといつてよからう。

＊　＊　＊

此親柱は新しい割によくできて居り、黑漆と朱漆とで柱頭を適當に塗り別けてゐる。一見殆んど同じに見え、仔細に觀察するに及んで、何れも少しづつ異なつてゐるのは、面白い考へである。

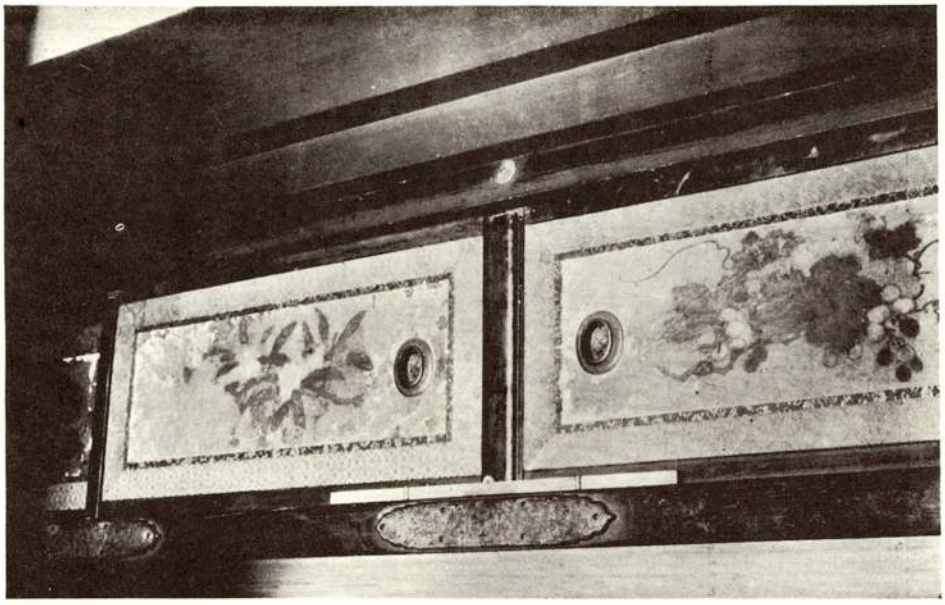
第二十四圖　正傳寺祠堂正面出入口棧唐戸



（左下に立てるは曲尺の一尺・昭和六年三月二十二日）

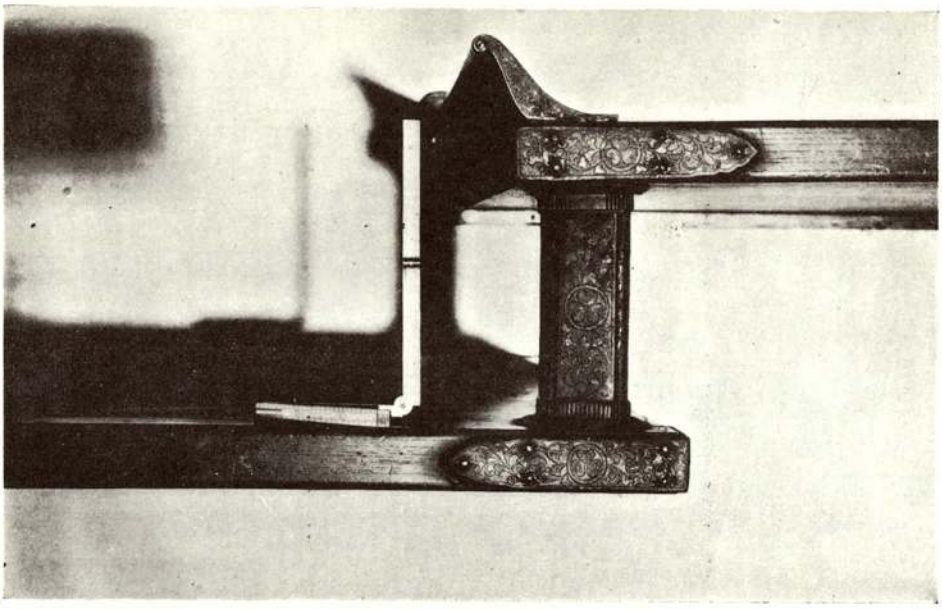
祠堂出入口の棧唐戸を大きくしたもので、これで一通りのことは判ると思ふ。第一に氣のつく事は、棧も框も、何れも著しい「鎬」をもつてゐることである。かく鎬のあるのは、最古と思はれるのが東大寺良辨堂（開山堂）にあり、以下長弓寺本堂・永保寺開山堂祠堂・鶴林寺本堂・日光東照宮境內經藏內輪藏等に見出さるるもので、稀れな方に屬するのである。唐戸面がとつてあるのだと、時代による變化は可なり明らかで、鎌倉室町と桃山江戸とを間違るやうなことはめつたにないが、この種の鎬だと、其廣がなくもない。

廻轉軸が圓形で飛びだしてゐるところや、一番下の間に入つてゐる格狹間の形など、いろいろの點から考へてみると、この扉はどう下げても室町と思はれる。どこかに丁度都合のいいのが二枚あつたので、祠堂をつくるとき、之れをもつてきて——或は此時漆塗として——ここに用ひたのではあるまいかと思ふのである、上の花狹間は素木のままで、且つ後補らしい。



第二十五圖　正傳寺本堂袋棚

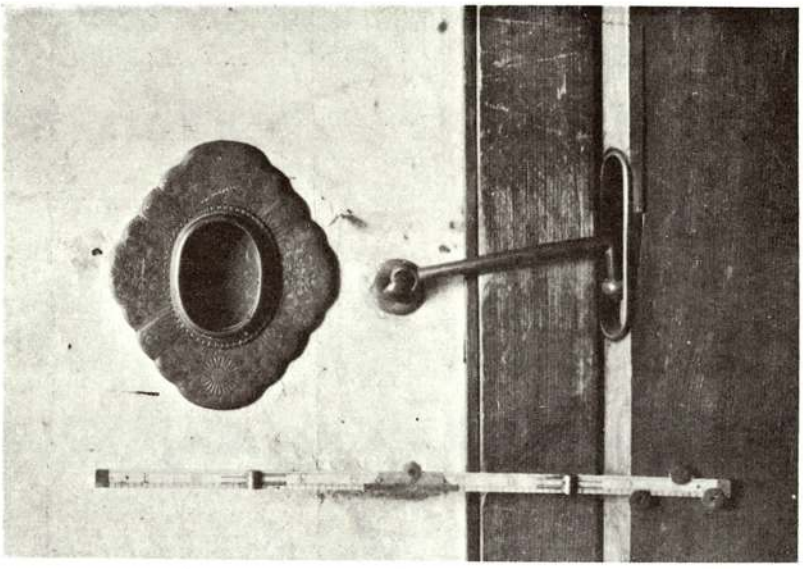
（下に平たくあるは曲尺の約一尺（一呎）・昭和六年五月十四日）



第二十六圖　同棚一部

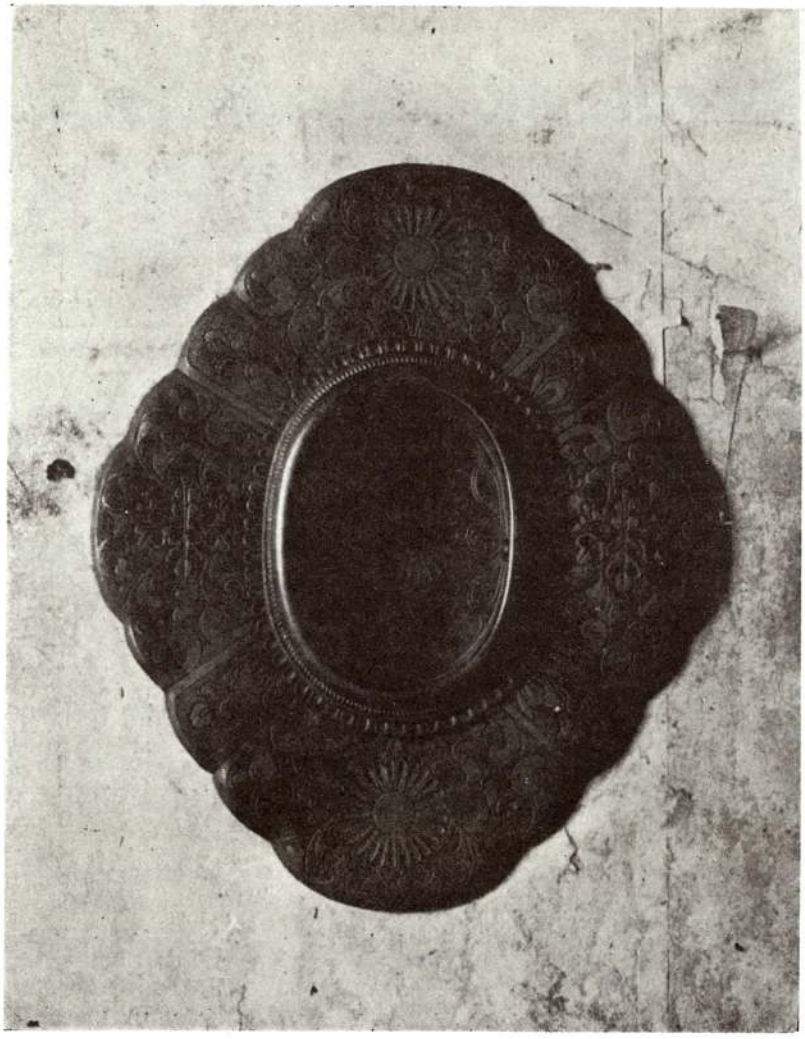
（棚板上に立てるは曲尺の約五寸（六吋）・同月同日）

祠堂の左即ち北方にある六疊間の袋戸棚及び棚の詳細である。袋棚ニ地板及棚ニ側面に打つてある飾金具も古く，海老束や筆返しの比例，其位置等も，江戸時代の木割式と幾分異なつてゐるのは，まだ此時分はさう型に嵌らずにかういふものを造つたのであらう。袋戸棚に入れてある小襖も當時のものらしく，貼付の繪も中中よくかいてあり，向て右から琵琶・葡萄・楊梅・眞桑瓜が描いてあるが，ここには中の二つが見えてゐる。

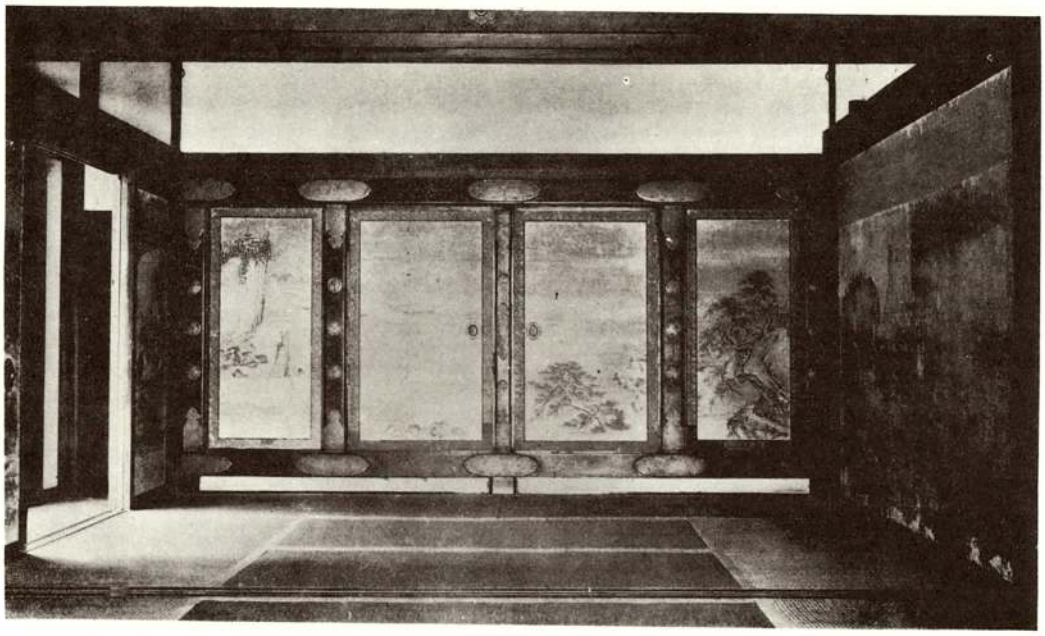


第二十七圖・第二十八圖　正傳寺本堂建具引手及締金物・其詳細

（下に平たくあるは曲尺の約一尺（一呎））



（昭和六年四月二十三日）



第二十九圖　同上段間帳臺飾（昭和六年三月二十二日）

前頁の圖は襖又は張桟戸の裏側即ち室に面せる方の引手及締金物を見せたので，第二十九圖の左の方に同じ形の引手がある。此建物のは何處のもすべて此種の引手で，花菱から變化したもの。上下に二十五瓣の菊，左右に五三の桐，間に唐草を適當に配したもので，桃山から江戸にかけて最も普通のもの　其締金物は，柱の面のところへ環を打ち，第二十七圖の如き裝置で締りをしたので，これも亦，此種の建築に多く用ひられてゐるものである」

第二十九圖即ち上圖は，奥の間の帳臺飾で，左右は動かず，中央の二枚が左右に引あけになつてゐるだけである。內部は此圖に向て左即ち南側の椽から，引違板戸で入る事ができるやうにもなつてゐるが，大目の疊が四枚敷にしてある。併し此引戸及左右つくりつけの部分の裏は，板戸になつてゐるし，西側は極く新しい雨戸が四枚たててあるところからみると，或は初めは椽が西側を廻り，今の祠堂や脇壁などはなくて，北側につづいてゐたのではあるまいか。さうすると此の帳臺飾はほんの飾で，あければ西側の椽であつたのであらう。尙序ながら其飾金具は全部新しいと思ふ。

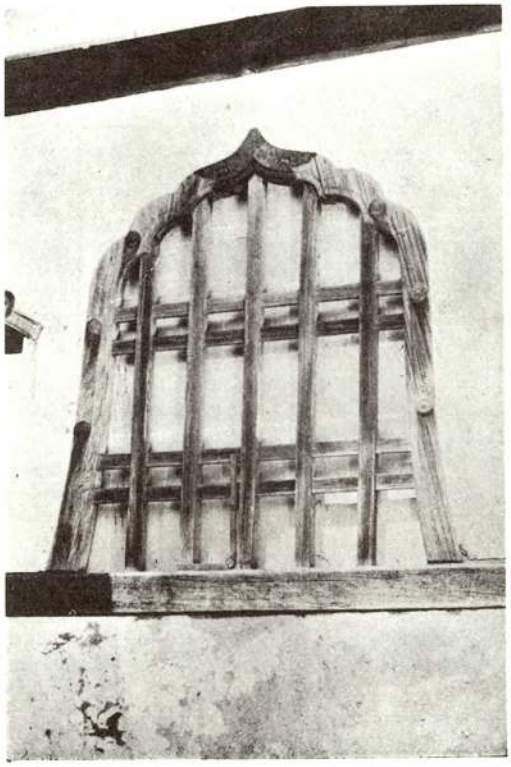


上。第三十二圖　同懸魚及木鼻

（昭和六年五月十四日）

下。第三十三圖　同花頭窓

（同年同月同日）



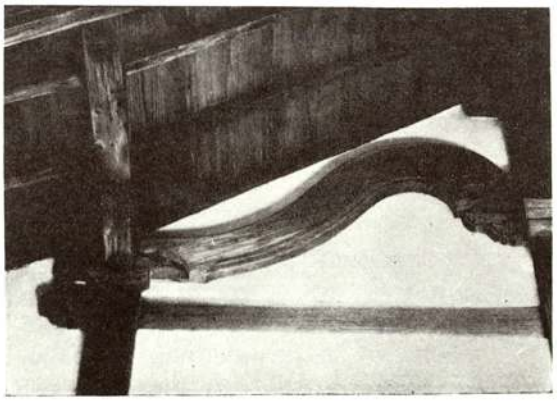


上。第三十圖　正傳寺庫裏

（昭和六年四月十二日）

下。第三十一圖　同海老虹梁

（昭和六年五月十四日）



誌上講座

都市・建築・音響 (十二)

佐藤武夫
中野勉

第六章 建築防音構造

(六) 旅客輸送機のキャビンに於ける防音構造

建築に於ける防音構造を極端に考へた場合に相當するものとして旅客機のキャビンの防音構造がある。このキャビンでは必然的に最小重量の材料で、而かも最大の防音効果を與ふるものをば必要とする。建築物にあつても重量の輕い構造體をば必要とするけれども旅客機のキャビンに於ける程、差迫つて重量の輕減と云ふ問題が重大視されてはゐない。又飛行機に於いては、その機關部とキャビンとは構造的に之を離して遮音することは到底不可能である。機關部で生じた騒音は直接構造體なるフレームを通してキャビンに傳達される。故にその防音構造には非常な困難を伴ふ。

この問題に就いては我國には未だ組織的研究のなされたものを見ないけれども、空中旅客輸送の盛なアメリカでは、ビューロー、オブ、スタンダードに於けるクライスラー及びスナイダー兩氏の研究が發表されてゐる。兩氏の研究の結果飛行中の飛行機のキャビン内の騒音は、九十デシベルから百デシベル位であつたのが、防音構造の結果約七十デシベル位となつたと、即進行中の列車内と略々同様の騒音程度となつたことが報ぜられてゐる。

飛行機の騒音はその性質が複雜であつて、振動數の高いものから低いものに到る頗る廣い範圍に亘つてゐる。既になされた種々なる音の傳達に關する實驗を見るに、振動數の高いものは比較的防ぎ易いけれども、振動數の低いものは防音が困難である。而かも飛行機の機關の騒音中には、二〇〇サイクル程度の振動數の低いものを含んでゐるから防音が更に困難である。又飛行機が二箇以上のエンヂンを有する時には、二箇のエンヂンが異なる速度で廻轉するために、低い唸りを生ずる。

かくの如き騒音を防ぐ重量の輕い材料を考慮すれば、キャビンの壁面には何枚かの材料を重ねて用ふる方法が最もよい樣に思はれる。かかる構造としては、均一質で續いてゐる材料よりも、續いてゐない各材料の表面に於ける音の反射による遮音効果を狙ふのが良策である。何故なれば若し均一質の材料を用ふるならば、既に前章に示せる如くその重量の大なるもの程効果が大であり、而かも之れは輕材料を必要とするキャビンの防音材とは相反するからである。

兩氏は種々なる材料に就き實驗を行ひ、その内數種のものに就いては實際に之をキャビンに用ひてその結果を試驗した。又 Fair Child Plane の乘客四人乘りのキャビンの實際の大きさの模型を作つてその減音率の測定をも試みた。模型は三種のもので、No. 1 は機體の在來のものに潤滑液を塗りその上にニスを塗つたもの、No. 2 は内外を3-

ply wood で包みその間に一吋四分の三の空隙をおいたもの、No. 3 は外部は〇、〇二吋のデユラルミンで包み内部は四分の一吋のインシュライトで包み兩者の間はドライゼロブランケットを入れ、インシュライトの上にもドライゼロブランケットを重ね、內側には穴のあいてゐるアルミニユーム板を防護的に張つたもので、各々の重量は次の如くである。又實驗の結果は第二十六表の如くである。

No. 1 —— 0.1 ㎏/□′
No. 2 —— 1.04㎏/□′
No. 3 —— 1.24㎏/□′

第二十六表

キャビン ＼ 振動數	150－187	250—285	500--547	1,000－1,070	平均
No. 1	1	5	5	5	4
No. 2	15	15	18	23	18
No. 3	30	28	28	35	30

Ford Plane のキャビン內に一時的に No. 3 を作り飛行中に實驗した結果、三十八デシベルの減音率を得た。測定者の言によれば室內の騷音の大部分は何等の設備を設けなかつた床を通して入り來つたものであつたそうである。床に對しても何等かの防音設備が設けられてゐたならば結果は更に良好であつたであらう。

(七) 防音構造詳細

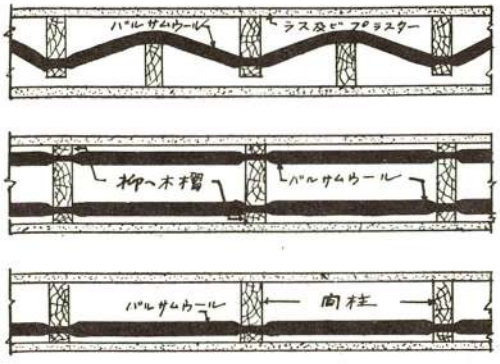
前項まで記述したものは總て防音構造に際しての大體の方針又は方法を主として述べたものであるが、それに對して實際に使用されてゐるもの、又はアメリカに於いて特許を受けてゐる防音構造に就いても述べて見よう。この種の構造の中でも、吸音作用をなす構造は前述のものと大差ない故に主として遮音構造に就いて述べることとする。實際に施行されてゐる之等の遮音構造がどれ丈の遮音率を有してゐるかは未だ試驗された結果の發表されたものを見ない故に不明ではあるが前章に述べられてある實驗結果と比較して判斷することは大して困難なことではないと思ふ。言ふまでもないことではあるが、之等の防音價値が實際の施行如何により非常に左右せられることは重要なることである。

(a) 防音壁構造

第四十五圖及び第四十六圖に示すものは從來最も多く使用される簡單な種類のものの內では代表的な例である。第四十五圖に示されてゐる三種の內では、前章に述べたる如く(1)が最も防音的であり(2)及び(3)が之に次いでゐるものと云へる。かくの如く間柱が互に喰違つゐて、而かも各々の間柱が壁の一面のみにしか直接に接續してゐない構造は案外と効果が多い然しかかる間仕切壁と雖も床及び天井と接する部分に注意を拂はねば案外効果のないものである。この點に於いて第四十七圖並びに第四十八圖に示せる構造には一日の長があると云へよう。

第四十七圖は木造間仕切に於ける場合、第四十八圖はコンクリート間仕切に於ける場合であつて、ステブンス式 Stevens system 特許の構造を示せるものである。主壁及び床に接する部分にこの構造壁の

防音間仕切構造

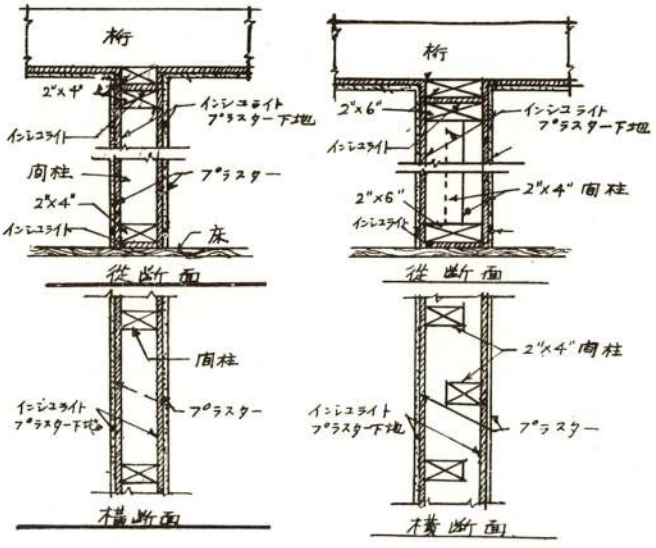


第四十五圖

特徴があらはれてゐる。

(b) 防音天井構造

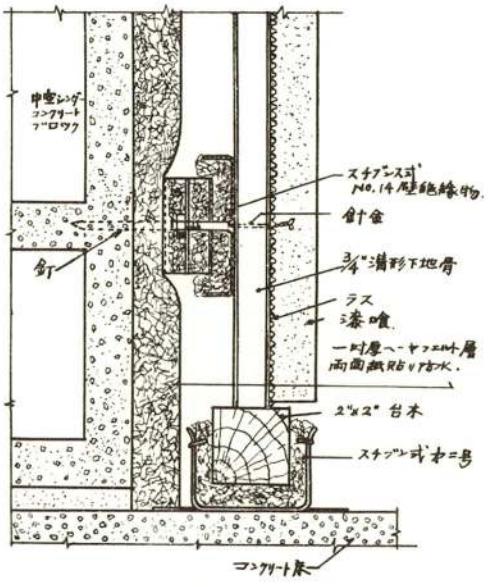
第四十九圖に示せるは木造の天井に最も多く使用されてゐる簡單なる防音構造である。第五十圖に示せるはコンクリート構造、並びにスチール梁構造に用ひられる防音構造であつて、梁の下部と天井との接觸をばフエルト等の柔材料により剛ならざる樣に取扱へば一層効果があると考へられる。第五十一圖及び五十二圖はスチブン式防音天井で五十一圖は木造の場合、五十二圖はコンクリート構造の場合を示せるものである。之れは吊天井式の構造となつてゐる、床と天井の接觸が極めて柔軟であり、殊に響音に對する防備は非常に有効であると考へ



防音間仕切構造

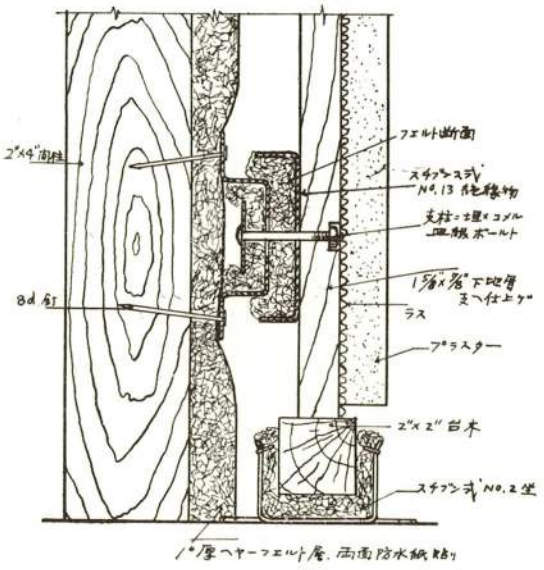
第四十六圖

防音壁構造（コンクリート壁）



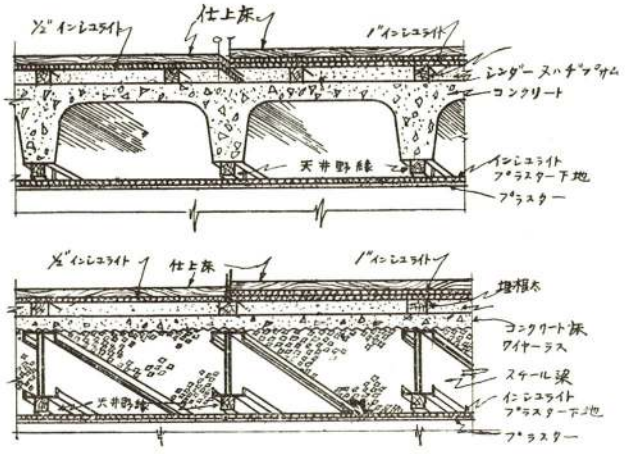
第四十八圖

防音壁構造（木造間仕切壁）



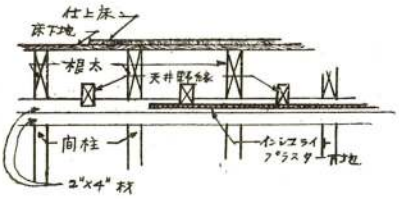
第四十七圖

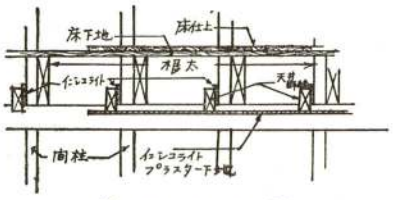
防音床構造



第 五 十 圖

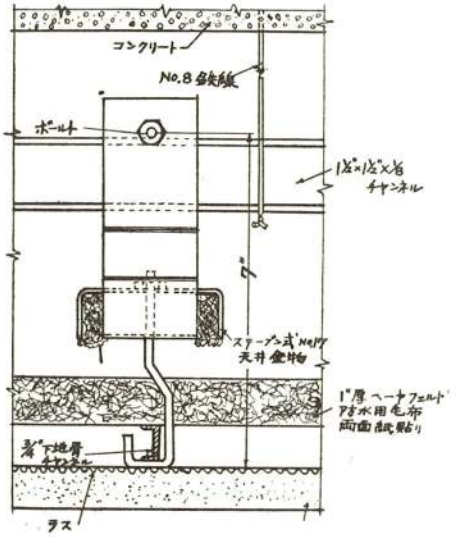
防音床構造





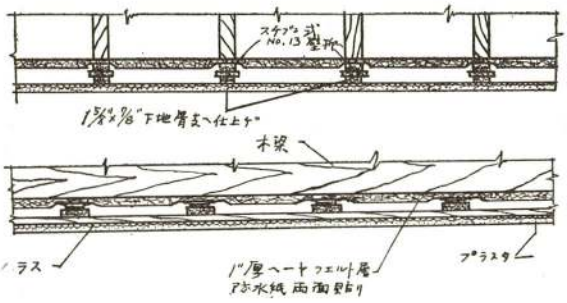
第 四 十 九 圖

防音天井構造
コンクリート造の吊り天井



第 五 十 二 圖

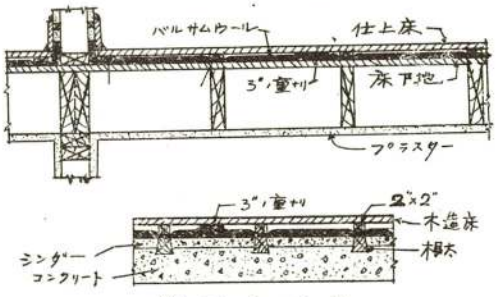
防音天井構造（木造天井）



第 五 十 一 圖

防音床構造

防音床構造



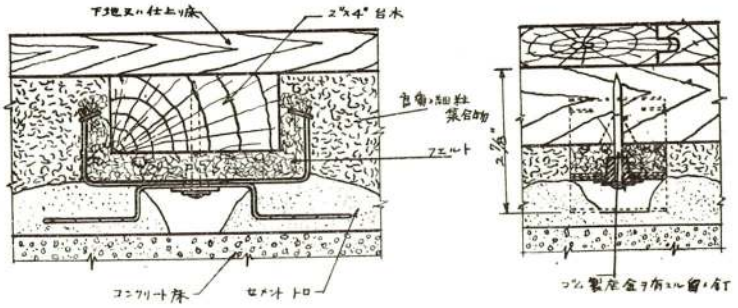
第 五 十 三 圖

られる。總てコンクリート構造の場合には、木造のものに比して空中音に對しては遮音率は大きいが響音に對しては小である故にその構造法に對しては特殊の注意を要する次第である。

(e) 防音床構造

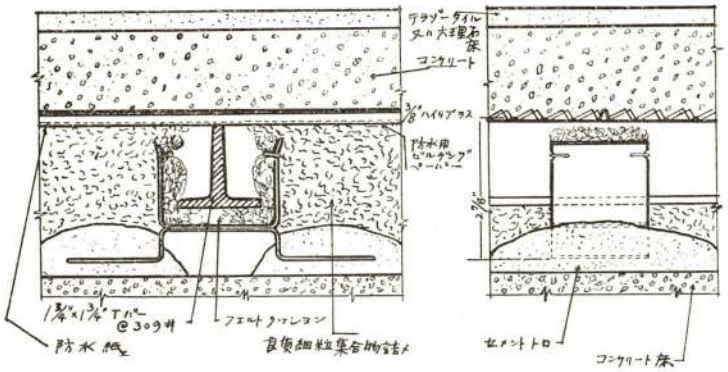
第五十三圖に示せ

るは木造及びコンクリート床に於ける防音構造として、簡單にして容易なる構造法である。前掲の第五十圖に示せるものもコンクリート床に使用される簡單なる構造法と云へよう。總て床の防音構造としては響音に對する遮音構造が主體となる。第五十四圖並びに第五十五圖はスチブン式床構造で、第五十四圖は表面が木造の場合で、第五十五圖はタイル又は石仕上げの時の構造法である。



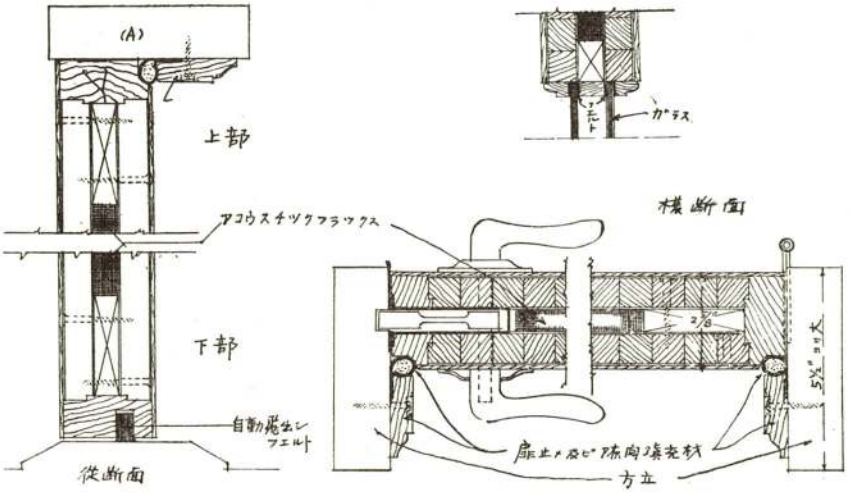
第 五 十 四 圖

防音床構造



第 五 十 五 圖

TRIMOUNT 防音扉.



第 五 十 六 圖

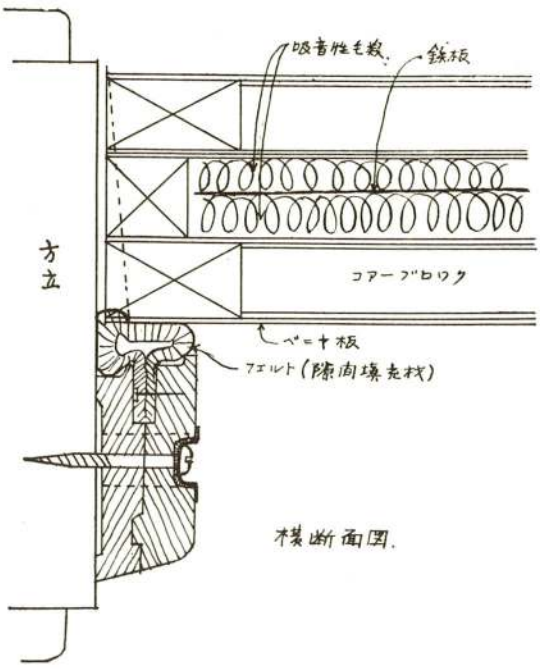
(d) 防音扉構造

第五十六圖に示せるは防音扉として市場に賣出されてゐるアメリカのトリマント型 Trimount Sound-proof Door のもので、第五十七圖に示せるは同様にエバンストン型 Evanston Sound proof Door の防音扉の構造を示せるものである。別に圖は掲げないが之と類似の

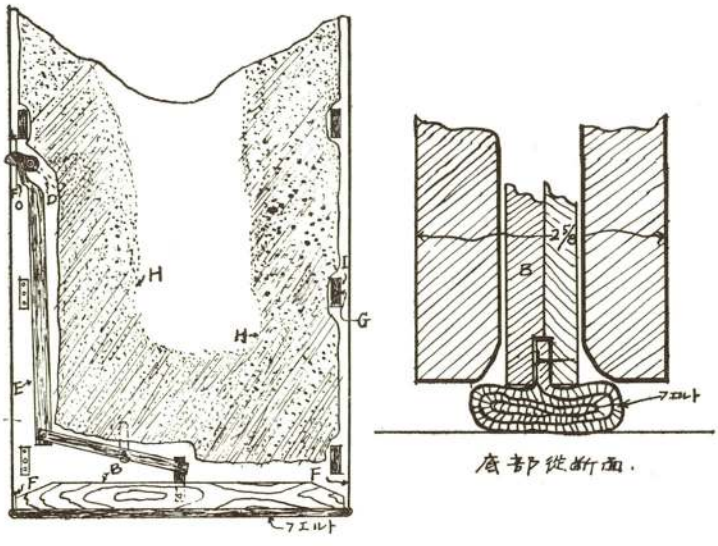
構造で我國では淺野物産の淺野式防音扉がある。何れも遮音構造としてはよく實驗理論の長を採り、隙間に對しての特殊裝置に特長がある様である。

(e) 機械類の防音裝置

機械の騒音には避け得るものと避け得られぬものとがある。機械の設計上避け得る騒音に對しては夫々專門家の手を煩らはさねばならないけれども、一旦發生せられた音を如何にして防ぐかは相當の難事である。現在主として用ひられる方法は機械類の基礎を絶緣する方法によつて、振動が他に傳はるのを防ぐものが多い。第五十八圖に示せるものはスチブン式のモーター臺の遮音構造であつて、第五十九圖に示せるコーフンド會社 Korfund Company のモーター類の底部を支へる振動防止裝置と同様にスプリングを應用せるものである。その他にコルク等の材料を用ふる例としては第六十圖、第六十一圖、第六十二圖の方法がある。第六十二圖のものは第五十九圖のものと類似の構造を有してゐて、スプリングを用ふるかフエルトを用ふるかが異なつてゐるのみである。



第五十七圖（A）

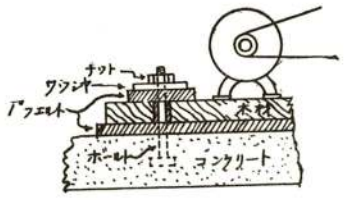


第五十七圖（B）

結

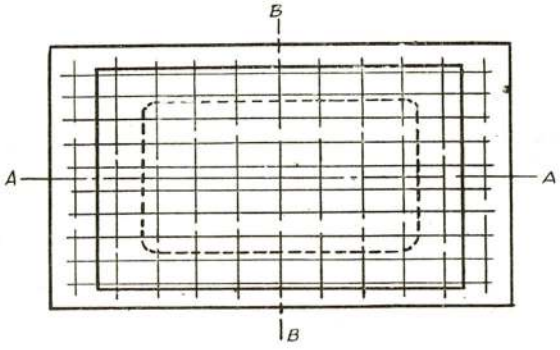
以上十二回に亘つて永々と音響に就いて記述したが、一先づ此處で終結を告ぐることとする。種々の事狀から極めて簡略に記した部分や又は書き洩らした部分に就いては他の適當の機會に發表し得ることと信ずる。

（完）



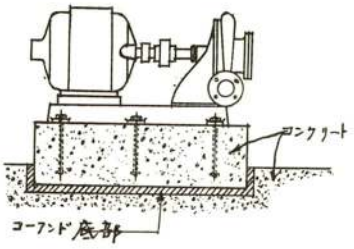
機械底部ト建物構造ト接触部 防音法

第 六 十 圖

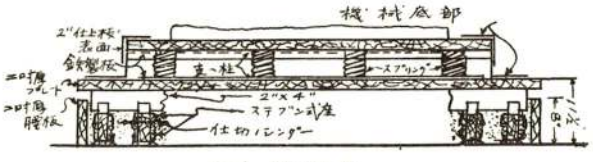


プラットフォーム平面圖

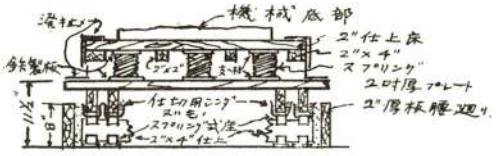
エレベーター室のモーター台の遮音構造の一例



第 六 十 一 圖

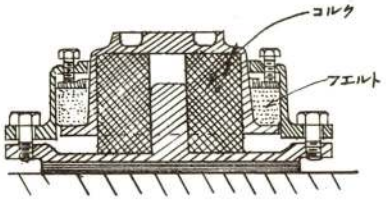


A-A 断面圖



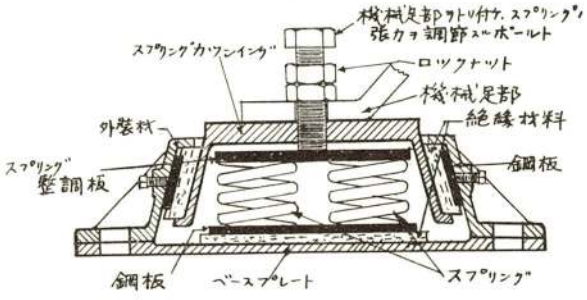
B-B 断面圖

第 五 十 八 圖



Gerb's Support

第 六 十 二 圖



第 五 十 九 圖

『建築と社會』昭和六年度特輯計畫

新年號（一月發行賣切殘本なし）
震火災と建築（二月發行賣切殘本なし）
保健と建築（三月發行賣切殘本なし）
小住宅（四月發行濟殘本あり）
鄉土建築（五月發行賣切殘本なし）
新興建築事務（六月發行濟殘本あり）
建築と都市問題（七月發行濟殘本なし）
住宅（八月發行濟殘本あり）
小賣店・百貨店（九月發行濟殘本あり）
映畫館と劇場（十月發行豫定）
高層建築（十一月發行豫定）
（十二月發行豫定）

本年の特輯計畫は右の通りであります、特輯題目のうち御研究のものはどし〳〵御投稿下さい、歡迎致します、原稿の締切日は前の月の十三日です、なほ十月は豫告の市場を除きて「小賣店・百貨店」を十一月は「映畫館と劇場」十二月は「高層建築」に就て夫々特輯の豫定です。

『建築と社會』編輯部

本誌定價表

冊數	定價	郵稅
一冊	五拾錢	貳錢
十二冊	六圓	貳拾四錢

廣告揭載料金

普通紙	一頁一回	二五・〇〇円	普通紙半頁一回	八・〇〇円
普通紙（前附第一頁）	一頁一回	四〇・〇〇	普通紙（前附第二頁）	一頁一回	四〇・〇〇
普通紙（後附第一頁目最終頁）	一頁一回	二五・〇〇	アート紙半頁一回	一〇・〇〇
表紙二	一頁一回	六〇・〇〇	表紙三	一頁一回	四〇・〇〇
表紙三	一頁一回	八〇・〇〇			

昭和六年八月廿七日印刷
昭和六年九月一日發行（毎月壹回一日發行）

兵庫縣武庫郡今津町浦風五六番地
發行兼編輯人　鷹取陽
大阪市東區內淡路町一丁目七番地
兼印刷人
印刷所　大阪活版所
大阪市西區土佐堀通一ノ一大同ビル
發行所　社團法人　日本建築協會
電話土佐堀四二六五番
振替口座大阪三九、九七五
大阪市西區京町堀羽子板橋北

特約販賣店　柳々堂書店
電話土佐堀二四四〇番
振替口座大阪二二〇八四番

御購讀の向は本會直接又は特約店へ振替又は爲替で前金御拂込を願ひます。

建築と社會第十四輯第九號

廣告目次

ア
有山組……一三
安藤組大阪支店……一三
旭硝子株式會社……五一
淺野スレート株式會社……二五
淺海商店……四六
阿部鐵工所……五四

イ
池田建築事務所……一〇
池田谷建築事務所……一〇
池田組……一三
伊藤建築事務所……一〇
伊藤製作所建材部……二七
石川商會建材部……五三
イリス商會……七

エ
榮進社……二三

オ
オリエンタルメタル製造所……四五
オキナ商店……四四
大阪陶業株式會社……三〇
大阪ビトロライト工事合資會社……二六
大阪製鎖所エレベーター部……一四
大阪窯業セメント株式會社……三
大阪伊丹商店……四二
大阪橋本組……一四
大林組……一四
大倉土木株式會社大阪出張所……一三
大野製作所……一
小笠原建築事務所……一〇
奥村重兵衛商店……三六
岡部建築事務所……一〇
岡本工務店……一四
置鹽建築事務所……一〇

カ
葛野建築事務所……一〇
龜谷開作商店……一五

キ
木下謹三商店……四二
桐田商會……四三

ク
國枝工務所……一〇
熊取谷熊次郎商店……一五
黒川化學工業所……六一
久保田組……一八
クロースルーフキング製造所……六三

コ
鴻池組……一五
駒井喜鐵工所……一五
工材社(阪口芳三郎)……八
後藤商店……二二
宏昌大理石工作所……一八

サ
佐伯組……一七
佐久間建材工業所……一九
笹岡家具裝飾店……三二
三機工業株式會社……表紙二
三稜社……二六
阪本商會大阪出張所……三四
三共株式會社……二一

シ
清水榮二建築事務所……一〇
清水組大阪支店……一六
城口研究所大阪支店……五五
設樂建築事務所……一一
島貿易株式會社建材部……六四
集成社塗料部……三一

ス
須賀商會……三九
住江織物合資會社……二二

ゼ
錢高組……一六
全國タイル製造協會……五九

ソ
宗建築事務所……一一

タ
竹中工務店……一六
太陽社書店……六五
田中昌司商店……三二
田島工業株式會社……四八
田村商會……四〇

ダ
ダンロップ護謨株式會社……五
大元塗料店……六〇
大和工業株式會社……六七

ト
鳥羽工業所……六五
朝永建築事務所……一一

ナ
ナンコク商事株式會社……二九
中村建築事務所……一一
中川辰藏店……一七
內外土木建築材料合資會社……五二
南滿鑛業株式會社……三八
南滿建材工業所……三四

ニ
日本セメント防水劑製造所……四六
日本ペイント株式會社……三五
日本木材工藝株式會社……六六
日本建築紙工株式會社大阪出張所……四一
日本金具株式會社……六
日本鋼製建具株式會社大阪支店……五八
日本石綿盤製造株式會社……二八
日本ドアーチェック製作所……六二
西原衛生工業所大阪支店……四七
西孫南店建築金物部……三三

ノ
野村建築事務所……一一
野澤幸三郎商店……五六

ハ
橋本建築事務所……一一
原科建築事務所……一一

フ
古塚建築事務所……一一
藤木工務店……一七
藤井製作所……五七
藤田商會……二四

マ
眞水三橋建築事務所……一二
松村組……一七

ミ
ミナト製作所……三八
三井物産株式會社……二〇
宮島康夫商店……六三

ム
村上建築事務所……一二

モ
森本建築社……一七

ヤ
安井建築事務所……一二
山中商會……四九
山泰商店……四一
山本東作商店……六〇
矢橋大理石商店……二四

ヨ
横河工務所……一二
横河橋梁製作所……三七
米本商店……五〇

レ
玲光社(木內眞太郎)……五〇

建築事務所錄

（五十音順）

オ

設計監督

岡部建築事務所

建築士　岡部顯則

大阪市西區靱下通一丁目
二十二番地
電話土佐堀五三二三番

岡山出張所　岡山市石關町一二〇番

イ

設計監督

池田建築事務所

工學士　池田實

大阪市南區難波驛前鴻池ビル
電話戎一一二三番

イ

設計監督

池田谷建築事務所

建築士　池田谷久吉

大阪市西區京町堀上通一彌生ビル
電話 一五八一・二九五五
土佐堀 三四〇八・四八六七

カ

設計監督

葛野建築事務所

工學士　葛野壯一郎

大阪市北區絹笠町大江ビル
電話北二四九二番

イ

設計監督

伊藤幸太郎建築事務所

伊藤幸太郎

大阪市北區相生町三五
電話東五七〇三番
分室一大阪市港區夕凪橋畔佐伯ビル
電話西一〇九〇番

ク

設計監督

國枝工務所

工學士　國枝博

大阪市北區玉江町二丁目四ノ一三菱ビル
電話土佐堀四三三三番
東京市京橋區銀座西五丁目日動ビル
電話銀座二九四五番

オ

設計監督

小笠原建築事務所

建築士　小笠原鈔（マヽ）

大阪市北區曾根崎中二丁目
第一曾根崎ビル第四十一號室
電話北二一五五・二一五六番

シ

設計監督

清水榮二建築事務所

工學士　清水榮二

神戸市六甲八幡友田三三

電話御影二三九九番

オ

設計監督

置鹽建築事務所

工學士　置鹽章

神戸市榮町二丁目山口ビル四階

電話三宮(3)三四七〇番